

ゆたかなる君がひかりのさしこそずば春をはるといいかでさるべき
 さて持たせ来たまひしみきすめ奉るほど、物語らひ給ふ中に、こぞ年くれて、園の紅梅
 を根こじて、内へ奉り、また白き一本の、中宮へ奉れり。いつ方も御けしき給はりけるな
 り。中宮おの藤壺に植させられて、近き拜賀の時、おのれものまべきわたりなれば、かのな
 めりと心どめて見よ。其ため、わざと此壺にもせさせ給ふと、仰言下されしに、わきて
 忝う覺え奉りて、など宣ふをうけたまはりて、

おのれさへにはひくは、りひさかたの雲のうへにて君をまつらむ
 かはらけ敷多たびに夜も更けぬ。又宣ふ。吳竹の雪もさるものから、霜こそ一さは見所
 あめま。さる夜に、雪もあれどいや身にまむの吳竹の夜ふけて結ぶ霜おぞわりける、と詠
 めりしに、いかゝあらむかと宣へば、

雪よりもその霜よりも身にしむの更々てあぢはふくれたけのつゆ
 この去年より心地そこなひたるに、今霜のまひ給へるまに、心ならず酔過して苦しか
 りければ、真心のいはれたるなるべし。

文化二年

正月七日、夕つ方より菜つみてむとて、重明ぬしをともなひ、此岡の東をめぐり、淨土寺

村へいでむとす。小松の並立ちたるひまぐより、かの里まで見え置たる。田此おもて、
 かへしたるかへさぬ、色わきて景色よし。三日の日子日あり、いかで来ざりけむと悔ゆ
 めり。さてあを傳ひつゝもどむれど、よき菜もなし。はこべら佛の座、二種のみぞ多かる。
 田づらのさてこそあらめ。野のべおまそとて、北なる白川の里をめにかけて、引たがへ物
 するに、なづなまかしろごぎやうなど、いとさはなり。流につきて上りくるほど、いと清
 らに美しき鈴菜一ふさ、ゆられ流れて、やぶてとりて入れむとするを、重明ぬし、このい
 かにきたなげなる人の、とりあませるおもあらむ、はうり知りがたし。おのがじし摘みえ
 たらむこそい、けしきも情もこもるべけれ。けしう面白からず。とく棄てぬといふに、河
 上にあらふ根芹のこをあらみもるを拾ふにつむおまされり、と人もいはせや。いまだ此菜
 をつみえねば、敷たらはしおも入れ給へといへど、聞か老がほおまきみて、こゝおこそ誠
 にすいしき鈴菜おひいでたれ。かたみ早くなどいふに、持たるをば棄てやりけり。今の芹
 一種ぞたらはぬ。常に多かるもの、なぞやとわびつゝ求めあさるほど、日もくれなむと
 す。里中をどほりぬけて、岡の北づらを西へ下りて、

はつはるの日影のやがてくれおけりみじかき若菜つむとせしまに
 なほ、深芹の根芹のよばひつゝくるに、からうじて川のあなまに見いでさり。

まら川のながれおかりてつむ芹のいといきよくもおもはゆるかな
重明ぬしも、岸にたちやまらひつゝ、打ながめいだせる歌多し。白川の清き心ばへおてま
ぎれおたり。夕月のかげもふぼつかなら、雲の絶間に見ゆ。

はるの野の澤邊のわか菜つみためて洗ふほどおぞ日にくれおける
一ふさづつ打すゝほど、時うつりぬべし。其間重明ぬし、岡のつかさお上りて、めはる
柳一まもと切とり、そがまづ枝にかたみ結びつけ、南さまに歸りくるやど、風いと寒しや。
有信のかゝるまびめきたるすさびおひ、すゝろぞわたるまき人なり。内のみ節會をど事繁
きおや、まかりかへりこねば、今日しも洩れぬる事のいと口をしう、おほやけづかへも、
さる方おのいとびんなしなどさゝやくこそ、おはれ中なるまれ心なりけれ。くれてのち
花園三位の君より、御使たまはりけるに、かのまら菜、枝ながらみ使につけて奉る。ほづ
枝に結びたる、二首。

つみいれしかたみのめさへあらければもれてやあらむ七草のかま

つみはやま片手に千代をかぞへけりかまならぬ菜と思はざらなむ

二十七日、けふの乙子なり。か此若菜の日、みおさつる白川の小松原、いとなつかしう思
ひいでて、隣なる重明ぬしと共に、近きあたりなる有信ぬしをさそふ。垂雲軒の主・玉芝

法師、行敬主の三人つとひて、酒のみませる所なりけり。いざといふに、主人の、こよひ
内のどのゐに當り侍れば、えゆかずといふもいと口をし。さらば三人のまらうどたちをひ
きゐいでむといふ程、雨ふりいでぬ。いかいなどためらひがちなるを、濡れてこそい縁
も一しはならめど、行敬のそゝろぎ立ち給へるに、皆酒さへのみたれば、いなむべうもな
く、主人のみ残しかきていでむとす。さる時、近き垣根より、ひた引きならすに、人さへ
おどろきぬ。この隣の庭にふせ植ゑたる苔の上を、鳥のふみあらし、或いはり穿ちて、虫
などついばむを、うの主人のいとにくまひて、かくい構へたるなりけりといふ。かの家根
に繩ひきたらむ例も思ひいでらるれど、又蛙くはせぬなさけ心おこそと、いひたはくめり。
となりよりおひちらされて此やどの花にあつまるも、千どりかな
うちいでたるに、南の方につらなれる梅林、いと盛なり。

まらたへに咲きてにはへる梅が香のうへにうきたるおはた山かな
さて岡の東づらにいでたるに、たゞばかりなる松原、のびませて打なみたり。

をのざさの小まうがはらの木のまよりはるかに見ゆるまら川の里
おもふどちひきてゆくともまらせしてまつ久しとまつや恨みむ

浄土寺村を、玉芝法師にまめして、

さきだちて君志るべせよみはとけのいますみ國の名におへるさど
此あたりの小松、いさゝかばかり曳とる。いと面しろき松もあめれど、もとより人の志め
たる岡べなれば、緑の林がぐれぐちに物せむも、人めせくなど思ふめり。

同じくいぬまみてだも得たきかな松のよもてる千代のよはひの
白川の流おつきて、さかのぼりに上りゆく程、雨いやふりに降り、時もおそければ、山越
する人もなし。麓の萬屋といふに入りて、袖はしなとす。なまぐましの薬どりに來たるが、
まわざならむ、さうじに墨くろく、其意をたはれがきにまたるから歌あり。これを見てよ
める。

志賀の山かいぬくまりのたねあらばのぼりて取らむ雨のふるとも
松もおそきけ、高くなうたひそなどいふ人もあめり。山を見れば雲のみ上りて、いとけう
とければ、誰もく進みがてにして、もとの道に下りく。ひたついきに咲きつゝさるる梅
の盛いとよし。白川の名の梢にかゝれりけりなごめではやま。やがて野づらに出づ。

うちかすむわが岡さきの松の葉のよそにありてぞ見るべかりける
もとの岡に立ちかへりたるに、夕かげおさへなりければ、今人のどがめむも忘れて、打
みざれつゝ、心のひきく根おじ物めり。篠が根にからまれたるのいとましく、なごあ

えぐ聲聞きて、

ままら雄らたけびてひらど山松の千代の根ざしのかたくもある哉
をかのべの小笹がはらのこまつ原ちよどかはせる根ざしなるらむ
黒谷のいとくろく暮れわたるけしきに、打驚き、山陰をくだりにまべりありぬ。

さく梅のにはひえめたるころも手を松のまづくにぬらしつるかな
日のくれに越ゆる山路のいそげとてつきおろしなる鐘のおどかな
三月二十日、敬勝春及二人のぬしにともなはれて、山ばなの里なる麥いひとろ汁くひに
行く。うか谷といふ酒など汲みて後、皆さずきに寐たり。さて寝ながら見れば、八幡山崎
の打はなれたるさかひ、二つの眉に似たり。葛城などの霞みはて、そことも見えす。又
垣根なる櫻 風のまにく枕邊にたいよひ落つめり。とばかりありて、旅人の三人四人、
むらひのさずきに腰かたけて、さゝめくに目ざたり。

やまばなの花のかけなるひるねをばえひふしたりと誰か見ざらむ
さて此ごろ杉板もてものせる一絃琴を、須摩琴と名づけて、世にもてあそぶ人多し。この
中納言行平の、かの浦おさすらへ給ひし時、つくりてひき鳴らし給ひしかたなりといひ
て、世に時めかすめり。それを比えの麓なる可官ぬし曳ならひて、引きはこるまゝ、なみ

くならむの面白からずとて、葛を緒にすげて、音羽の瀧のあたり、曳まきみけりといふ事を聞きつたへて、二人のぬし、殊の外にゆかしがりて、是よりとぶらはむといふ。さらばとて、山かたつきて上りゆくに、かの瀧の末なる谷川の、いと清う流るゝをきいて、

音羽がはこのひとすぢのながれあそかの葛緒にかよふべらなれ
さてかのぬしを、敬勝のそゝのかしてゐて来るを見れば、かの緒琴二張を、おのゝ携へて下りく。春及いと嬉しみて喜こむひたり。同じく高山にのぼりて、けはしうこゝしみたる鬮をこそ聞かめ。瀧の糸によりあはせむの、ひきふり給ひなむといふに、みないふ、赤山のわたりいと静にこそとて、やがて北さまに打こえて、かの社のうしろなる一家に入りて、いざゝと勸むるほど、夕日の谷陰の木間にまづみ、池のほとりの櫻の池水にちりぼひ、またり柳のいとおもりに打なびき、のどやきたる夕ばえなり。

あしひきの山かづらをのこととりて我やるこゝろたれまらめや
たれかまらむ、と折かへし歌ふに、梁の塵もうきたちぬべうこそ。春及も興にたへかねて、腰なる笛ぬきいでて、外の方の物かけに立ちもどほりて、吹きすましたり。

木がくれてきみがまらぶる横ぶえをよこ山おろしよくかどぞ聞く
やがて傍に横山といふ山あるによりて、かくの歌へるなりけり。日もくれぬめり。山つ

きなるどの宮のあど荒をがませむとて、可官さまにたゝして、かのわたりたゞみ廻るやど、あはれ身にしめる事のみ多かめり。

ながれての音羽のたきのおどにのみこのるむかしのどの宮どころ
大きみのみふね漕ぎよせあそばし、嶋まつが根やむかしおふらむ

五月、伊丹里、逗留中日次のうち。

この日頃さみだれのをやみなきに、我さへふしたれば、人々もくらし兼て、さる歌など詠み給ふ中に、五月雨此詞を、皆がいつらねられたるを見て、枕もたげて、同じ心ばへをかいなぐりたる、何をかものしげむ。

旅にして病みこやせるばかり、世のわびしき上なむなかりける。ましてかう五月雨のふりつづく頃、月さへ日さへ雲のよそにゆきかひて、あいなう見すて顔なりや。其あるじのみ心づかひ、病む人よりいたかりつべう、心ぐるしう見まらするに、此夕べしも、畫巻ものどう出て、この都わなりの所々をるせるおて、常に現にみならし給ふらむを、などわびがさふのさまふも、かゝる折のいとなつかしうて、とりあへず打ひらくに、千早ふる神樂岡の、山蔭の中納言の物し給ひしなど、まきくしうかいつけたる、此方に春秋の遊のさまなど、吾まゆる門わたり、ゆるくしうなつかしげ

にけしきとりてかいなせるに、住みあける垣根わたり、俄に戀しうありぬるに、浮世繪にうかれて、幼心おやかへるらむ。病みつかれたるはま心地おやわるらむ。あの頃の春のおはざれて、松の葉がちに、ひざをぐに入れたきまこ庵の、荒庵なることを忘れてなむ。

八月十日、先つ日備前の兒島なるかつたぬしより、西行のつみ貝のこと、わけづらひ遣はせしかへり言に、山家集の、おりたちて浦わにひろふ蟹の子のつみよりつみをならふなりけり。といふ歌に、其貝をそへて送られけるが、道おて碎けそおなはれたるを、今日奥村の尼君より、久しく病おわびたる事など歎きこし給へる返事、何くれ申し遣はまついで、かの貝を包みそへて、

くだけての誠につみもなくなりきさてもかくてのかひなかりけり

十八日、さきつ頃、前圓満寺物せられし、奥州會津ある柳津のかたに、書き加ふ。

山の高さ、川のはしるさの更なり。巖此そばださしう、こししみ上り、垂水のたぎらひてみなざりおつる、おはやうかくも寫しどりけむ、其いきはひ其ひききの、世にいひえらず類なからむに、眞に打向ひたらむ後おこそ。

いかにせむいさやと思へどたまはこの道のおくなるやなぎつの里

妙法院宮、あしのけの御病重らせ給ひ、畏くもこの八日の日、みかくれさせ給ひぬ。此宮の、かけまくも畏き、すめらみことこの御このまに渡らせ給へば、世中ゆすりてもていつき奉るに、御心ばへさかしくおはしませば、何の道々も深くたどり辨へ給ふ中おも、我敷島の道にたけ給ひ、あがれる世のみ慕はせて、野中古道ふみさけ給へりしかば、末ぐまゑなるちまた、又さはりぬべさうばらもなく、絶えなりし古北跡も、大方かくれたる隈なむなくなりおたる。わなみ、此み恵をかゝふるに畏きものを、五年はかり昔の夏、今小路行章を御使として、月々の御集ひの御題をたまはりぬ。いと敷ならぬきさなき言の葉も、仰のまに、一度もかれず、此年まで奉りあげつ。又御つどひの日、まうのやりてよ。兼て病み惱める身ときあしいませば、おきふしかのがまゝに息ひてなど、いとく忝き仰言ども、うちくの御使に、まばく承はり奉りながら、思ふ心ありて、強ひていなみ奉りしも、憚りゆゑしき罪なるを、廣き御うつくしみのあまりに、ゆるべおき給へるなりけり。又ひとせ、小澤蘆菴およらせて、御言傳たまはく、なごさばかり病みこやせる。道の爲に思ひて、心を用ひんおひ、さるまじものゝいえたゝさらむ事やある。つゝしみつどめよなど、宣ひ下されし。かくも病みはけたるおのれお先だちて、御かくれさせ給はむぞい、おぼしもかけ給はむと、今更何くれ思ひかへし奉りて、悲しさも忝さも、身おまむ

秋の夕べなりけり。今宵なむ、うの宮近き御寺にはふりをさめ奉ると聞けど、猶病にふしをれば、え、み送の御供ふもつかへ奉らで、小雨ふる庭にたちもとほりつゝ、

いまの只阿彌陀がみねをふしをがみ南無といふより外なかりけり
たかひかるみこのわら魂たまちはひてりとほらせよ敷しまのみち

閏八月廿日、猪名の里の月花の歌結、よしわし論ひつかはしける、其奥にかいつく。

此歌結のいとわやしき、左の男うたひ、皆なよやかに女々しくて右の
女がたの、たけく雄々しきよとよ、あや唐國にいへる、陽の中の何がし、陰
の中なるくれがしならむ。

いとわやし怪しきものゝうれしき月とはあとのすがさなりけり
文化四年

正月二十三日、今日俄に佛光寺君いらせ給ふ。いとせめて頓の事なれば、庭をだに拂ひあへぬを、雪の清め顔にふりまけるぞ、心ありける。みはらから正行院殿も、とばかり遅れていらせ給ふ。仰に隨ひて、けふの御題を奉る。其題、

春の雪 梅の花ある家にまらうど来る

あのをたりの歌よみ人あも、皆よませてたいまつる。君のも人のも、外に記したれば、茲

にんかのれがのみかいつく。

かきくらし日影のそらに見えぬともきえこそわたれ春のあわゆき

めづらしき君がきませるうれしさに梅のはなをも今日の見ぬかな

暮れむたりぬれば、さうじさしこめて、と物語し給ふほど、御盃また、びめぐらひ、夜も半たけぬめり。さて歸り給はむとて、まらうどさねの君、よみ出し給へる。

此やどをきみいなみあひいかふせむ道のなが手をゆきにあへる日

みあかりさしげつゝ、みかへし奉る。

このやどのわがやどならざうぐひすの君まらえたるはなの宿なり

二十五日、文會。紅梅、

紅梅のいづくにゐるも、いとこそ目さむるものなれ。宮わたりのついがきに、心高うさしのびたる、いふべくもあらざ。あやしき山寺などに、あいなうかりをかれて、

短きはつ枝に、いとせめても咲みちたる。ある春雨ふりしめたる日、わざどのあ

で打まどへる中も、片なりあるわらはの、おのが丈にあまれるを、何がしのと許より

とて、やをらさしげいでたる、一際はえくしう目さむる心地す。

又

岡の麓に、稱名の聲木魚の音聞ゆるの、小乗のりちまもりまめて、尼法師たちのおはまどかいた庵なめり。杉の垣根のかればめるも、うらなつうしき心地して、とばかりたいずまふほど、雪ちりばひて降りくれば、そよやど打仰ぐに、色こそ紅梅の八重が一重はころびて、ひたひ近うさしいでたるこそ、かけてもおもはぬ色なれ。

二月、伊丹へ行く道の記のうち。

十三日、けふのことにて天氣よし。例の三島江のわたり、おもしろし。

みしま江のみぎはの蘆におくまものどけても見ゆる春のいろかな
見わたしやまらひ居るほど、汀の家より子抱きたる女の、沖へを指さして、あれのくよばはるふぞ、波の間をよく見れば、鶺鴒一つ浮べるが、浮きみ沈み、打はぶきて、水煙たてたるに、朝日さへさらくどさしわたれば、おほろかにまばゆくて、まかとも見えわかき。何するふかど問へば、かれの鯉を吞まむとしけるに、程より大きく侍れば、口におふれてえ物し侍らず。さてもさし捨てかねて、臂もてつきまろひ侍るなり。さるおもても誰も出ぬよ。あれの如何おなどいらだちの、しる程に、若き男の子二人まで出きたり。蘆まの舟に飛びのりて、むやみ解きはなつまに、一人が漕ぎいざせば、舟そらにまろびながら、やがて其處に漕ぎつけて、どかうすと見るまに、取りえたりや。隣の光りたる、尾ひれの

動ける、遙にも心地よし。さる騒に頼のたちはなれて、上つ瀬におりゐて、いきづかひ休らへる様なり。

沈みてもくるしかりける世のなかのこひをばうとや思ひかけなむ
ほねのこを折りて人おぞとられけるうといふ名こそ空しかりけれ

三月十三日、ふたたび嵐山の花見む、けふぞ盛の最中なるべし。同じく曙のけしきをとて、夜をこめて出づ。行敬、高敏、重明、幸文のぬしたちをとともなふ。斧木ぬし、阿元法師の二人の、さる夜露ふみて出でむむわびし。さりとて此曙にはづれむ口をしとて、昨日よりぞ出でさせるが、あの麓にて待ち給へる契なりなれば、いとぞまう心いられて、いまだくらきにれのくさそひかはまさま、かしらに物いさき、おゆひの紐かたくまめて、さすがに人の夢驚かさじと伺ひがちに物すれば、かの明けぬかざりを命として、夜討などする者のあらひいづるおを似たりける。あなさうしや、二人の友の先へゆきたるの、此夜討を聞かちしるなりとぞ笑ふ。さて惠岳法師の、今日の料なる酒肴、何くれくはへて、三條の田井なる一家おて待ちうけ給へる契なるを、明はつるまで待たせとも來まおねば、今の腹ださしうさへなりて、醜のれを法師よなどの、しりすて、皆さし急ぐ中に、夜をこめて出にしかひぞなかりける道おていづる朝づく日かな。と歌へるを聞きて、

あかねさし出づる朝日にあらしやまにははむ花をれもひやるかな
宿とどのあさけのけぶりたちのぼりならびの岡も見えずなりぬる
大井川に來たれば、辰すぐる頃なり。たてつらねさるさきくを覗き見るに、いまだ人
の來ず。かの二人のぬし、いやはてなるさずきに、筆紙どうで打まづまりはす。此の
れらの汗かきなで、遅かりつる事、何くれと語る中にも、阿元法師の、またり顔には、
ゑまひて、昨日よりの興ども語りつけ、ねたげなる歌どもつゝまりはめかし給ふ、い
とにくし。さる程に、腹のいやへりにへりけれど、惠岳法師の來まさず。今の皆たへかね
て、舟屋がさずさみて物くはむとて、彼處へゆく。此舟屋の我里より來て、年々花の頃の
みこゝに物しをるなりけり。かくするうち、柿色の衣まじり短うにきて、かつらまきの杖を
つき、歩みきたりて笠ぬぎたるを見れば、鞍馬の僧都にておはしけり。次に同じくわやし
げなるが、ふつゝかに肥えふくれて、腰の玉かつまくゝり付けたり。かのもみくひけむ
國栖人かど見れば、渡邊の翁祐ぬしなりけり。このくゝめづら、怪しうも打わへりといへ
ば、何かの怪しからむ。この曙のと聞き侍りて、追いつきまゐらせたるなりとのたまふ程、
黒き衣を紫の紐めて脛高にかへげて、あまたいしう來たる人の、あが佛のみろくばさちと、
此曉よりをがみ待ちさる惠岳法師なりけり。事の違ひをかたみにいひて、かつ笑ひかつ怨

む。かくて腹さへつよまりたれば、いと騒がしきまでなりぬ。いと河上の花見むとて、
おのがむきく立ち散りて遊ぶめり。

うかうつるはなのうへゆくいかだ士のいかにうきたる心なるらむ
よそにしてくだす筏士いかかゝはあひさうりとまゐるやまらずや
つぎくゝに下すいかだのみなれ棹みなるとすれどあかずもある哉
かざりなくのどけきものに聞ゆるの龜のをやまのうぐひすのおゑ
また瀧に向へる所のさずきを集ひて、かの持たせきたるもの、飲みくひす。今日の法輪寺
なる虚空藏ぼさちの十三參とて、齡法の數に當れるわらはの、男女をいはず、都も鄙も詣
でくる事、此近き年頃より盛になりて、賑しき事限なし。今年の花の盛あさへ打わへば、
舞子あそびの中にこきませて、歌ひさやめく様、物ぐるはしきまでらうがはしければ、まじ
への岡に入りて藤などもむ。

わらし山はなの木末のたかければまたわらびをも折りてけるかな
雨ふるべうなりにければ、渡月橋を渡り、向なる家に入りてあそなど立騒ぐまに、降り出
みけり。山かたつきたるふで屋といふに休らひぬ。行きかよ人の、ぬれじとてそゝるぞわ
たる、いとうからむもの、見るに興ありや。十首の題を出して、皆よみける。井せぞと

いふをとりて、

大井がはちりたる花もまじるらむ井せぎにかゝるみづのまらなみ
かくて暮るゝまに〜、いや降りによりまさりければ、今の歸るべきすべもなく、皆一夜
宿りおけり。

大井川たかくなりゆく波のおどにまさるみかさぞおもひやらるゝ
大ぬがはやまのさくらやちりぬらむたえまもかかずなく千鳥かな
おほ井がは此くれよりの雨なれどいかだのみちのたえやまぬらむ
なみの上にうかぶと見えし龜やまの見えずなるまで降れる雨かな
ふる雨にくもりわたたりて山さくらおぼろにだおも見えぬ夜半かな
つとめて見れば、いと清くはれて名残もなし。青かりし水黄おなりて岸にあふれたり。さ
るかたお又見どころあめり。

四月十日、けふのれが四十の賀、同じ里なる垂雲軒のあるじ、木下うし、とりまかなひ
て祝ひ給はれるなり。もとよりうち〜催せるほどながら、猶つどふべき人多かめればと
て、東山なる双林寺おて、とりたこなふ。祝の題、新竹、そのおのれが歌、

おのが世のたけさるものを若たけのわかしとばかり思ひけるかな

文の残花の宴、このいまだ得かゝず。すべて阿元法師ぞ奉行し給ふ。歎ひの庭に、法師の
たちまはむいかいなどいなみ給ふを、さる事忌せむい、祝はれ人の心おどよるべき。か
くは〜しきおの、物なれたらむこそいむねなるべけれど、強ても頼み勧めたるなりけ
り。散位行敬ぬしぞよみあげし給ふ。上達部雲の上人のおほむい、三度かへし歌ふ聲、山
彦にこたへて、萬代と聞ゆるも、いと忝うかしまりて、うつぶしたるに涙もこぼるべし。
つぎ〜よみをはる程、時うつりおけり。引きつゝきて、當坐あり。おのれがとれる題、
松鷲、

かたをかの小松がはらひ遣けれどこゝにきてゆるうぐひすのこゑ
花園入道の君より、今日の料おとや、短冊一包、大きやかなる松の折枝に、えび染の薄様
おてつけられさう。枝ぶりより葉のおさやさたるまで、御心づくしきは〜しうわらはれ
て、御前の岡の隈をやもとめえり給ひけむと、いと忝し。其まづ枝にむまばれたる御歌、
いろかへぬ松のちとせにも〜とせをそふるの君がよはひなりけり

比叡の麓なる赤尾ぬしよりの、虎杖の杖を贈られたり。其たけ四尺ばかり、其まはり三寸
餘のめづらものなり。色いいとつやゝかに黒みてうるはしう、手束の二重の緒もて巻れた
り。下紫に上青なるい、松がさねの心まらひなるべし。ふしの七節をあらはされたるも、

心ありげに見どりていと嬉し。さて添れる歌、

ことしより老の名だてにきみつかばこれつきたまへ虎のつゑなり

的場復齊ぬし、今日の題の若竹を、無幻道人ふうつさせて、唐の何某が新竹の歌の中なる影鏤碎金初透月聲敲寒玉乍搖風といへる句を、同じ筆おて書き加へたるを物し給へり。さていへらく、此若竹の姿、とかく心にかなひ侍らで、三度まで道人の筆をわづらはせ侍りし。さる間に日數せまりて、巻のかざりもいまだかわき侍らねど、今日のさり日にはづれて甲斐なきわざと、さて持來りぬるとのたまへるもかしこし。今日かけまつれる紀氏の御影の、式のほどこそあれ、なほり亂れむ後の何をかもなぞ思ひわづらひたるに、今日にあへる此一巻を賜へる事の嬉しさ、況むや我たふとむ大徳のみ筆なるをや。

くれ竹のうれしきふしにあはせして世のうさものと思ひけるかな
勘解由判官のもとよりの、あづまなる龜童が、泥してかきたる龜の繪の扇に、百一歳翁藤原の勝泰が、歌かきたるを、松のさ枝にのせて、はらからの禪師しておくり給へり。そへる歌、若竹のよそぢの後の此龜の萬齡をともなへよ君、そのほか、心ざしさまくさりけれど、さる方の筋にかゝつらはぬ、もらしつ。

二十九日、方忠ぬし來たまひ、何くれ語りたまへる事を聞きて、かいつけて出したる。

君が病の世のなみふも見たまへ侍らねば、いと心ぐるしう、朝夕に見わづらひて、わびぬる折々の、親しき友垣にのみ、ひそみごちつ、猶ちからいるべきあつかひもあるべうやなどいひをるに、只春や歸らむ、夏やいなむとそいろを給ふを、まひてもといひれど、猶うからばかりのあはひも侍らねば、今のいかせむなぞ歎きをれり。さるにあたび、其難み給へる醫師いへらく、とてもかくてもまゐるしいたるまじき病の、思はぬおかく愈がたになりおたるの、口にうまさきを思ひ、身にたはれを慎み給ひし去年よりの操、やゝ顯はれたるならむ。今の速に愈たせまゐらせむこと、我掌おわり。半にして歸り給はむの、まかるべからずと諫めたるに隨ひて、秋の末まで歸る事ののぼへられたる由、今日ぞ來りて告げ給ふに、俄に胸明なる心地せり。又故郷にして物に植置し梅の、いとかなしうめでつるあり。今年のかのれを待つ心おや、二月の末に花さき、かつ實を結ぶ事いと敷多なりと、便にいひおこせたりなどのたまふを聞きて、いよ、物嬉しう思ひなりてよめる歌、

あどさらになさかゆる梅のことしよりみのよくならむまゐるし也けり

十月、旅日記の内。

二十九日、けふ桂園へかへらむとするに云々、

勝間なる光福寺にどいまりをる程、かのれが病愈し給ひてむとて、いく薬のかざりの
ませ給ふに、益野ぬしの養生訓といふ文をみせ給ひしに、それ守る心となりて物せる
うち、いといたく肥えふくれて、我もあらずなりにければ、嬉しさ限なくて、うめ
き出つる歌、

住の江のながさのうらに長居していのちさへおもものばへけるかな
風いたくあらけれど、あまり酔ひえれたれば、打ちひらきなり。

めぐるく柳さくらもみなめぐる千世までめぐれ今日のさかづき
かくするく日暮れにければ、別のみきをのめるをかちめて、今日もいでせなりぬ。

文化八年

八月一日、直好、幸文、弘章たちともなひて、獅子が谷なる安樂寺にまうづ。このかの山
寺の、萩が花さだめてあるべしとてなり。道へてはるくど雨ふり出づ。

なかばおも萩のたけぬをわしひきの山べのさというちまぐれつゝ
寺に入りて、松虫鈴虫二人の塚にまうづ。直好、

立ちよれど聲もきこえぬまつ虫のつかもあきこそあはれなりけれ
さる間に、いやふりになりて、皆塚の上なる檜原のかげにつどひて、過るを待つ。

ふるつかの檜のまげみにふる雨のまづくにぬれてたてるまびしさ
たへわびて、仏堂の板じきに走り上る。さて打見れば、山際の小松がもとあ、むらく
きたる其露、玉をこぼすが如し。

まぐれふりまといになりぬ一枝の折らむとおもひし秋はぎのはな
さてやみて、土もかわけり。我神樂岡の雲間より、夕日のさしたる、いとあはれなり。お
りくる道のつら、靈鑑寺の宮のみかどの北なるやまみ屋に入りていふふ。主人のめをど、老
たれど物しう清げされば、皆口々にはめいふこと、發句めきたり。

翁よし姥よし今日のまぐれかな

この句のされあれは、哉といとまらぬをど、さるかた人や難せらむ。南禪寺なる丹後屋お
ゆきて、夕食たうべむとて行く道、幸文よめる、

かりそめにいでにし今日のまつ虫のなく夕べおもなりにけるかな
かのさずさめて酒のむほど、うかまめちどあまた來つどひて、いと賑はしうかたはらいた
し。田の面松原などの打まづまりて、虫の聲々いとあはれお聞ゆ。たいならませば露けか
るべき夕べなりけり。

九日、富山定豪のかへるにいざなはれ、かのれ阿元法師と共に出づ。粟田山の夕べのけし

さ、おはれなり。

夕ぞりのふもとになりておはた山おはともすめるつきのかげかな
ゆふぞりのうへに浮べるおはた山おはちしま見るおちこそすれ
聖護院の森陰なる升屋に入りて、酒肴てうじさせて月見る。おもはせなる興に入りて、お
はれおもしろきこと限なし。

いとゞしくてりこそまされ木隠になしてぞつきの見るべかりける
眞むかひに稻荷山みゆ。

はるかなるみつの峯々わかれてもさやかに見ゆるつきのかげかな
此峯より西つらなるをしは山かけて、愛宕鷹が峯のむたり、貴船鞍馬小比叡のあたりまで
皆山々のうしろつうさひたくもりによたがりて、いと凄く見ゆるに、ひまもおかず稻妻の
とばしる、書おけるが如し。

おほぞらの月にてりかついなづまのかげをはかなく何おもひけむ
あまたゝび盃めぐりて、肴も何もくひあらしたり。宵より燈火の消ちて、光にまかす。
はまぐりの中なる玉と見えつるのまづくにつきのうつるなりけり
又おなじおどを、

はまぐりのはしらの影もみゆるまでさし入るやどの月のさやけさ
やゝ更けぬれば、立ち出す。定豪を鴨川のはどりまでおくる。

よひのまに雲間つたひしいなづまのゆくへも見えず成にけるかな
さしいへ、又ひかりいでく。

はるくくと見えたる西のむらくもにゆきても月のかゝりけるかな
さる間に、かの黒雲やゝみちきて、はのくく神も聞ゆるに、降りつべうなりて、星だに見
えずなりければ、そゝやと立ち走るに、二つ三つのかゝりにけり。



かるかや集下

○歌づめのうち

香川景樹

○三條大納言公修公とはせ給ひて、天づたふ日も夕暮お成にけり歸るさをしき岡崎の里。また、野にいでてかへりみまれば東の山より高く月の出たり。とよませ給へる御返し、

日へ入りて月はいでぬるなかぞらにたゆたふ影をいかいとめむ

○誠拙大徳の、虚行實記の跡に、

おのれもまゝりへに何まれかいつたおけど、大徳の言遂にもだし難く、別き奉る今日しも筆とり侍れど、かしたき限、序や跋や物し給へるおの、いと何ぞのべむ。さればとて今更さしかかむも、中々おやとたゆさふ程、君がぬる夜の窓を照さむといふ御歌の光さへさしそひたり。且ふし且戴き侍りて、覺えず思ふ心を歌へらく、と熊野の山をはじめに、たきつせのうち出でたまひ、親の爲めぐり給ひし、法の師を親とぞたのむ。たにくみのたぐみてまれ。ふかき心をはぬ心を。

○六歌仙の賛の詞。

かはよき女のなやめらむ、まめ男のはふらむが、あはれならむの更なり、商人の言葉巧めらむも、よき衣衾はむの何ならむ。柴人のさま鄙しからむ花陰にして興ならむや。雲を欺かむ花山の花の、其まこと見えがたならむ。かすうならむ宇治山の月も大空にのすみぬらむ。

和田氏の求ふおぢて、只古言のみいへるが、むつの歌仙のゆかりめきたらむ、又をかしからざらむや。

○生源寺美濃守の詠草のおくに、

もとより歌の、みやびを本とせること論なけれど、うるはしきの本躰也。とかく御歌潤色なく聞え侍り。うるはしくさへ侍れば、大方ことわりも聞え侍るもの也。其うるはしき、又外より求むるものならず。たゞ人の歌をうらやまず、人のさへをてらはき、思ふ一ふしをすらくとのへ出すのみ。それなしがたしとならば、なし得る所いかじと考へ、又よみ又考へ思を重ね侍るぞ此道の執行なる。さるのやがて誠實をみかくに侍れば、光り出たる光の、又た歌のみならず。何らの上か照さいらむ。さて後ぞ近く父、遠く君の聖言も、をさく遠からずや侍らむ。あなかしむ。

○村田武備より、うなぎ来る。歌あり。其かへりおとに、

けふもはれくしうなむ。をどつひの、近江なる黒津より來たるを、人の參らせしを、又おのれおたまふとて、われ見れどあやめもわかずぬば玉の黒津うなぎの君ぞわくべき。といふ御歌さへ添へて、櫻かばやさにしてもたまひつるの、申さへうも侍らず。御心ざしの藥おても、まづおのが病のいえぬべうこそ。

夕やみのくろつこのさとのかばざくらにはひばかりも誰うまがへむとむ覺え侍る。かたへより、其器なるの、うめて侍りやと問ふを聞きて、世にたぐひなきをばすて、これの名をうとのみ人のなどかいふらむとさへ思ひ侍り。かの器かへし奉るついで、聊忝さを申しまゐらす。かしよ。

○佛光寺の君の仰みて、やがてかける風鈴の詞、

月の晴わたり、花のちりゆく時々をつぐる、いとわはれなり。かの入むひ曉、うち定めたる類ならむや。まして、水無月のてる日かげるひて、竹の若葉松の葉末、そよめき出し夕暮に、聲あはせたる、物も似せ。

○十年餘昔、都て相親しみし服部管齋ぬしに、今日しもはからずめぐり逢ひし、所はずなはち參河なる前芝の里、加藤廣正の家なり。かたに旅此行ぶりあて、積るおどくつくしける中お、冬枯の日記といふ一卷をどうで給へるを、とりもあへず聞きみるに、この

かの昔の都あそびを去るされたる巻なりけり。みそかに物せられし内わたりの隈々を、むねと書きとられて、まのあたり浮びいづるふし／＼少なからぬふも、若がへりたる心地さへせられて、思ひあへず歌へるうた。

めづらしき君にあふさへ嬉しきをむかしさへおも見ゆる今日かな

○雪の朝、ちか子の許より、せまければまつおかひなき雪なれど君とはやと拂ひ兼つゝ又、言の葉も此白雪に埋もれて君待わぶる外なかりけり。といひおこせしかば返し、ふらばといひしを、今朝しも忘れ給はず、待わびさへものし給ひて、ふりはへたる御使、いとも忝う、さるに此程、前の大まうち君いたくいたはらせ給ひて、わなみ仕へ奉る限の、物よりさきに、消えかへり侍る頃あて、雪の花おも心うつしがたう、いと春めかぬ心地に、此曙より其御あたり思ひ出給へながら、徒に過し侍るの、心ぐるしうなむ。されど御言の葉の光に、埋もれけむ松の姿も、中々あらはれ侍りて、まかりしおもまさりてなむ、打向ひたる心地し侍る。

われをのみまつのうは葉にふる雪のけさあさからぬ心をぞ知る
かくやまうちおも、日影てりわたり侍るに、いと御園の景色あたらしうなむ。かへす／＼も、むらのかしこまり少からず。あなかしこ。

○十一月二十八日、ある人のもとへ。

我山里の寒さをわびて、都なる小春亭おもりけるを聞きて、新一荷もたせこし給ひけるなむ、いとも嬉しき。其後も度々ものせられけるに、今日またこひもどめ聞えける折しも、御正忌満坐のあしたなりければ、よみて遣はしける。

いそげふの薪つさぬとつけやらむみはての鐘のこゑひくくなり

○またび、信濃の小林爲邦ぬし、あまねく救はむふり、あまねく求めむにまかじと、首夏の頃、九重の都にのぼりて、あまねく求むる此あまり、西の方長崎のはてまでもと、思ひたつらむの雄々しいふべし。君が求むる醫師の道の、かけてまらずといへど、いかで我敷島の外ならむ。まげき遙が島のいく薬どりあつめ、かの便なかりし昔にたがひて、年をだにへて歸り來給ひなむ事を、今より待ち喜こび侍りなむ。神無月中の七日、我かくれ家の仙華亭お來りて、踏みいでむ道のはしがきをといふ。殘菊のまたいりに、酔ひ臥したるまゝ例の取あへずかいつけたる、あやしどもなめしかるべし。

龜のうへのやまめぐりして歸りなむはやき時雨のくもにのりつゝ

○中島來章が書ける、大津畫の巻の序、

何佛と無始の昔をといひ翁も、風のぼせをの跡なき世にしも猶といまれるの、水莖の

わやなりけらし。たはれたるも無盡藏の外ならねば、をさなきかゝに見すてむやい。
山科の畫の名り、古寺のとなふる人、まれおして、あらぬ何がしの聲世も高きも怪し
き物から、古きみやびの上なきをめでて、中島ぬしのも此せられしを、つきて愛るも
をこなりけらし。

その筆のはじめのえらさずさいなみの大津のきみが書きとめしこれ
○頼襲より、吉野の釣瓶鮓をえたりとて、あまたさび我を招かれけるお、得ゆかざりけれ
ば、おくられたる文の返しに、よみてかきそへたる歌、

よしのとひまだ花めかじ井のうちのわれをつるべの鮓あれどすし
○十八日夜、三本木なる頼のもとにて、

月かげにかゝらむと見し山の端のくも、居ておそまちいでおけれ
つきくらしき山かげなりしわが里も見えおたるまで夜ゆふけおけり
またあるじの望にまかせて、酔中にかきつけたる、

居待の月も、軒より上に更けて、ふせりとも見がたくなむ。されど心ありけるすさび
に、此川岸のみくづ、底ひなき迄かきはらひ、かげおともとにかべたる、主人の君
の深きおさを、とる盃に汲みそへて、うたひ上げたる。

またや見むかく思ふとちまとひしてうちしくかも川の上的月
○信濃の國、關氏の頼に、

信濃の國內の、山もて山をたゝみなすが中に、淺間更科其名のみ高しといへども、此
安曇郡なる、關春江が宿の面に、おのれ神さびたてるらむ高ねおの、其姿ならぶべく
もわらずといふ。これ見ぬ恨を、雲霧の遙に思ひはるけやる、其歌。

久かたのあまのいは戸のわけしより雲井にのゐるありわけの山
○安村邦叔が、頼にてかける詞。

安村長久の翁の、今の邦叔長雄はらからの曾祖父なり。種齒の祖にして、其業おたへ
なる事い、世にまゐる處か。然るお今年翁の五十回忌にあたれば、彼兄弟其みおさせる
に及びて、其家業のいやつぎに榮えゆく今のうつゝをさへ、一首の腰折に思ひつらね
侍りて、手向けまゐらするも、此兄弟我門にあそぶのちなみあるが故なり。かつ彼翁
のざれ歌に、かむ事のかなはぬ人の入齒して人もくらへば我もくふなり。と詠みおか
れたるも、猶此道のゆかりならざらむやい。

松の葉のおつとも見えぬ下かかたにたまるゝ千代のよはひ也けり
○花園の君をどぶらひ奉る。過ぎし廿日の頃、二十日草の花の宴催し給ひし御歌など承る。

さてなげしにいけ給へるをまめし給ひて、この洞中の御庭のちり。云々のゆかりより、年々
なくり給はる事なり。いまだかの御局へ、かしまりの御かへりも申したいまつらぬい、
今日その訪ひまさを待ちて、何おも一ひら添へまらせば、うちくめづらしう、
叙慮も慰ませ聞え給ふらむと、まゐとの昨日よりこひあくがれたるに侍り、などのたまはず
れど、いかでかなど、かのさかけはなれ、聞えかたらひ侍るほど、御盃数多たびさしひ
きて、鳥さへ歌ひそへたる、隔なきおましの興に乗じて、かいつけたるい、いつのまにか
どなめしかしこし。

三月晦日がた、花園の御もとにまうのぼり侍りけるに、牡丹の盛なるを、瓶にさし給
へり。初花よりもと驚かれざるに、このさる故ありて、かたじけなくも、

仙院より、年々の春下し賜はるなり、とのさまふを承りかしてみ奉りて、よめる。

洞の中のつき日ぞおそき世間ははるふかみぐさうつろふものを

○市田の妙築尼より、初清水といふ酒に、近江なる鮎のあぶり物など、贈りこしたる其か
へし。

夜前より気分そおなひをりし折から、存じよらず誠に好物の二品、御めぐみ下され、
御禮申しつくしえずい。まぐに塾中とりひろめいはいむと、いかばかりく忝がりい。

さあそ心もなほりやまべくふい。

夏やまのわか葉がくれのはつ清水くまぬささきより涼しかりけり

○正月六日雪ふる。兒童うたへらく、雪花がちる、花空に出がわく、花扇おしにさいて、
さりとど舞ひましょ。これの意をどけ、昔より聞ならし侍れど、何の事ともまらずと、
人のいへれば、やがて書いつけ出す。

雪のふりくる空見れば、萬花散亂せるが如く、群蝶涌飛するに似て、心そいろに漂
々乎として、手のおき足のふむを知らず。打ひらきて躍らむに、冬の扇も冷ましけ
れば、さるの腰にさしすて、ひた舞に舞ひめぐらむとなり。

○平野望南亭自休への返事、

芳書悉、先今曉より珍敷雪天、我山里のかの明日可講所の、ふみ分けてとふ人しな
ければ、の寶景、恐びかたくして、白川邊へ獨歩の覺悟致し身拵へし所に、山科元
幹子、馬上の飛來、いざ共ふと申す内、彌降募りいへば、微し酔てと呑かはす間の
御使なり。然るに御文中、おの雪の氣色なき事如何。一奇といふべし。さらば却て
そなたへなぞやし騒ぎい。

のるこまも北ふくかぜに嘶ゆめりさみがかたへと思ふなるべし。

されば今日の御用向ひ、彼つれづれの例に随ひて、得承り申さまじくおひ。穴賢。
○龜園の清樹、濱木綿舎長穂などの數輩をともなひて、東山の花見めぐりけり。芭蕉堂の
山吹、世ふすぐれたるを乞ひ試みむといふに、おのれまづ歌へるたは言を、葛野祐邦ふど
ころより短冊さぐり出て、強ひてかゝせて、主人のもとに持ち行くめり。いかにか笑はれ
つらむ。

ねがはくひ七重のひさを八重にだに折りてかざさむやまぶさの花
さいいへ、三枝ばかりゆるされたるひ、いはぬ色にいまさりけりな。

○其名を四海に流さむ事、大丈夫たれかこれを望まざらむ。こゝに川崎吉藏子、豪放の
才をいただき、年いまだ盛なるに、速ふ功成名遂て身退き、長く残生を樂しまむとす。時を
知り道にかなふといはざらむや。うべなる哉、そのかみ天つ龍女の神夢をさへ蒙り奉りて、
其加護今にいちじるしといふ。人さかずや、其餘波四方にひくめり。

よの中にみちてひくらむまほどさの浪のおとこそたかくさこゆき

○飯尾義雅ぬし、こたび別荘をいとなみて、これが號を、おのれに名づくべうあつらへお
こせたる、其圖によりて、とりあへず泉園といひ試みたる、かなへらむや知らず。猶をか
しうおもしろなる所をも見わたされ侍れど、打つけの現ならぬをいかいせむや。

おのやどをわきて泉とたへし盡きぬけしきを汲みてなりけり

○今年の春、備後の國なる山路重信ぬし、都の花見むとて上りまして、樵木町なる己が假
居の近隣にやどりをまめて、夜晝とぶらひ來たり、道の上語らふ序あり、古郷なる遺芳灣
の圖など、折々打ひらき、何がしの浦くれがしの峯など、いとも委しう語り加へらるゝに、
今いまのあたり向ひ馴たる心地して、朝夕なづさひし其佛にも、別れゆくらむ今日の心を
よめる。

はるよりも夏にかゝれる名なりけりさてやふち江の沖つまらなみ
たちなかへりそ、と打いづるもかひあしや。

○志賀山越思し立ひよし、さてく御羨しく、其御手ずさみのよしにて、草花色々送り被
下、御詠さへ被添、中おも山の井の御歌、感吟にひ。

あへりけむこれやむかしの女郎花おもかげさへに折りてきつらむ
實になつかしきまでながめ入ひ。何も後刻とやし残しひ。

八月二十一日

梅 月

一 清君へ返し参る

○速見ぬし、桑名より都へ立歸りて、まばらく留まれりける頃、かの地よりおこせりとて、

時雨蛤を二籠おくりて、ぬれつゝも濱邊にいでて海人の子やひろひこしけむ、などやしおこせしを、おのれ病おわづらひて、其返事をだにえやし遣はさゞりし程、師走の始つ方、今一籠、かの地よりとておくり來りたるに、

いつのまに伊勢のうら浪たちかへりおどろかしても又まぐるらむ
などかいて、怠の悔残わびはべるも、いとかしこし。

○殊の外なる春寒、御籠居をさへうらやみ參らするになむ。今の近隣の紅梅、いまだ蒼ながら、

一枝を君がためおとをりしもわれかつさきけりなわはれこのはな
たい今かくやは運も開けむずらむと、いかでうそゝる侍らざらむ。又此提重一組、昨夜人よりおくりたるを、つとめて奉らむの心がまへも、走らすべき人なくて、今日さへ今に遅なほり侍るおの、極めて風味なく、あされ侍らむといそがしたて、いとと籠文なるを、一つに見ゆるし給へ。かしこ。

ささらぞ十三日

梅 月 拜

文 秋 君 の ぼ も と へ

○北岡ぬし、いにし秋はう子うませて、其名松太郎といふ。其祝し遣はまべきを、春の

子日此のべくは、今日まで遅れたるも、猶未久しかるらむさるしなるべしや。

去年生ひて今年ふふ葉のわか松にこもらむ千代をおもひやるかな

○門人花月翁、こたび東へおもむける馬のはなむけによめる。

花におもひ月にさらべてうたふらむ君ぶことの葉たれか聞くべき

誰かさくらむ

○こゝに川崎氏、去年の夏なりけむ、年久しくたいさみたる芝居の露をうち拂ひ、やうく立退きて、静なる木陰を求めむとす。其すいしき袖をとりとめて、またふ人多かるに、まぼしたゆたふ程、うちく公よりも召させてなむ。俳優の太平の華にして、民と榮を同じうするものなり。いまし今迄のさまをかへず、萬人の樂みをそへて、共に樂まむの、私の願をどげむ歡に、いくら増らむ、勉めよやと宣ひ諭し給へりし忝さの更なり、天の下のめいばく、何事うおまに若かむ。こゝに於て再び春風に嘯て、ますく佳名を四方に散さむとす。言必信ならず、行必果さるの、大丈夫の道にして、義を見て移るの勇みなり。誰の人からうらやまざらむ。

ふりすて、君とまらずにこの春のはなのたもともかへらざらまし

誰うかへさむ舞の袂を、と歌ひかへすの、岡崎の梅月堂なる片居翁、この松原の萬水樓に

假居して、間近く聞とるうちつけを、かいまざるものなり。

○朝岡泰制ぬし、明日なむ都をたちて、まかり下る暇申しおといで來ましたる、今日の
きさらぎ二十三日なり。あまりにゆくりなく、何くれの契さへ空しきを、念じかねてかい
つきたる。

つれもなく花をみまつるかりがねのこゝろお君いつならひけむ
にはかなるたちの翹にねどろきてたまづさだおもむきびかねつゝ
○百年千年へたりといへど、世に松ばかりわたらしきものなし。見るたびに珍らしけれ
ば、いつも初子の小松とやいはむ。幾世へぬらむといへるも、姫松のうるはしきを愛であ
やしむおなむ。新らしきよしと歌へるわら玉の年の始に、人來りて、若松の詞を乞へる
まに／＼、かいつけたるも、又こと新らしくや。

松をたいふるささめしにいふ人いはるのみどりをえらぬなりけり
○十三回の作法のわざすと、告げ來たるに打おどろけり、八月の末を、彌生の今日にくり
こされしなりけり。懷舊哀慕の情、今更やる方なく、やがて一枝を折りて遣はさむ、夢心
地す。

ともに見しとし／＼の春おもひいでて花おもそ／＼我なまだかな

又かのが著はせる古今集正義といふ書、此頃梓ふつけて世に弘めむとす。其文の中に、君
が考へ得たる一説ありて、菊岡言與いはくと書きまゐるせるを、社友の外も羨まぬ人なし。
其心をのべて、今日の手向にくはへたる、

きみが名もほとけのみ名にとりそへて世にあまねくや今唱ふらむ
猶願はくは、かの國にして、見そなはし歡喜し給へといふ。

○年頃我門に往かひて、志深かりし田中貞澄ぬし、去年の夏俄お病して、身まかりおけり。
惜しといはむも中々なり。既にいま／＼となりける時、今の筆とる事もかなはねば、傍に
かいまざるせよと、苦しき息の下みて、古郷の空の遠くやなりぬらむ死出の山路に今かゝり
けり。となむ詠みすてたる。其涼しきまらばに、日頃みだれぬ心の末もあらはれて、今も
打吟するに、いとやる方なき哀慕の思を、いさ／＼か述べけるものなり。

こゑばかりのこる草津のはま千どり跡もといめずいつちいにけむ
○今泉氏、園生の限を松の林となして、やがて其亭を龍鱗と號けて、これが歌を乞ひ求
めらるゝに隨ひて、よみて遣はしける。

うらやまし千世どころせく松をうゑて齡にわけるやどもありけり
○奥氏こたびかざりおろして、世をやまてせられたりとか。いと長からむ齡の末をさへ

思ひやられて、誰の人か美まざらむ。かつ年頃茶此道ふる入り立ちて、物せられける事をも聞き傳へまゐらするに、慶の心を思ひそへて、詠みて遣はしける。

今よりいさ世を山のおくにして千とせをまつのおゑやたのしむ
○をしへ子なる井上氏の玉蓮尼、今年遠曆の賀なりとか。其性歌舞の道にかしこく、いはけなきより其名世にみちて、内々の雲の上まで薫りけむや、袂に残る梅の花笠、と過し日よみておくられしも、老のかくれむ心地して、けふの祝お思ひよせつゝ、おのれも一首の歌を書いつけまゐらするものなり。

ことしよりさらに千代をもかへすらむ若きころの花ぞめのそで
○湖五月雨、から崎の松風たえて志賀の浦の浪にありゐる五月雨の雲、千蔭、といへる立詠草の奥に、歌かきてよと人のいひければ、

末白くあまりたるもさうくしきに、何おもいかいそへてと、とうでられたる、開き見れば、加藤翁の筆なり。ありし昔もいとなつかしくて、其心をあめて、同じ趣をとりあへずよめる。

こゑおのみ影こそこのこれ五月雨にくもるかいみのやまほどと、さす
○飯野ぬし、名を厚比とたへたるは、含徳之厚比於赤子といふ古語によれるなり。號を

も共おと乞へるに、やがて癩園となづけて、さてさる方の心ばへをよみて加へたる。

もえいつる心をたねのおもひぐさこやあめつちのふと葉なるらむ
○わが思ひ違へる壽則辱多の話の出所を正して、見せられたる史略の本を返すとて、

いのちありてまがあやまちをさしかな人のこれをや耻といふらむ
○竹陰禪師よりおくられしとて、對馬の海なる紫迫門の和布敷條くだし給ひ、辱さ打おかず、引のばへめで珍しがり侍りき。御物語の神后御着帯のふるき例さへ、たふとく覚えて、例のかきつけ侍る。

わたのはら帯のすがたをかりそめのわかめやあがき記念なるらむ
○此御詠草のうち、真禪尼のわかれを始め、なき友の數あまたおなりぬる御歎の歌ども、打見るに涙どいめ難し。今日しも殊に心地ものぐるしくて、とても今年のお思ひ定めらるゝ時しも、俄お立かへり給ふとさへ聞く、はのちしどもはかなく夢心地しぬ。

さえなむの露か雪かおのまらねどもいまこのうせにわれぞ入るべき
魂の故郷の空に天がけりて、君があたりおもたいよひ侍りなむ。

妙雪尼君 景樹

○淀川の勝景、嵐山の春色と記したる一つの箱を携へ來て、これが端文いかおもかい付け

てど、難波人若山百壺ぬし、頻に乞ひ求むるを、やをら開きとうでて、其一卷の花の紐どきもてくれべ、櫻の宮居より書き始めて、戸無瀬の瀧の糸ふて結びとめたり。それ中空にはさまりて、聳えたる男山さへ、いとねたき心地するもうべなり。これ彼浦に其名高き齋かき人、大伴の三津の敷ならびたてる也けり。おのれ船酔の病ありて、いまだ此淀川の上り下りの、其夜舟の夢ばかりもだに見しことわらずといへども、其棹の音たかく、引く綱のたえぞ聞ふりたまへ、かの眞景今まのあたりに見るが如く、かつ在あへる傍の人々も、寫し得ふりと打ぢなくを、とりあへせ歌ひあぐめり。

長門 介景樹

これもおれつばにひめさるあめつちの中にこまれる景色ならずや
○今年、大道寺ぬし來りて、我門に遊ぶついで、年頃修し傳へたる入木の道を、都に弘めむとす。日ならせして其名ひききて、集ひならふ人多し。年も暮れなむとすれば、一度歸りて、春立む即ち登りこむといふ間に、やむことなき御わふりよりも、師とし學び給はむみされた、うち／＼聞えけるを、おのれ歡びに堪へせ、今宵臨淵社あして、馬の鼻むらせるついで、諷ひ出せる歌。

そこひなきまじりのうみにふき龍の雲おこすべきときい來あけり

○先つ日、今秋も限なり、菊を折り紅葉見むついで、松茸をも採てといひて、清水の山

間に入りて遊ぶ。其日風ふかず。日影のどかかて、佳興思ふに過たり。茜さす夕日をかりて染ふたりまゝ初しはの峯のもみぢ葉。人の皆酔る岡への初紅葉ひとりうせしとはあり顔なり。など諷ひくらしぬ。然るにけふ三條の御殿の御局より、御文たばりしついで、前の内のおどいの君より、うち／＼宣ひ下されし御はし書に、かしおくも、彼過し音羽の山ぶみを傳へ聞し給ひて、其かみ安元三年九月廿六日、おはさかはいまうち君の、光明寺の山上に松茸からせ給ひしことを、愚昧記よりぬき給ひ出て、折にふれたりとて見せしめ給ひしに、竹の柱に杉ふかせたる御假屋にして、大みき酌ませ給ひたるなど承るに、其同じ月日に打合せて物せしを、かつかしこみ且うれしみて、色に出たる御言の葉も、此日いかでなからむなごさへ、おほけなくも恭ひなつかしみ思ひ奉りやりて、よみ侍りける。

くやしきもふくれてさくのさかづきに千世の昔をくみけるものを
をしみてもとゞめむ影をいにしへの其日とあらでくらしけるかな

○白圭すら、磨かば磨くべうこそ。日に三度酌かへさむも、君が温厚の徳をだに、いさゝかも損し給はずば、何をかいほむ。若やとひそかに思ひ侍ること久しきに、けふしも醒て考ふればの二首の御歌見せ給へるに、感じたりや。又折ふしみだれたる醉心おや。何をかなめしうかい付けむ。我だにわかず侍り。とくやり給へ。かして。

もどよりも底あるたまのさかづきのかけたる瓊を惜しまざらめや

む月十八日

景 樹

星野君へかへし参る

○江戸なる秋月堂のうしの、蕎麥うつ事の妙手なりけり。一年東六條の御殿おも、彼地にして捧げ参らせしより、畏くもさこし忘れさせ給はざりつるを、こたび御法の大會にのぼり來りて、二度物し奉りぬどか。さるの丹山大徳、それが残りの少きを、さながら我に譲りおくられたる、其切目正しく、其味すぐれたるの暫くかく。種々に色どりわきてめもあやなるの、願の糸をやりつらむ、紅葉の衣をやたちつらむ、いづれ秋の名おあふあるじのまわざなりけり。さばかりめでむおの、これが歌を乞れて、たゆたふ程に、都の春も終るめり、か此蕎麥人も明日なむたつと告げ來たる、其今朝しも東山の花見に出むとすれべ、見めぐる程ふと契りたりや。菊溪のはとりおして、ちり此盛を見るく。

こさませしにしきをたれか切そばのかの糸もてやさらにつながむ
と入るの、彌生廿日まり四日の日なりけらし。

○浮田一蕙ぬし、今年訥言先師の十三回忌に當れりとして、深草なる瑞光寺ふて、其追福いとなまれける、隨喜たふへず、よみて奉りける一首。

今ぞさる畫のそらおと、いふことい雲井に残る名おこそありけれ
○彌生廿日まり二日、東山の花見めぐりて、祇の園お行きとまらむとまると、思ひさや、昨日我門に入り來られし三矢正義ぬしに打おひおけり。やがて花陰おまどひしてうたげたる未曾有の興なり。されどあさてい近江の故郷に歸りましなむどか。まぶさ花ちる心地して、思ひぐまなきおあらず。

まためぐりおはむ契をむきびてむこの酌むさけをわをやぎにして
此心の、君今語らく、なべての酒の梅櫻、伊丹の醸せるの、芽ばる柳のこちせるなど、其意をこめたるの、あまりになめしきや。

○彌生廿二日、東山の花見むと思ひたつ時しも、備後なる麻生氏の鶴子の君、とぶらひ來まして、我門に始めて入り給へるならし。やがて伴ひつれて、かの山邊のゐるかぎり見めぐるに、いまだ六七歩の盛なりけるも、いよく興あり。さてわかちたる題の、尋花、行路花なり。酔えれながらよみいでたる、

花の香にかすまぬそらもなかりけりいづれの山うまづいたづねむ
かち人のゆくもかへるもなかりけりたい花うぶをたゆたひおして
と書いつけたるの、同じ姿の腰折なりけり。花もゑみてや笑ふらむ。

洛東のかたむ翁景樹去るす

○彌生二十日まり七日、双店の花、をどつひ昨日の名残忘れがたく、例の人々伴ひ來たるに、中西の遊士、白かねの猫すゑつれて、圓位めきたる歌すがたを見つけて、こやとよべば歌へらく、雪どのみちるともさすが花なれば袖にたまりて匂ふなりけり。と聞きもあはずおのれ、

おやつうな酔たる袖にたまりしひいかなる花のにはひなるらむ
かくするうち、かの西行舞かなづるに、おどろきてかい捨たるい、

片居翁の景樹なりけり。

○四月一日、藤なみの紫ならぬ法のゆかりに、東山の麓をめぐりいでて、三丹のおくなるさずき求むるに、小谷ぬしの、忍びねきつけたるい、嬉しども嬉しからずや。

うづきたつ今日やまかげあへる君はとゞぎすよりめづらしき哉
さる程に、遅櫻二枝おくらむたるのみか、小よるぎの沖にいでたるみさかなをさへ加へ、
興わりとも興わりや。

みどりなる淺黄ざくらをそへしおそまつの花なるるしなりけれ
とうたはせたる、君のみあへの罪ならずといはむや、いかに。

○桐川定泰ぬしの詠草をひらき見るに、いまだ世の塵にけがされぬ玉の光、よるをさへ照さむ末のいとたのもしくて、

月をさへあざむくばかりいつのまにあつめし窓のやさるなるらむ
さるを三年の月日打すごしたる、おのが懈の罪、よし君ゆるまとも、此道の二神いかに見給ふらむ。あなかしこ。

○たつ子の君の、組入三度の比祝ひをば受けながら、只すぐれたる爪音なめりどのみ聞き流し侍りつ。さるに今霄しも、まのあたり打つけの妙なる調い、月宮の天つ處女の御さへに浮び侍るに、我のみり、まどへる人々、誰かのをろさ驚かざらむ。其一ふし四季の富士なりとや。

ふじのねの雪のまらべを知らずして松うぜなりとよそにさゝけむ
も、今さらくやしうなむ。

○長州の御殿より、安村の郎女に賜はりし古琴一張、いとたへに神さびたるや。もし近江の作ならずば、近江におくれぬ名工なるべし。又其聲さやくとして、となかの浪のきこならぬ枯野の舟も、をさく劣るまじうこそ。

ながどの海から櫓おしきるあゑさけば琴柱の雁のわたるなりけり

やがて唐櫓と號けむも、をこなりけらし。

○今の何をか申し入れ侍らむ。只夢幻泡影、もとよりもなきを、憂世のことせりに思ひかへして、歎かざらなむ。さいいへ、撫子の花も枯まぬる此御詠、さこそどおしはかるに、巳が歎もかはらぬ葉月にして、早五年の昔なり。同じ哀に思し出されしと聞くに、忘れぬ傍、又今更なるも、おそしといふべし。うら葉にかさし普門品の童子が例も、何ぞ引くかひなかるべき。

この世にははかなく消えし菊のつゆのちの千年をおもひこそやれ
又たのしからずや。 東塙老樵景樹、涙にむせびつゝこれを哀す。

一蕙ぬしの御もとへ

○大道寺ぬしの爲に、各けふ馬の鼻向き。時の年の内に春立ちし又の日、所の蓮華王院の前、松屋がさずきなりけり。來む二月の、此院の花の御戸開きに、棟の柳も今より芽さす春をむかへて、今日しもわれ君が手向どかさくらし散りくる雪も心ありけり。飲ざらむや。歌はざらむや。

かへり來む彌生のはじめとしつきのながれにうけよ花のさかづき
○八田知紀ぬし、薩摩の古里へ歸る馬のはあむけす。陸月廿六日の夕べなり。

舟のうちにはひとよふしみの追風のうめが香ながらさむしとぞさく
況むや長さ波路をや。心し給へ。かのぬし打歎きて、君にけふ別れてゆかば敷島の道さへ遠くなりぬべきかな。と諷へるもうべなりけらし。國まことに遠ければ、思はざればなりども、いさめがたし。

われならぬおさきのままり近しとやねたくそなふへかへる波かな
たいく老を養ひて、再會をまちわたり侍るのみといふ。

○けふし、五十嵐のあるじまたまふの、神ぞのゝまりへなる新室の樓にして、梅さへ散の盛なるに、思ふどちうたげまどひたるの、昨日のみ雪打とけさる集ひなりけり。樂しからずや。道すがら出し、題のうち、社頭松を實景の梅にあらためて、うたげる中に、おのがの、

神がきのうめのまた風ふきにけりぬさもとりあへせにほふ袖かな
今ひとつ、路若草、

我妹子がわか裳まそひく道のべにうらむかくさのつゆもちりける
と諷ひもあへぬに、かなで出て打ふる袖のむらさきに、裾の赤裳の奪はれけり。名のみ八十路のをとめ姿に、忘れし老のさめたるや、此真葛軒の恨なりといふも、猶醉の中のまれ

わざなりけらし。

○阿波の國なる藏屋のぬし、そのかみ鴨川に遊びて、拾ひ得たりといふ一舉石、其色潤ひ、其姿なだらかに、恰も如意の高根に似たるを、今も寶珠と愛玩せるあまりに、これが銘をと乞ひ來れり。此のれ見もあへず、象岡が昔の玄珠、ふたゝびあらはれたりといふ、譽めたへ、やがて探珠となづけて、

石川やせみの小がはのかたふらにまづめるさま茂いつか得にけむ
どうたへるの、洛東々塙老樵景樹。

○四月より降りける雨の、五月雨夕立をおめて、七月の始まで更にやまざりければ、都をはじめ近き國々、江河の水あふれて、淀伏見大津など、家ながれ人たぼるゝ事多しといふに引かへて、世の年ありて、ゆたかなりと聞き侍りてよめる。

ふりにふれどもとよりあめの下なれば青人々さのいろもかはらず
○已來御さはりあらせられずいや。さて例のめづらしからぬ品呈上。たゞ春此牡丹、お萩と咲きかへりいのみ。再び笑味下さるべくい。

おなじも此かさねし箱のふさつ三つ中のかずこそすくなかりけれ
とふ不まらむかしこ。
梅 月

良盛 大徳

○高松の峰もせに立ちしならぬ笠どり哉、そなたに見て、北山の紅葉こさいれしいにしへ人に、袖くらべむや。此山科のけふの茸狩り、やがてこゝなる安田大人のみまうけなりけり。其みあへものゝ堆き、見かるせる安祥寺の昔の庭も及ばむやい。

やまかげのさかしきまちにゑひしれて茸をばとら老人の手をとる
とまどろに囁るだみ聲お、猶、山路秋、初紅葉といふ題哉さへ歌はむとするに、鶯の谷の心もいかし思はむと、人々さゝやくに驚きて、あてて、筆を捨てたる翁い、

東塙亭景樹。

○員子のもとへ贈答、

みのり豊ならざる秋、世中いとせまりにければ、公より御教を、都の内へも給はりしに、我其中にもれにけるい、師のいたくいゝはらせはぐくみ給へれば、是なむ早くより師にゆづり給ふ天のまにゝきて、公とどお洩れつらむおやと、いと尊とく、我師の忝さ、日頃にいやまして、天と共に仰ぎまつりて、

朝なゆふなつゆあうるはふ草なればもれてもらさぬ天のこゝろか
これが返し。

どもまれば、師のめぐみ師のなさけなど承るものかな。我めぐみの、目ささぐとみて、木實おやたぐふらむ。我なさけの、名ささけふて、鬼殺しにおどるべし。此度公の救にもれ給ふに似たるの、貧者のつらに見えざる君が一徳にて、後大なる幸きたらむ前表ならざらむやい。

行きめぐるまぐれの雨のまたまみちもれしうねの夕日さまなり

○吾門に遊べる佐々木世濟ぬし、祖父の君より持ち傳へられし、唐金の獅子の文鎮を、おこれお譲りて、數ならぬ身にもせむよりの、君が手になれて年へむ行末を嬉し、どこそ思ふべらなれ。もし此獅子心あらば、などさへ詠み加へておくられしを、おはけなきものから、其厚き志を忝み侍りて、よみて遣はしける。

ふみのみう家のまづめにどめかきて我ましたらむのちもつたへむ

○此三繼の琴や、世の便利に物せむとて、年月に考へ耽りて、つひに天保六年といふ冬、始めて造りなせし、笹波の大津人勝部の翁ありけり。精巧の至れるや、其調亂れず、其聲狂はせ、巍巍洋々の古韻、いよくさやかに響くゆり。さるの高山に登り、流お浮ばむお、誰かの今より携へざらむ。喜こばしくも樂しからずや。今のと捨たる伯牙が操り、新にたおせし君が功に、いかでまさらむやいといふ。

たちまてしためしん遠きふることをつきて君こそまらべそめけれ
まか聞き知りて諷ふいたそ。神樂の岡崎に住む、老樵景樹。

○北川宗重ぬし、今年むつき元日、一小蛇を見る。さるの墻下石間より、其頭をいだせること再すといへり。是のかみ、明月の寶珠を含むで、捧かたる姿ならむお、尤善兆といひつべし。おのれとくより是を賀せむとして、果さるうち、時既に一回轉して、又更に一陽の春を迎へむとす。抑畫がきたらむおまらず。眞蛇の足を生きるの、龍と化して天に升るの象ならざらむや。さらばおのが蛇足此言の葉も、又嘉瑞の一助にして、君が高運を開くの魁ならむといふ。

こむ年のまたあらためてあらまのひかりもそはむ春やたつらむ

○當子の君の、習ひ得たまへる裁縫の業や、世お類わらじなどいはむおさらなり。こたびひそりに都にのぼり來まして、我二人此兒女等に、粗其わざ傳へ給ひし辱さ、又聞えおひ來て、おして教を受けたる三人四人のをどな人たちも、其巧此妙なるを驚きたとみて、手の舞ひ足のふむを知らざめり。おはれ同じくの九重のやむことなき御わたりに、其名たち弘め、其跡縫ひとめたらましかばど、人おも語らふほど、明日なむ俄に立歸り給ふと、さくもわりなしや。唯々今の再の時をまち願ふのみ。

久がたの雲のころもをたち縫は、たなばたつめの手おもれとらじ

○二月のはじめ、三矢正義ぬしゆくりなく訪ひ來り、年の末より公さまの事につきて、都に物し侍る程、心の外なる事いできて、まばらく世に恐ぶ山、朧月夜の隈ごどに立ち隠れ侍りしかば、近くありながら、得もどぶらひまゐらせせ、昨日けふさるかた打ゆるびたるにまかせてなど、猶春花のかくの、秋山のまかくと、ひそくに物語らふ中に、時をもおかず大江戸さしてまかり下るべしといへるに、殊更お打驚けるもの、事の心明ならむに、いかいかし止めむや。至りたちつきなむたづきをさへ、聞えさすけつ、傍にいけたる一枝を示して、さきの榮をことぶさいへらく、此梅の花むけや、必南を指さふあらで、東のえるべせむとや。る引たがへ行くらむ君を、のせてやるべき小車なりけり。又近江の古郷なる岡村宗平が許より、此度れもふむねありて、いづちおか仕へむとての志ありげなるを、さもこそと思はれて、一度の身をも鯨になげてこそ又七里の浮ぶ瀬もあれ。となむひそかにかいつけおこせたりとや。是をこの一帖の魁として、社友此限またしきに詩歌を乞はむとなるべし。

○彌生十三日、嵐山の花見にまかりける道に、原田常直逢たり。ともなへるや誰そ。江戸なる鈴木秀國ぬしなりとか。ゆく／＼語らふに、思の外のみやび事に、廿年の昔の東遊ひも、目の前の花にうかびて、浪の音さへ似たりけりや。名のみせし鳥を都に思ひ出て角田河原の心地おすれ。さて花の亭にやどりまめて、酌かはすほど、月の中空に照りて、蛙妻こひ、千鳥友よぶ。其聲さへそいろさ、れもしろさに堪へざりけらし。花の外なる唐囀も言の葉にまじれりけりや。

酔けりなまきしまならぬ道をさへふみたじろきてうらる夜半かな

○恐摺の詞、

世にまのぶ草の種多かめる中に、昔をまのぶ、人をまのぶの、言葉の花さへおほふめり。隠れまのぶの、まきかたの名にして、とすまの白浪の名にまがふらむかし。是をも恐ぶべくい、孰か恐ぶの、凌ぐのかたにつみとられて、更になつかしあらき。只この道のくの恐ぶ摺の、春日野の若紫も、奪ひかねたる縁にして、世人の心の亂も限なあらむ。

○林の刀自、山本此郎女二人の君、已が古稀の賀を祝ひ給ひて、壽仙布を調じて、七十の内まだ雛鶴のちど、其かたを歌とよみうつしてさへ、給へる嬉しさ、飛びたつばかり空にまふ心地して、千代を重ねて此言葉おも、やがておえぬべし。

仙人のつるの羽ねりのからころもたちるかるくもきてやあそばむ

○うれしとも嬉しかりける今日のまどひよ。さるゝおのが齡此みかり、天氣さへ稀なる空
ありけり。風吹きとちぬ雲間より、君が世の天つ少女の舞の袖いくたびかへす千歳なるら
む。と聞ゆるゝ、足ゆかぬ山田のそはづならで、清安ぬしなりけりな。

あけむせる老をばあまつ少女らもなづる岩はのこゝちもやせむ
と諷へるゝ、うぬばねならで、うぬばねなるべし。

○長崎の浦も、小海老ありて、其形其色こどやうなり。たましく漁にかゝれることあり。
此海老出れば、土人吉瑞とす。然るに青木大宮司永章の息永古、家督して其祝しける日し
も、浦人もてきて賀しけるを、やがて其海老のかたをうつしおして、歌あひけるに書きつ
ける。

さゝげたるそ此去らひなもながさきのうらにまさしく兆れし老

○長崎なる遠霞先生、號を露蕉風竹園といふ。其かゝる唐人のうつしおしたる其書の上に
讚哉とこひきたるに、かい付たる。

ふさかはしおさかはしてぞとゞるらむばせを葉の風くれたけの露

○大性寺前大徳、いませし世に祝ふべきを祝はずして、愁ひまじきを愁ふる世と成ぬるゝ、
はかなしどもはかなきを、常なき世界にかゝつ物から、猶已が怠の罪いかゝり通れむ。こ

たび一周の法會を待て、更に懺悔して、靈前にわびまゐらするも、いと長く悲しからさ
らむやいと、謹て申す。

けがれたるおと葉のつゆもはちす葉のうへより玉と見そなはせ君

○残る暑さの堪がたき、ためしなき今年なりけり。今日しも前なる川瀬の床に、夕風まち
どらむと、やをらかりたつ時しも、近江なる山田人木田安至きたり、一帖の白紙とうでて
いはく、世に名あらむの更なり、友どちの親しき歌よまむ限、色紙がたにこひ物して、お
れおおして、枕言に楽しみ侍らむとす。君にも何ぞ此端にかいなぐりてと打ひろげたり。
この今かけとや。かく吞かはして、酔まれてだに有るをや。さらば其いはればかりをと、
硯とりおろして、ふんでも揮ひあへぬに、北山嵐ふさわたりて、たゞみ翻したるに、かい
どめたるも涼しきや。さらば是を風帖と名づけむも、また歌詠にゆかりなからむやいと
ふん、

臨淵社の主翁景樹、

○いにし冬、春日山の喬木數萬樹、一七日の御神樂に依て、忽青葉に反り、嚴寒に花さけ
り。又去歲の大飢饉に引たがへて、今年天比下おしなべて、未だ聞かざる大豊熟ならむと、
さるゝ絶えて久しき十七社の御祈行はせ給ひし其日より、立どころに風吹きなほりて、其
感應いちじるしく、上なきみたま比ふゆなるを、世にまらぬ人多かりけらし。近く社友何

がしが、敷島の道のあまりに廣ければ道どもえらで人のゆくらむ。と諷ひ、遠くから國の武帝の、方何ぞ我にあらむといひけむなど思ひあつめて、楽しくもありがたくも、其歡べる心の歌をたふと、打傾く今日しも、白雨俄にそよぎて、殘熱を洗ふ。是はたいよく年ある兆といひさわぐに、轟く神も八重雲たかく仰がれて、猶かしおきや、九重の雲井をさへに拜み奉りやるに、猶何事のおほしままかんと、餘りの忝さに、

こぼるれど袖もぬらさぬなみだこそうるはふ雨のまづくなりけれ
二も、まり十日の風も、今おだやかに吹きそよぎて、共に萬歳の聲をたてつべしと、獨ひそかに鼓舞するの、鳴川萬水樓に假居せる、洛東々塙老樵景樹。

天保八年文月二日より一日の日迄るす。

○近隣なる三井ぬし、昨日錦織の森に遊び給ひしとて、萩二枝おくり給へりし、其花勢只今たゞ手折りしが如し。

よもすがらおきゐて君や守りつらむつゆもうつらぬあきはぎの花
實お錦二むらかつけられたらむ心地せし嬉しさに、何事をか申しつらむ。とくやり給へらむかし。

○九月十一日、雨いたく降りけるに、山田清安とぶらひて、ぬれつゝも折りもてきたるもみぢ葉に心の色の見えさらめやの。とさし出せる一枝、名たる東福寺のなめり。色のあき、調のおもしろさの更なり。所さへにもなつかしきに、おもはえずそいろを出でたる、され歌どもあらざりけらし。

見そむるはさらでもふかきもみぢ葉の色まことにも千入なりけり
○寒夜の川風、いたく引ふしたる今日しも、思ひきや其、川風さむし君をおもへば、といふ御歌をさへ、紫陽花の四ひらに疊みこめたる御志、實に七尺の屏風に立ちまざり、躍り上りて辱み、ふして、いにかお嬉しき夢を結び侍らむ。殊更畫やうの、慕ひ奉る連山君のものし給へるをや。

心あらばよしひらくとも八千くさ此かをる風をばへだてざらなむ

十一月十三日

景 樹

船越君へ

御使をまたせ、外用のかたへお返し奉る。何事をかえるしけむ。穴賢。

○師走の末、門人茶室康哉、奈良に名にあふ菊屋が鬘酒を携へ來り、この此頃かしてまかり侍りしに、かの主人より、君におくりて、歌一つ乞ひけるなりといへるお、かたじけなみ珍しみて、やがて汲みかはしてさてよめる。

冬がれもいろにいでよと青丹よしならの葉づたひ降るみぞれかな
○河村一成へ、かつをの作身を送りける文の奥に、かいつけたる歌。

春なればはさぐつをとともかつの見よふけバウぜにも散魚なりけり
あまり少しなれば、御一笑。

○山田清安へ返事、

さればおそと打ひらくに、只けしからぬ雪とのみえるされたるい、詞の玉の塵ばかりだに、けがさじとやをしみ給へる。

ふみ見れどあともなきこそあやしけれいかに降しく雪にかあるらむ
御尋にまかせ、おのが我だふ、

あつめぬも窓のみ雪のおもしろしつもるかひなき身のよはひ哉
やみなむとするを、

かさくらし野へも山へも見えねども猶はれなむのをしき雪かな
河上のけしさを、

さゝ波のうへにみだるゝ雪みれば花のあやふるおうちこそすれ
猶はれど、とぶらひ人たえぬお、堪へずかいとめ侍り。

景 樹

山田うしへ

○蘭々、其名いかみぞや。なからむを何とさくらむ。聞かざらむを何といふらむ。只おもふらむを述らむや。其臭からむ同心の、

言の葉によそへてだおもゆかしきをそれにはふらむ花ぞともなる
○美濃なる垂井の水の、いにしへのおさめの清水なることを、考へ正しえて、是が歌を乞ひおせしに、よみて遣はしける。

かのいかり猪のいぶさに、あひさやみ給へりしかばと思ひ奉りやれる心ばへを、
まどはせし其やまへよりかるもかくるさめの水と名に流れけむ
又其あたりありといふあむ川の、古の藍見川なる事をも、ついでによみてといへれば、
其名片言も残らざりせば、其考もいかでかと思へる心を、

かたふちの藍よりいでてあむ見川むかしの聲にかへるなみかな
○圓山辨才天お奉る石燈燭にかける詞、

此一基を捧げ奉るい、鹽崎の倉子なり。もとの名の政子、天性聲音の道に賢く、
つひに三絃の奥秘を究めて、近代の妙手なるを、世に誰か知らざらむ。其清韻の

高さや、更に淫お流れず、聴く人をして却つて塵外に遊ばしむ。五十年間出づなりとさく何がしの名工も、こまど合奏する時の、いつもの額に汗すといふゆり。さればおのれこの佳調をさく毎に、席を正すに至るも、うべならせや。世に鄭聲を去らせして、鄭聲と定めたる陋説も、一撥破るに足りぬべし。さるの年に二度、此寶前に集ひて、聞えあげ奉る法樂も、今年天保八年まで、十八年の久しきお及べり。神明いかで感應踊躍し給はざらむやといふ。

心をもそらになしてやかへすらむ天つをとめのあまの羽おるも

洛東老樵老るす

○鳩居氏、こたび家居をあらため造られしに、竹もて結へる砌の籬、其まゝ根ざして、枝さへ葉さへ生ひ茂り、一むら竹の緑をなせりとさくの誠か。いかに榮ゆる行末ならむと、かつ驚きかつ祝して諷へる一ふし、

くれ竹のよにためしなき千世なれば根なしごとゝも人のいふらむ
あなあやし、あなめでたど、折りかへせの、神樂岡の老樵景樹。

○山路重信ぬし、をどの年よりの大飢饉に、若干の米錢を施されたるの、いはむも更なり。さるに此春、いたき病にかゝりて、良醫手を放つにいたれり。又思はむや、其病日あらせ

して、忽ちにいえたちぬ。かく萬死を出でて一生を得たるの、一家擧りて萬人を救へる慈哀至誠の應報、たち所お落れたりど、賞譽しゆすりて、歡聲今にやまずと聞きて、共に感激にたへず、ひとりのふむでもをどるとならし。

ひとすぢに世をいたづきの音たかくかへるも速し天の加獲弓

なほ引きはへて、本末ゆるばざらむを希ふといふ。

○島原なる遊樓、住屋某ふてよめる歌、

鮫玉なかくにこそ、まことの珠のあなりといへ、其眞珠はやいつち浮れて、ありそへにどいめおさけむ、から玉のかの唐人の、流しけむ跡といなしに、此家のから玉の間い、其貝の青天にして、其空の最中の月と、うけすゑてさすやをりの、満汐のくめどもつさず、うべしこそ出雲此海の、沖つ波高きわたりの、み玉ものこれ。

むかしどのうら島原のたま手箱わけてうれしくむらがへるなみ

おの此宿の松に向へる濤の間にして、伴の玉の何がしの底なきまで吞ふけりて、夜も長月の二十日の月も出むとする頃、ふむでを打ちて酔ひ諷へるの、神樂岡の老樵桂園の主なり。長さの五七のきらべなく、短さの今めきたりなどいはむ後の謗のふしく、一夜の夢と見ゆるし給へといふ。

此宿の松や、うちく臥龍と名づけて年へたるを、近き頃いとも高き御わたりより、改めて春秋君とたへて、其御歌さへ下されしに、畏くも何のめいばくか是にまかむ。

臥を龍もまつとまぢつる時をえて雲をさへにまのぎけるかな

○毛孔子の、世にこえて煎茶を翫ぶ、其來由たいならむや。隱元禪師より流れ出たる八十字治川の清き瀬を、遊外翁の汲み弘められて、中興の始祖と仰ぐに、世にまゐる所なり。さて後、聞中禪師、其真味の奧秘を愛て、得たるまゝを、毛孔子に傳へられたる其折しも、彼隱元せじより傳來名器の急須をえたりとか。豈奇遇ならずや。更に之を系統のつたへどねとして、即この箱の中に藏めて、まゐるしの寶とす。誠に此道の珍奇たり。毛孔子深く愛翫して、晝夜を分たず、親友と交るおも、之をもてし、或は神仙に供すること、多年に及びて、みづから雅趣を考へ添へて、更に又世上の一派のなぐれめきたり。うちく雲井近き御わたりおも、茶烟につれてまうのぼるらむや。實に一世の榮といふべし。ひたすら己がすける方に、酔ふけりといふこと勿れ。酒造を業として、茶を好めるに、獨りめたるもて、更に醉るにわらずといふ。

いまの世に誰かひ汲みてまらざらむうち山がはの清きながれを

居士在焉まゐるす

○思ひしや今日のまといひ、山田の大人井後園にひかれ來たるに、やがて主人の心なりたり。さればこそ、庭もせに櫻を植し今年こそ我世の春のはじめなりけれ。と諷ひ出給へるや、かねてあまれる嬉しさの、にはひ渡れるなりけり。其花陰に、百よろこびの聲をさへまらべそへたり。

めでて見る心をまゐりてうぐひすもれもふ人くと今日のなくらむ
とより出し二の舞の袖も、はぎまゐらす外ならむや。

○御池のはどりなる大鳥羽ぬしより、尋に近き鯉一こむ、荷ひもたせおくれるに、彌生三日の花かつら、かけても思はぬ賜なりけり。まらうどのやことなきおも、立のぼれる心地して、やがてそゝるぎてうじさせ侍るとて、

うれしさに我さへをどる生鯉のひれさりはらへ今日のみあへに
○此夕べ、伏見なる石津氏より文きたれり。打見るにふと胸つぶれて、無異なる文の、無異と書くべきなり。かく折にふれて怪しう打おどろかる、もわりなしや、などいひもて急ぎ開き見れば、果して無異ならざる文なりけり。何ぞやの無異と書くべき。國なる娘、去りぬる六日相はてたり。遠路をへだて殊に残念く、とありて、斷腸の歌數首かいつけたるを、讀みもてゆくまゝに、

ながれくるなみだのいつとせきかねつ水上いかにわきかへるらむ
かく獨ごちたるを、さながらかいた捨てむもど、御もどへまゐるなるべし。

○門人岩月白華翁、我山陰に通ひて、道をとふの暇、かたはら禪を談じ、又此有木山の昔
を語り、茲に終焉をどらむの志願を語ることを屢なりといへども、一度も梅を栽るの言に及
ばざりしに、怪しきものから、この老の耳の遠き薫を、何も聞きとらざりしや。又東山の
西行庵こそい、あらまほしき處なりけれ。都にすむ程に、まばしばかりだになどいふを聞
きて、これ因われれば、たばかりて、その願とげしめむを契りおけり。さて再遊を待つ
こと、年の六歳を過ぐといへども、ふつに音たれて、道行く人の言傳もなし。思ひきや、
速く此世を去りけむとい。たむたく涙、さながら満ちぬべし。さらばまた逢はむ事はや。

後の世を眞手に片手のおるもなし何か有木のやまびこにして
今や小原氏、本來むなしき跡をとめて、數千株の梅を栽つぎて、般若の種を蒔殘せる其追
福に、さらふもいはず。好めりし風雅の上も、翁の歡喜れもひやるべし。山にも吉備
の中山。水にも帯おせる細谷川。いつれの處か梅香ならざらむ。いつれの處か塵埃を
どいめむ。大慶嶺の白雲も、何ぞいよその物ならむ。
もろおしの山のあなた梅のはなあゝにぞかをるうぜのまに

かくまをせる誰そ。洛東の居士梅月堂のあるじ在焉。

○五月三日、清水寺に詣で侍りて、各道にしてわかつてる、

二首の題 遠山郭公 登過水上

心あてに聞くひとこゑのはとゞす山の端よりもかすかなりけり
大澤をすぐるはたるのうき草のたゞよふさしやとまりなるらむ
といふもの、耳の山より遠くして、其聲も聞えず。日の長き盛あして、暮れざらむお
の、其光も見えず。歸るさ大谷の茶店にまどひて、青柏葉に、さらし物もりあへず、汲ま
むとするに、いつくよりか、殊なるみさかな二品調じ來れり。

言の葉にひるがへりたる唇のかわける上にそゝぐ露かな
この豊年の小田庵より、あふれたるなりけり。耳に聞き目に見むの奥ふかし。先口こそい
と喜び侍るを、あないやしとな咎め給ひそ。
東塙老樵景樹

信彦君みくりやへ

○三條少將の君の御詠草に、香川先生の高齡を云々などありける片へにかい付けたる。
祝ひ下されし畏くも忝き物から、
七十ちにあまり長くて玉の緒のこゝろばそくもよわりけるうき

あはれと見そなはし給へと申す。

景 樹

○ぬらさじと君を思はぬ人しなれば、早く數つもりたらむに、珍しきもあはさじものから、

まぐるやど今朝だに雲のたちまへばかさなす茸のまづさゝぐさあり
あなかしこや。

清 安

東塙大人御もとへ
返し

此品おくれる、何處のあれど、君よりと聞もあへせ、まづをどつ年にや、従ひまゐらせて、遊びくらしせし山科の秋の香のよさ。且加へ給ひたる御歌の末、先さゝぐさの語勢に、勢語をさへ思ひそへ出で侍りて、

かさどりの山さへこゝにうつしけりこれやたけをの力なるらむ
と返し奉るも、なめすゝきのなめしう、にが茸のながくしきや。あなかしこ。

景 樹

山田の君へ

○正月十五日の朝、菓物のなる木を祝ふとあり。其祝ふやう、斧をあて、なりさふらふ

が、なりさふらふといふゆゑ。人の國のありやなしや去らず。

山はたにたてる古木の柿の木もなる事あれば祝はれぬるを 夢 宅
と加へられたる一ひら、この別れ參らせし時、みなしと草に我やなりなむ、と詠み捨て給ひし、同じみ心もこもりけむかし。

まかないひそ信濃のみすゝ苜拂ひ言の葉山となしたるやたれ 景 樹
○此年魚一箱、只今近江人より贈りたまふ、とどりあへず呈し。今日御初會の御饗に、めでたく御加へ被下いひ、本懐にゆなり。

これのかの息長河の名におひてこんどしぐにわかゆなりけり

二月十日

御一笑

景 樹

松園のみくりやへ

○龜園のあるじ、身まかり給ひし又の年の彌生の十日あまり、雨をばふりける日、其家刀自より、山吹の花を送られしを、山吹のみいなき人の形見ともいはぬ露こそ袖におぼるれど打ながめたる、そもはや四年の昔となりぬめり。さるを今年、同じ枝を同じさまに物せられたるに、今更打おどろかれて、例のおくれたる老のくりこと、
年月に言の葉さへもかさきりぬやへやまぶさもあはれとや思む

この常に、事にふれて、なつかしくも悲しくも、思ひ出て、うめきがちなる心をいへるなるべし。

○三月三日、大鳥羽氏への返事、

めづらしき大唇五口拜領、御懇志悉く盡しえず。直様兒女どもとりまかなひ、いづく如何なる所ならむなどやし騒ぎて、備へ侍るを、

うち見ればやがてひゝなの樓もいまふきわけのはまぐりならし又ひ、住吉のにやなどやし。

○茶室康哉が、越路の日記のおくに、

此文屋康哉ぬしの越路の日記の、かの物去り人の、中々なる古言をやとひて、書き感はしたる類ならせ。有のこゝろ思ふがまゝを、平語もて書きやられたるに、其事情塵の隈なく顯れて、おもしろくもかしくも、はた哀にさへ思ひ給へられて、まだまらぬ越路の空もなつかしき雁此ふみやと誰か見ざらむ

梅月翁景樹

○物に植ゑたる朝顔の、いとうるはしきをもて来てするたる、何處よりと問へば、おの楊子が、昔の手にて、八月幾日種とりぬくと書つけたるが、一函底にありけるを見出て、春の頃ま

さかけるが、かく咲いでたるなりといふを聞きて、打見るおたへず、物ぐるやしくよめる。

花見よどのこしおきつるあさがほの種いなみだをまけとなりけり

○望南翁の、盡七日ならむとまる夜、何がしと歌物語をる傍に、翁昔のさまにおはして、例のつく／＼聞き給へりと思もをへず、夢の覺おき。餘りおも惜しき名残の、又もや見ゆると同じさまに臥したれど、いやはかなくもなりまさりて、其かひなし。

こひまゝも現おのあらぬ夢さへおふたゝび見えぬ世をいかにせむ我や見し君や見えけむおつかなあまゝのほかのまにとはまし

○元興ぬし、高瀬川のはとりおて、打まねく人のなけれど青柳の枝の春風心ありげあり。と詠めるの、さすが心ありげに聞えて、其名残たゞならむや。

ひきとめて語らふほどに高瀬ぶねみなあき下せかへるよしなみ
今一夜の、此川岸おと思ふも、いとわりなしや。

○大滋ぬし、こたび始めて我社に遊びて、濁江に生ひ出づる蘆をよしとのみ思ひまぎにしこの悔しさ。とよみ給ふを聞き喜びて、おほけなくも猶いはく、

願はくいのゝかりそめおおもふなよとよあしはらの一もとぞこれ

○祇園西門の前わたりに、舊にふりたる筒井筒、それ搦初し水上の、此御社の御名におは

せる女御の君、いまだ世に忘れ給はず、賤しきもとの玉禪、かけまくも畏き流の御跡を
 きたひて、これの鼻祖なる岸野氏、其かたはらふ假のよしをの茶店をかまへ、かゝげ初た
 る初昔木芽煮賣の一炊も、今ハ蘭麝のかをりとなり、早く花街の匂となれり。就中中祖治
 郎三翁の三の字ハ、三都に轟く三絃の三にして、一二と上に立つ人なく、不二のね高き白
 雪の調を、當時和したる其人ハ、天の下に二人なき大石良雄の大人ありとや。これおまつ
 るふ小野寺村松の高士たちも、共につどひて諷ひかはせし友垣の隔なきに、此翁の世に秀
 たる操のまらべも、推し量るべし。それより百千あまりの年月を経るまゝに、日に榮え夜
 に賑ひて、いやまし水のわきかへり、終ハハ溢て溢れなむ、世を救はせ給ふ此頃のみまつ
 りおどの有り難きを、仰ぎ奉り、かつ身の程のおほけなさを恐れみて、もとの井筒の水に
 すむ蛙の聲を聞けば、

いにしへを汲みておもへば筒井づついつまでつきぬ泉なるらむ
 かく聞きとり記せるハ、天保十三年の師走、事始とことぶく日なり。

洛東々塙老樵景樹

かるかや集 終

景恒翁歌集

高橋 古道輯
 松波 遊山校

春生梅柳中 雲の上のみかきの柳うめ盡此花よりはるやたちわたるらむ
 早春 柳 昨日より今日また長き青やぎ此糸ハはる日と一つなりけり
 遙見山花 はるかなるは幸をさへに思ひいでてむかふをしほの山櫻花
 雨中山吹 ふる雨にうは濁して神奈備のさしの山ぶさかげなかりたり
 朝更衣 けさ見れば都大路をゆく人の袖おもはるハのこらざりけり
 つばめ つばくらめかひわる見れば子安貝えたるよりこそ嬉しかりけれ
 春日鷹狩 鶉なくおきの花野におどらめやさくらちりしくみ狩野の原
 ゆふがは てる月の桂のはなやおれならむ暮るれば匂ふ此きの夕がは
 早苗 多かりたちてとる苗いつうつくは山ふもと此雲や限なるらむ
 杜夏 祓 白ゆふ波よる浪にしてかぜの杜よどまむ罪も吹やながさむ

曉 鶉 河 うかひ舟有あけの月にさすみれば此よの果の心地おそすれ
 夏 朝 夢もなき短夜なればたましく明たる此ちの月をみるかな
 江 邊 蟄 こもり江の芦間がくれの捨舟おどもすかゝりの蟄なりけり
 都 月 月すめバ八十島山のおもかげもみやこに浮ぶひるさはの池
 故郷秋風 ふりにける高津の宮の秋のかぜおほみ心もをのやおもひし
 放生會 いはまみづ今霄はなてるいけ鯉の心もそらにのぼる月かな
 松 虫 ゆふ露にたかく聞ゆる松むしの聲おも月やどりけるかな
 關路時雨 都おひまたやかまみど歸るべき時雨おこゆる白かはのせき
 千 鳥 堰せぎこを浪より奥に聲するの千鳥が淵のあたりなるらむ
 雪中炭竈 小野の山いりにし人やすみ竈けけぶるも雪になつかしき哉
 初春待花 うぐひすの初音きかむの今よりも遠やま櫻まちわたるかな
 聖唐法樂の歌よみ侍りけるに寄道神祇を

ま心の志をりさだめて敷鳥のみちびきたまふ神のこのかみ
 蕭 寺 花 古寺の老木のさくらさきおけり終の行方ねがはざらなむ
 曉 橋 あけがたにちる橋のひとむらいたが見しゆめの昔なるらむ

黄 葉 いはぬ色いふにまさりて柞葉の梢の秋ぞあはれなりける
 夜 雪 草も木もあらはれにけりぬばさまの闇をバ埋むゆきの光に
 霞 夢 さめて後音もなごりもなかりけりふる玉あられ手枕此ゆめ
 深山花 山ふかくひとりにはへる櫻花おのれも雲のおろなるらむ
 山家早春 やまにきて始めてすみし心にもかへるの春のあした也けり
 落花如雪 今よりのちるまでの見じ櫻花わがくろかみも雪となしつる
 春 田 さくらちる苗代小田の水そこになくや蛙のたねも蒔きさり
 深山時鳥 雨はれて杉の葉けぶるおく山の月にあたらふほとゞす哉
 夏月易明 夕べくなか空にしてあけにけり心ながさひみじかよの月
 夕 鹿 大堰川みねの柚木のくれゆけバ鹿の聲こそおろしそめりれ
 岡 紅 葉 岡べなるかくての稻葉荊おげてほすかどぼり薄紅葉せり
 殘 紅 葉 色よきが残るを見れば木枯のふきてぞめたる一木なりけり
 名 所 鹿 をぐら山入相の後の鹿のねふたゝびぬるゝ我たもどかな
 清 瀧 冬 もみぢ葉を風のさそふにさそはれて聲も空なる清瀧のなみ
 岸頭落葉 ちりつめバ風も崩さぬもみぢ葉お三室の岸の高くもある哉

松間冬月 さだめなき松の木間の月見れば音のみ風はまぐれざりけり
野 寒 草 霜の中に見いでつるこそ哀なれ枯野のはらの大和なでしこ
祖父黄中二十三回忌冬

神無月まぐる、空の三日の月ありてなき世も廻りきにけり
めのもひにこもりける友だちの許に

覺はて、目もあはぬ夜の木枯に君をばまして思ひおそやれ
壽老人鹿をまがへて坐したるかた

天降りきみがともなふさを鹿の上毛のほしも神さびにけり
野 袴 衣 さよ更けて衣うち野に音まると大宮びどのまのびづまかも

題えらざ つくま江にうつる伊吹の風の上に千鳥なくなり夕和にして
さねかへる山下風のさかぬまの花の上にもつれなかりけり

之ゆと見し雪の白浪たちかへりかすみにまづむ末のまつ山
かいら火に嵐をうけて大井川やまかげまるとさす鶴舟うな

紅葉浮水 もみぢ葉をのせたる見れば大井川秋のくれゆく筏なりけり
尋 虫 聲 いざともにも我も尋ねむさを鹿の妻とふ野邊の松むしのこゑ

新樹妨月 新桑の窓をかほへる葉がくれに眉ばかりこそ月のもりけれ
初春見鶴 大御狩ねのひにかはるあしたより鶴のすむ野と成にける哉
諫川美啓君に思ふ心をよみてまゐらまるとて

てる月もよしやあしやの障なきこ此瀬の清し諫かはのみづ
雨後夏月 いかばかり夕だつ雨にぬれつらむ光またいる山の端此つき

菊花未開 ねしなべてまだ咲わへぬ菊の花いづれか千代の始なるらむ
樵 路 雪 をの、柄の昔や雪にかへる山まらぬ家路のこゝちこそすれ

前桂園翁十七回忌春三月

教草我つみためし春ならば暮るゝに身をばあかかざらまし
河 邊 柳 ゆくまづのもとの緑のふる川の柳ばかりやひとりまるとらむ
落 花 大堰川ちどりの淵をけふ見れば花は雪ちるみなどなりけり
田 上 稻 妻 稻づまの田毎にさゆる影見ればはての稻葉の雲間なりけり
按摩に犬のざれたるかゝ

花ぼつかな臘月夜のうまがまをひくや誰なり花のたもとを
いつよりもさやけかりけり玉櫛笥あけはきれたる鶯のこゑ

梅

諸共に梅のにはひとなりけり我をどがめし人のたもども

春

駒 野をひろみ霞にきゆる影みれば皆ひばり毛の心地こそすれ

卯

花 うの花の花なることも去らざらむ雪をつねなる越の山びと

橋

袖にちる花たちばないにしへの形見を風の送るなりけり

水

室 ひびるもる袖ならでしもさゆる哉氷にふれしうた此山かぜ

鹿

きかぬまの慰むものと思ひつる鹿のなくねに音のなうれつゝ

駒

迎 わふ坂の關の岩ねもさゆる夜の月おの駒もつかれざりけり

菊

なが月のつきと匂ひし白菊の花のひかりありわけもなし

時

雨 袖ぬれし浮寐のなみの跡もさきぬ野の里に時雨ふるなり

水

鳥 水どりの大空たかくたつものをうき沈む身にたどへつる哉

雪

ふる雪に宮もわらやも埋もれぬおや年波のおゆるなるらむ

梅尾にまうでける時紅葉切手といふものをこふとて

もみぢ葉につくま心をわはれみて我にの許せどがのをの山

題えらず 枯れはてし桂の枝にみの虫のちよどなきて秋をふるかな

たえくの夕日の上にふり出ぬわはれ愛宕の秋のむらさめ

山水のかたに 深からぬ山のこゝろも楽しきをおの雲水のかくのが

雪 透霞 白雲にたなびきかはり山の端の雪をおびさる春がすみかな

田 邊 雁 を山田の稻葉がくれお聞ゆなりきのふの空のはつ雁のこゑ

東風解氷 にはひなき氷の上をふきおけり花まだおそき春のやまかせ

池 上 月 さやかおも汀はなれて池みづの底おぞ月のあらはれおける

伊東正雄追悼に寄笛懷舊

大空のつきにえらべし笛竹の遠きかたみとなりけるかな

神 祇 おもはなむ青人草のすゑまでもつゆもらさるかみの恵を

菊花始開 菊の花はじめて匂ふうれしさに千世の願もわきれつるかな

友なる古道と共にいなば山の麓に語りひくらしける日

豊年のいなばのおそび思ひいでて別れむ後もけふを語らむ

草花得時 秋たちてかたわれなりし月草の花もさかりになりける哉

峰 時 雨 ふじのねの雪より後の初時雨まぐる雲にふゆをえらむ

水 邊 鶯 さそふ水あらばどまちし鶯のはつねさおゆる白かはのさと

熊谷直好ぬし身まかりし時

庭女郎花 誰かかもかくれどころぞ女郎花去のびに花のみゆる藩ぬ
 樹陰納涼 ひどもどの櫓の木かげの涼しさに月と我との離れかねつ
 殘菊 菊の花けさおくまもに驚きてさぞ露のまのあきやこふらむ
 關路紅葉 よさかげにもるを思へばこは山紅葉の爲の關屋なりけり
 子日鶯 ひさみとて我のこしかど鶯のはつねおまざる松なかりけり
 黄葉 紅にはるのそめしをかへるでのあらぬ色もうつる秋かな
 或人の元服の祝ふ
 願はくは初もどゆひの今年より千とせの後も面がはりまき

溪嵐吹波冬氷盡

氷とく嵐のやまのいちる谷けさいちぢるしなみのはつはな
 水 五月雨の松風さむきから衣うつかどばかりくひな鳴くなり
 六十一賀に 吳竹のもとの根ざしの一ふしに數へ返して千代をこそ經め
 八十賀お 蘆たつと君と保たむ千代なれば二人何れかたのかみおせむ
 角田川にももし侍りし時

殘鶯 はるくと我思ふ方をみやこ鳥とへば教ふる富士の遠やま
 落葉有聲 かまぐに殘る霜夜の虫のねのたまぐにちる木葉かな
 秋人事 賤のをに稻葉からせて鶉かるをかべの宿のすみよかりけり
 若菜 つむとなくつまるゝもの鶯のなき暮す野の若菜なりけり
 元旦 且 ゆづるはの影も一つに汲みてけり我山の井のけさの谷みづ
 野鹿 秋の野お月と出たるさを鹿のいる山へおや入らむとすらむ
 秋虫 長月のかざしの花にやどりてのこてふの夢も久しかるらむ
 霞 唐土のよし野の花もへだてぬやひろき霞のこゝろなるらむ
 納涼 みな人の思ひもよらぬ堤井のこなぎがもどぞ涼しかりける
 關路紅葉 梢みなもみぢになりぬ昨日かも花にこえつる足がらのせき
 閑居虫 あけて又なきまましたる虫のねお晝も長夜の木がくれの宿
 寒梅 雪のうちには年々にはふ梅の花さきそめてこそ冬めさふけれ
 燕子花 うつろへば又さきかはりさけり又うつろひ變る燕子花かな
 深夜春月 更おけり昔がたりをさゝながらねぶるに似たる春の夜の月

田柳 ふる川の田づらにめぐむふし柳秋のたりほの心地こそまれ
 山家時鳥 なきて世にいづるを聞けバ時鳥わが里よりの初音なりけり
 晩夏 蟬 聲をのみ誘ふと思へや秋風のふくともなげに蟬のなくらむ
 十六夜月 いつはりのある世も月お嬉しき昨日にまざる十六夜の月
 旅行 菊 きくの花手折るにつけて故郷を思へバとほき山路なりけり
 海上雁飛 汐氣たつありその浪に聲ひして影こそ見えぬ雁の來おけり
 殘菊帶霜 けさ見れば露のみだれを初霜のおき静めたるまら菊のはな
 獨聞水鳥 聲々にわぶるを聞けば水どりの浪の夜どおの友もありけり
 池上花 池みづのかげの花のみちるみれば靡くたま藻ぞ嵐なりける
 暮春 霞 今どまる雪より花に打なびくはるのかすみのことろ長さ
 殘鶯 風わたる若葉がくれお木傳ひてかへり忘れしうぐひすの聲
 撰虫 撰ばれしさが野の虫の今宵より月のかつら此露になくらむ
 海亭 萩 海人小舟かへる菅屋の萩の葉にふく秋風のゆふなぎもあし
 風前千鳥 かぜさそふ磯山づたひこえくれバ袖に浪よる夕千どりかな
 磯春草 海士が住む磯の若くさ漁火のもえしどころにもゆる春かな

杜宇 ほとゝぎは花橋おなくときひむかしの人のこゑかどぞきく
 對菊待月 ひむがしの雛がもとの菊の上にもたぬ夜もなし山の端の月
 落葉無行路 をぐら山み幸の道の一すぢのちるもみぢ葉の埋まらずもがな
 寄世祝 ちはやふるいは長姫の限なきよはひぞ御世のよはひ也ける
 寄紅葉釋教 末途にちゝもはゝそも染がみの黄なる泉にちる世なりけり
 題まらざ 山田のあぜつたひする里人のふみ定めたる道やなからむ
 磯花 風ふけば松がねあらふ白波のうへおもさけり花のひともど
 紅葉 はれくもりまぐるゝ頃の紅葉狩やどる木かげも定めなき哉
 船五月雨 舟人のこゝろ長くも礎おろしおひて急がぬさみだれのころ
 月下鹿 またやみむなくさをしかの聲の中に半いでたる山のはの月
 寄月祝 二荒山二もゝどせの上にいでてりそふみよの秋此夜の月
 子日 誰が爲の千年ならねバ小松原さもひく人のあまたなるうさ
 水邊 鶯 うぐひまの聲きゝながら故郷の野中のまみづ汲きてける哉
 枕下虫 手枕のまくらのまきとふきりくす誠の露のまらぬなりけり
 寄杖祝 月花にともなふ杖をともまればわするゝ踏たのしからずや

雪 ふる雪にをばな高萱うづもれて岡邊の宿のわらはれおけり
題まらず 海士小舟はつせの山の暮おけりかきみの底お宿やからまし
月前念佛 月みつゝなき世の友を數ふれば佛のみなどなりにけるかな
浪にたづ鳴きわたるかた

和歌の浦の浪立かへる蘆たづいなぐさの山や越てきつらむ
ひなのかた ちはやふる神の姿のきみ見れば其うき橋もおもほゆるかな
岐阜なる古道がもとに遊びける頃長良川の鶺鴒見にもものして

上つせの舟ぶせ山の河よどに亂れそめたる鶺鴒かひ火のかけ
かやり火のあはれも深し長良川鶺鴒の秋のものにざりける
かひ下を岩瀬をはやみ篝火のけぶりも浪おたちおくれつゝ
子を思ふ旅ねかたらば鶺鴒人なか〜我をかなしと思はむ

同じ頃稻葉山の麓なる木葉庵に遊びて

鹿の聲たえけさくらむと思ふおもねたさの君が寐覺也けり

同じく蓼園にまかりて

うらやましきものさの下も八千草の花になしたる隠家には

同じ頃久田宗全ぬしの名古屋より尋ね來りてさしてくる方の雲井の外ながら都お歸る心
地おすれとよみて出されたるかへし

かへるべき都もわされ果おけりいかなる方に我のわかれむ
寄道祝 あき柏うるまの果も言の葉の道のまことおえる世なりけり
晴天歸雁 かりがねの日和にかへる聲さけべ別嬉しきをりもわりけり
松のかた いつのともわおを築ゆる松の葉の春の春なる色をみまらむ
岐阜なる横山鈴翁がもとに

かしてくも神の授けし鈴の音のさや〜どこを今も聞ゆれ
十五夜月明 ゆく末も今宵ばかりの月のあらじ我世の限おもひ出にせむ
春月幽 影ばかり霞のおくにいでにけり昨日の見えし山の端のつき
閑居 雲のゐる遠山どりのさくねさへ波のかに通ふ庵のうちかな
山家秋 都びとさびしきかたに眺むらむたのしむ山の秋のけしきを
題まらむ 植槻や田中のもりは夕あぐらふしよき聲のまが子あるらむ
長月ばかり東にまかりし時

ねがふ事けふこそなけれ箱根山をばなあかゝる富士の白雪

鶯入新年語 うぐひすの聞くに楽しき初音こそ春の景色を語るなりけれ
宮わたりより菊を給はりたるお

雲の上に匂ふを折りし菊の花あまくだりたる星かどぞ見る
山家花 なかくに我山櫻さきしよりはなのあるじいとふ人もなし
題えらず なれくて松に親しむ君なればへなむ千年もやましと思はむ
祝 たみ草もなびけるみよの姿をやまづ言の葉の風にみまらむ
鹿二つさてり月もあり
妻あふる聲の聞えぬさを鹿のれもひさりてや月を見るらむ

菊に着綿きたるかた

ゆきからで君に頂くさせわたの下にや花もうれしと思はむ

雪中炭竈のかた

小野の山ゆきの下おもすみ竈のはだしのがれきたつ烟かな

竹

寄花月祝

菖蒲

はる秋のえらず顔おてくれ竹の心たかさや千ひろなるらむ
君がよにねもひありやと人とは嵐のさくら廣さはのつき
五月雨に其根も清しほととぎすなくや玉江の菖蒲なるらむ

花留客

水上月

翁をよめる

一本菊のかた

冬旅

海上霞

心静酌春酒

薩摩人の國へ歸るを送りて

をしといふの世の人なみぞ君と我心かへせむあはむ日迄に
同じ國人と子日に神樂岡に行きて

湖 晚霞

幽栖秋來

歲暮祝

獨釣寒江雪

あらずの今年に遠き友を得て千代のところに我の來おけり
まは尻を夕こほくれの諏訪の海の霞にうかぶふじの遠やま
柴の戸を風のあけたる朝よりたれどいなしに秋の來おけり
限なくあまらある世の喜をはるにゆづりてとしの行くらむ
雪の友またむせぬこもり江此釣舟のみ罪なかりけり

端 午 祝 たまのをの長きが上に長かれと祈る子のため引く葛蒲かな
岐阜に遊びて歸りて此ち藤井眞壽が我岡崎の里を尋ねける別に

今も猶みの、旅麻のゆめなれや我わかれゆく心地のみして

二月子日によめる

初春の小松のひくも寒かりき今日ささらぎの子日してまし
うぐひすの心のまゝの我宿の木づたひのあす枝なかりけり
燕 來 歸りくる去年の巢だちのつばくらめなが故里の都なりけり
餘 花 去らかしの水枝ふきこす朝風に思ひたえたる花の香ぞする
あふひ 藤はらも平もけふのろかつらみな元結にかくるなりけり
馬上郭公 山ふかく尋ねつかれてのる駒にみづかひをればなく霍公鳥
雨中女郎花 村雨のふりのまぎれお女郎花ぬれたりなどいひやよらまし
虫聲非一 つくくと心をどめてさく時の似たる聲する虫の音ぞなき
木 枯 玉がしはちりれくれたる枝にのみまひても吹くか木枯の風
題えらず かみ無月はつかあまりの月影に覺束なくもてるもみぢかな
故郷冬月 冬がれの萩のほだにも月さけてもとのかけなき故郷のには

寄網代戀 網代守る人の夜寒お似たれどもまつに慰むかゝり火もなし
西行忌に寄花述懐といふ事を

かろくちる花の心にまかするをなに雲水にたどへたりけむ
瀧 月 すみのぼる月の光に瀧の音も木間はなれしこちこそすれ
山家若草 かずならぬ身をたたく山に樂しみて世にいつまれぬ春の若草
青柳風靜 青柳のちからなげなる枝なればいたはりてふく春のはつ風
富士の嶺のなかばをたづね飛ぶかた

大空にたもひあがりし芦たづね果なき富士の峰もこけらむ
山月聞鐘 山ふかみ聞けぬ鐘のきこゆるのかならず月のすむ夜也けり
人跡板橋霜 去のびづまかよふ小川の板橋の去もに心をおくあしたかな
京極宗賢 ふえ竹の誠をこめし一ふしになり出し神もある世なりけり
五月のはじめ初日庵諸見君身まかり給ひしをいたみて思ひつゞけたる

言の葉の道の奥にも死出の山ありてこえゆく君ぞかなしき
天がけるたまの行方を願はくは我に告げよ山ほどとぎす
残雪半藏梅 まがひつる雪と花とを鶯のうつりうつらぬ木ぞ名にぞまゐる

花 契りしにまさりて花の樂しきはからずきつる木陰也けり

女比衣うつかた傍にうなる子をり

から衣うちやむほどの手すさみの子の黒髪をなづる也けり
文使のかた 初春のはなある文いとまある大みや人にまづやさげむ
旅 花 よしの山花の日かすを旅ねしてちる別にもあひにけるかな
海上初雁 まつ人のれもひ離れし沖の海のあらし小島のはつ雁のこゑ
山 月 昇 離れむとする山松の月みればちいのおぐねもなげつべき哉
田家秋興 山田もるいはの翁にこととはむれくてのみのりさを鹿の聲
題えらず 日ぐらしの聲の末より咲にけりわが山かげの夕がほのはな
水鳥知主 我宿のいけるを放つ心にかへりてをしもつながれにけり
或人の母の還暦の賀

手にならず君が櫛笥のふたゝびも三度も祝ふ千年なるらむ
夏 朝 天 ねき出てまばしと向ふ朝月夜きゆるまばかり涼しきいなし
名所持衣 なつかしき嵯峨野の奥のさよ碓みのまもならぬ人や打らむ
年内立春 あら玉の年のをはりに立ぬれば暮るゝ春ともなりぬべき哉

十月紅葉 もみち葉もうつりうはりて古の秋にのそまぬ色を見すらむ
曉 花 このよにいなき曉をはつせ山朧もへば花にぬる夜なりけり
夏雲多奇峰 夏されば雲あそなけれ空の海八十しま山のたかねのみして
鹿 聲 送 秋 ゆく秋をふくり傳へてなく鹿の聲も今宵やまゑのまつやま
松 上 雪 ことさらに雪をうけたる老松の心づよさを見よとなりけり
月前旅情 故郷をわかれていでし涙ゆる月にもうとくなりにけるかな
朝 遣 ふく風のちらし傳へて蓮葉のつゆの行方汝見する今朝かな
古道の詠草をかへすとて

ながらへてとはむと思ふ一筋の心いつねにゆきかへりけり
ま た 耳なしの山人ならばほとゝぎす幽なるねのもらさいらまし
玄徳孔明をどぶらふかた

もろあしのよし野の雪の冬どもり簾のみとれもひけるかな
此歌の島津久光公の御前へ景恒翁と書工對山とを召されて雪中玄徳
孔明をどぶらふかたを對山にかゝせ翁に歌よませさせ給へるによみ
て書き給へるとなむ聞傳へ侍る

秋來水邊 山まみづとくも涼しくあるものを松にねどろく秋のはつ風
 題えらざ さく花の雲よりくもに宿かりて吉野の奥にわれの來ふけり
 賀茂祭 あふひ草心おかけし神やまのあわれの今日になりける哉
 月前舟 みなれ棹とるといすれど月影のさきにまかせぬ舟なかりけり
 網代 み吉野の枯生の尾花かりとりて網代つくろふ冬の來ふけり
 寄鳥戀 矢形尾のま白の鷹の高くのみたつ名をいかでとり返すべき
 飯梅花 うめの花曉おきのかざしより夕べのほしとなりけるかな
 初春見鶴 明わたる春を姿のあしたづの雲路よりおそたちかへりけれ
 子日に清根が七十賀しけるによみて遣しける

子日する千代の處にすむからに君こそ千代の主人なりけれ
 風光處々生 はつ若菜つむ我袖もよそあての春のけしき此一つなるらむ
 雪消松緑 大空のみどりにかへる山松のゆきげの雲ものこさよりけり
 落 花 櫻花まばしちりやむ風のまの露のまよりもはかなかりけり
 江上春望 のどかなる難波堀江の舟よばひひくの霞のつな手なりけり
 父君の十七回忌に手向けたる

竹 裏 鶯 いつまでか世をうぐひすと鳴てのこみ親の杜の陰を戀らむ
 沫雪の竹のはだれおふりにけり羽ぶきも寒しうぐひすの聲
 よをのこす竹のは山の鶯のこゑより明くるどころなりけり
 紅 梅 山賤がそのふの梅のくれなるの花の末つむはるのあわゆき
 花 散 雨 ふる雨にひたぬらされてちる花の風おだふとも思ふべら也
 櫻陰夏來 花の時ひと夜やどりし木の下のよき夏かげと成にけるるか
 卯花盛 えださわにさける卯花雪をれの聲たてつべくなりける哉
 雨中時鳥 ほとぎを折々なきてとはざらば誰と五月の雨むもりせむ
 雨後時鳥 雨のうちおなきつらめども時鳥はれて後おそ聲なきこゆれ
 水上夏月 むすぶ手の雫のまおも月影のやどるせ遠くなりけるかな
 疎屋夕顔 君とみてすぎうかりつる夕顔の花のむかしの垣根なりけり
 扇 まいしくも扇のうちにてめてけり誰があつらへし秋の初風
 照 射 五月山火による鹿のはかなき夏虫おこそおくれざりけれ
 尋 時 鳥 やま深くたづねこしかど時鳥とはき初音もきおえざりけり
 す み れ 去づのをがかへし忘れし小山田の莖ひとむら今さかりなり

殘 鶯 鶯のけさなほなきてのこらせバ昨日の春をたれどかたらむ
 橋 邊 螢 はし柱はたると朽てながら川かけ渡しけんむかしとふらし
 初 秋 風 萩の葉の露ふきをむる秋かぜにやがて亂るゝ空のまらくも
 一鳥過寒水 横ざりてたつ水鳥の鳴きてし一聲此まもまたバこそあらめ
 夏 草 露 つゆまげき夏野の薄いつしかも亂るゝばかりはふり出らむ
 濱 雪 友千どり行方あとなくふる雪に濱松が枝も見えななりなき
 風 靜 花 盛 ささみてる花靜なりふさかよふ風もにはひに奪はれおけむ
 初 時 鳥 時鳥をしむに似たるはつ聲の我さくからにうれしかりけり
 惜 落 花 このゆふべはつ聲たかし時鳥さゝもらまらむ人もなきまで
 河 山 吹 をしみえぬ涙もあるを別踏の袖にかさねてちるさくらかな
 海 眺 望 貴船がは岩かけにさく山ぶきのねをたゝずしてなく蛙かな
 月 前 花 二見洞まだ明はてぬ浪のうへに波のくゝまらむ富士の遠山
 岡 邊 寒 松 ささみちて雪かど白き花の上に春の夜ならぬ月もすみたり
 瀧 下 燈 月もらぬひまさへ白く見ゆるるみ雪ならしの岡のべの松
 はつ燈きのふかもえし瀧の上のあさぢが原にはたるとぶ也

海 邊 霧 いかおせむうだの松原霧ふかし浪おもしろき處どおもふ
 瀧 月 瀧つせのよどむ所の月見れば雲まをえたるおちこそすれ
 あ ら ま た え く の 雲の衣のたまををしむに似てもこぼれけるかな
 江 上 春 望 浪の上とうさねの夢や残るらむ難波はり江の春のわけばの

此一卷の我師故景恒翁のよみ出給へる歌なり。おのれ年とる書き記
 しおき侍るを、こたび寫して、資之大人の御もとに、おくり参らす
 るになむ。

明治二十二年七月

高橋古道



景恒翁歌集 終

須磨日記序

今年の秋も例の鴨川の邊なる何がしの樓に寓居して日毎に桂園につどひて歌ものがたりし侍りけるついでおのれいへらく物の哀をつくさむふの歌枕にまぐものゝあらじ歌枕すべくゝまづ須磨明石とこそ思ひ給へられ侍れ世の讃岐まうでの道のつらにたゞに見過まべき境かゝいざふりはへ給へ随ひ侍らむといひもあへぬに景周せむまやう心かろくもうべなひまして旅の調度のまうけもなく伏見の湊へど駒うちいで神崎川に楫枕して浦の初しま二十日あまりいつかの日の曉になむ舟はてしけるもどより人やりの旅おしあらねば一日の道を僅に四里五里三里と限り濱路山路の隈もおちず見めぐらひあるの巖の上にして酌かはしあるの松が根にまりかけてうたひあぐさる折々に道のつぎ／＼忘れぬ先にどて矢立硯どうでて走りかさに物せられし頃て此冊子なりけりかく人に見ゆべき心まらひもなくて書流されしおかへりて實のふかめりどて桂園の林のまりへにいほりせる奥田のみるひそくに其冊子を乞ひ得てかの走り書のまま

ながら一時風流のすり巻物しておこれふ一筆そへよといふ記中の歌のおくれたるだにあるを立かへりてもはし書加へむの猶ありずまの浦づたひあゝそ侍れあなかして

弘化四年神無月

尾張人 椿園長翁

須磨日記

香川景周

須磨明石見むとて、京をたちいづるに、八月二十日あまり四日の日なり。暮過る頃、伏水より舟出す。例の夜舟のさま、いと物わびし。往かひの舟人等、かたみにのゝしる聲かしましう、更けわたるまに、風ひやゝかに吹きとほりて、咎もる露さへこぼれかゝれば、晝の小笠などとり出でて、寝ながらにかつぎあへり。思ふとちなる浮寐なれど、さすがにわびしくて、めもわはせ。

千鳥なく神崎がはのかはふねのうき寐わびしき夜半ふもあるかな 疑 式
おほかたの世のうき寐ふいあらなくに何ぞの夜たゝかなし子の事 景 周
など思ひつゝける。

二十五日、明むとする頃、浦の初嶋に、舟はてたり。
ゆくまづのあさて小衾かつぎするあまがさきこそ明けわたりけれ 疑 式
今日の、空も心もはれわたりて、旅心地もせず。琴浦明神の社にまうづ。この融のおどりを、いつき祭れるなり。河原の院ふて、鹽竈の浦のさま、うつしもてあそび給ひし、その

かみ、此わたりより潮をくみわけて、都にはこぼせ給ひしとぞ語り傳ふる。茨住吉すいめ
松原など、とりくくにあかき。此松原の傍に、日かげ此森といふあり。 長 翁

これやこのくる、日うまの森ならむねぐらあらそふすいめ松ばら
世此中をうばらのさどに來て見ればすみよしといふ森のありけり
まつの葉にうちこそかゝれいにしへの津守の浪やこゝによるらむ
生田の森にまらづ。齋垣のあたりよろづ物ふりて、いとかうくし。 景 周

つのかの生田のもりの秋かぜを今日いそでふもならしつるかな
花のさく春ふしとは津のくにのいくたのもりものどけからまし 信 定

補侯の碑のあたりふて

きてみれば水さへあせてまきと川のこらぬものいむかしなりけり 三 貫
いにしへの湊川の、兵庫の方へ流れ出る川筋ふて、今のありあらざるといふ説ふつきて、
よめるなるべし。こよひ兵庫にやどる。雨いさゝかふる。

二十六日、天氣いとよし。海づらなる、たるみの里あて、

海人がやのせとの高萩ふくかぜになびけべ見ゆるわはち島やま 景 周
未の時ばかり、願ひし須磨の浦につく。先づ、よりの見渡し、海上のけしき、更に類なし。

只あはれくど見るのミ。中々に言の葉に、いひつゞけむも、今さらびたりや。家ごとに、か
の竹すだれかけおろして、故ありげにきみなしたる、いかでか、げよらまをしきまで、な
つかし。案内の翁をやとひ出たり。先にたちて行くく語らく、あれ見給へ、かのちひさ
き山こそ、中納言行平の君、お此浦に汐くみしておはせし時、立かへりいなばの山のど、
ながめ給ひし山ふて侍れ、いでとく書さとめ給へなど、猶えもあらぬくさくの事をいふ
なむ、中々興ある。さるあひだ、須磨寺を始め、内裏の跡、一の谷、上野の秋草をさへ、
かぞへ見めぐりて、海ばたの松陰なる、敦盛ぬしの塚をさがむ。たえず浪風の音、ひらき
通ひて、昔のおもかげ、目の前に浮びつ。

たちよれば君をまのぶの草ひいてあらぬつゆさへおさそはりけり 長 翁
見る處なつかしからぬいなし。關のあと、いふも、誠のいづれなりや、おぼつかなし。さ
て舞子の濱に到る。松のことく、小松ながらの老木にして、其たはずまひ、海のありや
うなど、更に世に似せ。聞しよりの、いやまされり。あはれ物の心えれらむかぎり、ふり
はへてもとふべきことたりなりけり。昔人浪打際にうかれ出て、心のまゝに酒くみかはしつ
ゝ、歌ひ上げたる歌ども、多くの忘れたり。

あくがる、心のつひにかへらば、世のすまふつくしはてまし 長 翁

浪に入るゆふ日のかげのたゆたひにあらはれわたる吉備の島やま
 見わたせば鷗にまがふとまがしまこゝるもなみに消ゆる今日かな 景 周
 はるくゞとこがれし須磨の浦ををいまわが袖によせて見るかな
 なびくらむ汐屋のけぶりたえはていよくさびし須磨の浦うぜ 凝 式
 心ありてたれかわはれと聞かざらむ須磨のうへ野のいりわひの鐘 信 定
 いかばかり誰にこゝろをおきつ波みえがくれする海人のつりふね
 故郷によしやかへらむはりまがたどもながめのはてしなければ
 おはふねのつらなる帆かげ西の海の夕日のうへにあらはれにけり 三 貫
 秋の日のくれなむとする海ばらにきえのありたる紀路の遠やま 行 敬
 こゝにしてきけどもうきし浪のおどかち枕せばいかあかもあらむ
 淡路島のみ、まぢかう暮れのあれり。

あかしがた迫門のあら汐はやければこゝにうきよる淡路しまやま 景 周
 今日心もおちりて、くみに抱たればあや、おのゝ足も千鳥によるめきつゝ、明石のや
 どりまでと、たどり出づ。暮ればて、啼きいつる虫のこゑ、おのつから浪のおどに打
 合ひたる、磯邊づたひの醉心、おもしろしども夢おこちま。

いまいどて急ぐ濱へのまさごぢのゆけどもかへるこゝちのみして 長 翁
 くれぬとてたどる木かげの松むしの聲ばかりおもなりけるかな 信 定
 濱づら、松虫いと多し。そや過る頃、たどりつきて龜やといふに入る。酔いよくめぐり
 て、頭ももたげず、まるびふしたるを、此宿のはした女お、たかり扶けて、やうく枕と
 らせたり。さて明けてのち、信定がいふ。

亂れあしのかりのひとよに誠をばあかしをとめぞはかなかりける
 さるなさけ、ありしにやあらむ、まらず。同じ夜、

かよふらむ千どりのこゑをききたへの枕かへしてきくねさめかな 長 翁
 二十七日、柿本の社にまうづ、さてこゝより、淡路島に渡らむいかお。高砂をどひてむ
 やなど、いひあへれど、昨日の須磨のけしきふい、いかでうまさるべき。いざ引きかへし
 てむとて、やがてこなたさまにかへりて、又同じ濱づらにありたちて、酌みかはす。

わが心うつせがひあひあらねどもありしのうらにのこりけるかな 信 定
 更にたちかへるべき心地こそせね、限あらじをとて、名残をしみつゝ、兵庫に来て宿る。
 二十八日、生田の奥なる、布引の瀧見にゆく。此瀧二つあり。上なる雄瀧といふかた、い
 どよし。されど只こゝもどより漲りおちて、さのみけしきなきり、あゝらしとて、各細き

道をつたひ下りて、瀧壺の傍に至れり。岩波の上に立もどほりて、遙に見わぐれば、始めて幾千尋をか、おちくらむともえられず。

はかりなくおちくる瀧のもとに來て水のすがたをそらに見るかな 景 周

生田やまいはがき紅葉さてみればさきのまぶさのそむるなりけり

いく田やま麓のもりによどむらむさきよりおるまさをまりのこゑ 長 翁

世にとほくひいさわたれる布引のたきをかりたちけふ見つるのち 長 翁

やま姫のてよりの糸の緒をながくかりてかけたるぬれびさのたき 凝 式

この歌ども、おのかむし、岩波にかいつけたり。

摩耶山に登らむとて、生田山此麓づたひに上る。昨日の濱への遊にひきかへて、いと苦し。半のぼりくれば、海原も高くなりくらむやうにて、大舟小舟をがひに浮べり。木根岩根にいはひて、あかまかへり見るも、さすがなりや。辛うじていさきにいたりて、坊のさずきより見わたせば、又さぐひなし。かの阿波の鳴門も、遙に見ゆゆり。かゝる高山の上にもわてやかなるが、これかれのぼれり。めづらかに覺ゆ。さるに、此山まづめいませる佛母の誓ふよりなるべし。さて麓に下りくれば、上野といふ里あり。家まばらにあり。この景色、須磨おもかくれせ、和田の岬、蘆屋の里など、目の下に見ゆ。いまだ日もた

かけれど、かゝる景色を、見捨てむやいとて、此里にやどりをまめて、例のくみかはす。

おもふことなだのまや屋此ゆふ煙みるさへをしきこゝちこそまれ 長 翁

おもかげの今ものこりて津の國のあしやのさとにけぶりたつ見ゆ 凝 式

夜になりて、漁火のはのめき出たる、おはま物がなしく、心あるに似たり。

またや見むまゝや見ざらむわが命いくたのおきの海士のいさり火 長 翁

夜網すどこぎつらなれるいさり火の消ゆるどころや和田の松ぼら

よをわたる人のわざとも思はれずさき間に見ゆる海士のいさり火 信 定

長翁凝式の、磨耶がね嵐ふけわたるまで、板じきの上に、衾かつぎ出て、ねもやらせ。おのれ信定らひ、今日の山ぶみにつかはして、引かつぎてふしぬ。曉がた翁二人におどろかされて、起き出て見れば、有明の月いと細う、海の上に出たり。

あづまやのまやの山へにひと夜ねてなだのまほせの月も見しかな 景 周

よへのねごめお、

今よりの秋のたびねおありよとや夜たゝなくらむさをまりのこゑ 三 貫

二十九日、つとめて宿をたつ。辻村といふにくれば、武庫山ほど近し。

まろたへの雲のうそぎぬかけながらたがぬぎまてし此かぶとやま 長 翁

海ぼらにきのふ入りたるゆふづく日けさ山の端にいでにけるかな 行 敬
西の宮にまうづ。こゝより難波に至るべきを、昆陽猪名野を、とはざらむも口をしとて、
道をふみかへて行くほど、いとく遠し。やうくには笹原をわけつくして、池の堤にはひ
のちりて見れば、底もあらはに水あせはて、いと思ひの外なり。めぐりの、都の廣澤よ
りも、廣からむと覺ゆ。

かれくの水草かたよるあき風に千どりなくなり昆陽のいけまづ 凝 式
ころもでに日るかかさして見わたせば猪名の松ぼら時雨ふるなり 信 定

池の東の方に松原あり。ふるく猪名野をくれば有馬山と、よみけむひの、此わたりより、
程遠しといへども、さる高ねばかりの、見ゆべきとて、それかと尋ぬるを、さだかに答
ふる人なし。猪名川を舟わたりして、日斜なる頃、瀬川の里に宿らむとす。逢ふ人稀にし
て、宿さへいといふせく、さうくしき片田舎なり。

ものごとにおくれはてたる宿なればあきのゆふべも蚊遣たくなり 凝 式
淺茅生のもみづるやどのきりくす我さびこゝろねにぞなくなる 三 貫

九月一日、よべのわびしさにたへかねて、夜ごめお宿をたちて、古曾部の里なる、能因が
庵の跡をとふ。あきはなれたれど、猶ものぐらき寂かたにして、人うとげなり。庵跡と

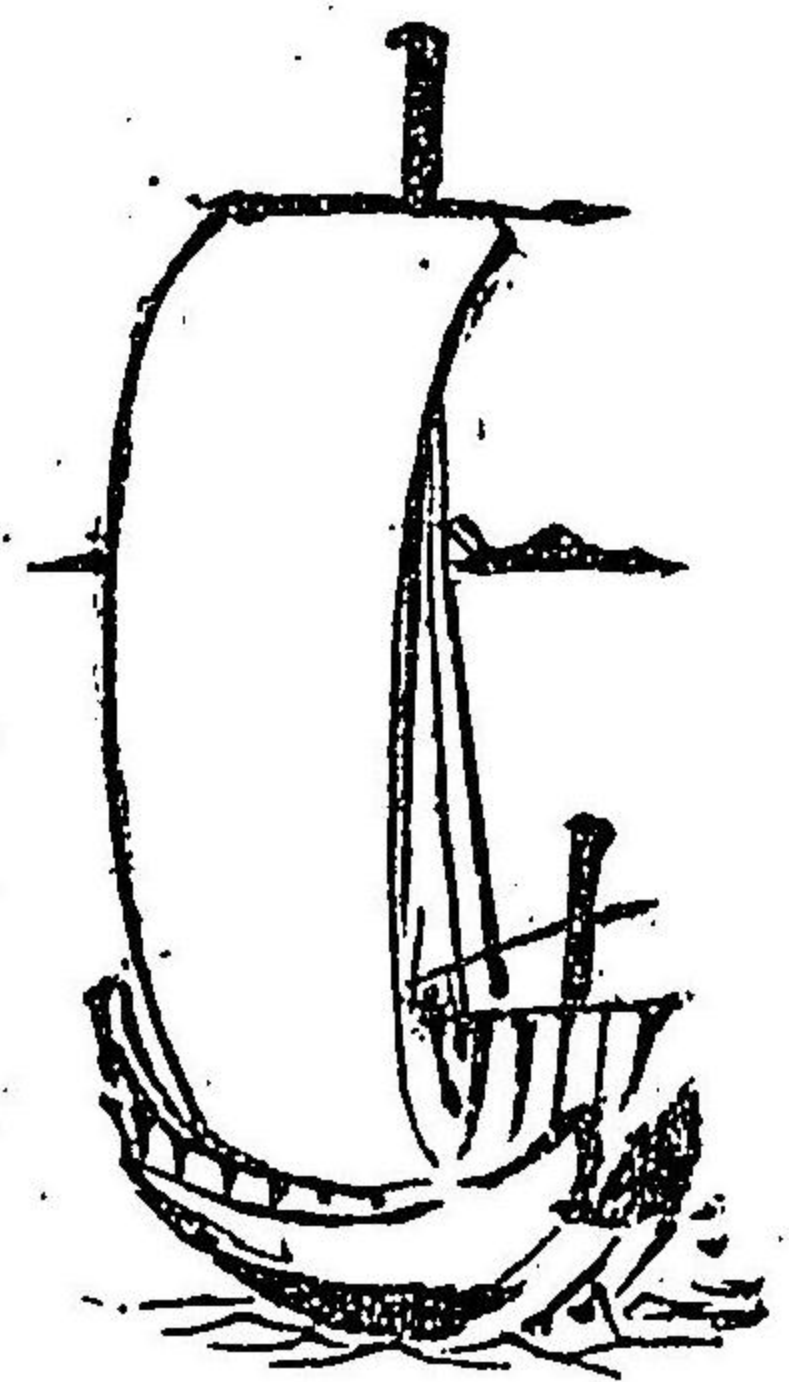
いふに、花の井と名づたける水あり。

いにしへの影こそみえね花の井のみづのこゝろの今もすみけり 凝 式
畔道を十歩ばかり行けば、ちひさならぬ石文ありて、かの秋風ぞよく白川の關などの秀吟、
二つ三つありつけたり。

まらかはの關までかけて大かたのあき此あはれいこゝにつくしぬ 長 翁
露わけてあそべの宿をあきとへばやまのおくよりさびしかりけり 景 周
渚の院をはじめ、とはまほしき跡のみ多かれど、おのく都はあきらやあらむ、たゞ急ぎ
にいそがれて、夕つかた、鴨の川づらのやどりに歸りつさぬ。

弘化の四とせ長づきのはじめ

景周 志るす



須磨日記終

古今集正義總論補註

熊谷直好

去年の春の頃より、人々の乞によりて師の正義の註をもて、此集の序より始めて、讀試み侍るに付て、其説のいぶかしき所々書出して、師にも窺ひ見ばやとするあひだに、ことし思ひかけず、世を去り給へりしに、今更いかにとも、せんすべなきわざ也かし。さて其後の人々もいよ、此註をよみふけるにや、此頃總論の意の、手に取がさきよし聞ゆるに、さらばとて、此論をいひ解き侍るに、猶聞まがふ方も侍れば、今すおし意得ずすからんやうに書き加へてよと、乞ふ人も多ければ止む事を得ず、愚按をかい付々侍る也。

歌辭竊に考るに、大同弘仁の大御世より、詩學やうく盛んにして、寛平延喜のおほん時に及びてぞ、殊に甚しく侍りけん。朝どなく、野どなく、詩おそわれと尙びて、大和歌の言痛からぬをば、めしき戯れと卑しめて、正實ならんあたりにては、是を咏ふも面を伏るに至れり。歌の衰へたる事も、是より甚しき非ざりけらし。紀氏この衰弊を憂ひ給ひて、もとより詩歌の、其音清濁とわかれ、其義幽顯のたがひある事を、ひそかに辨じ、

又いにしへ今の、大和歌をつどへて、それが中より、勝れたるを撰びて、千首廿卷となし、古今和歌集と號けて、奉り給ひしより、大和歌の道再び古に復りて、今に迷べり。此集をみんなの、先撰者の心まらひを知るべく、唐歌大和歌の、同じからざる差めを知らるべく、大御國の異邦の風俗と、いたく違へる事を知るべき也。

是の總論の序の如く、書起されたる旨なり。初に大同弘仁の頃より、詩學盛んなる由にいへるの、わたる所有ていへることならめど、大同の平城帝の年號なれば、かの浮説おがら、歌の意をまろしめしたりとし、人丸赤人も同時に在て、萬葉集を撰びて、奉りしとせれば、紀氏の心の、専ら歌の盛なりとせられたる世也。朝廷の宴、大學の進士及第なども、詩もてせられされば、實の師のいへる如く、詩學盛なりし頃めて、歌のやゝ衰へたる時なるべし。○紀氏此衰弊を愛ひ給ひて、もとより詩歌の、其音清濁とわかれ、其義幽顯のたがひ有る事を、ひそかに辨じ、云々、序中詩歌を對へて、清濁幽顯の違有ることを、ひそかにも辨じらまたる所、見えずといへども、此序全文微語と見られたるに、詩歌の異なる事を、慥に見出られたると、符合してよくかなへるに似たれば、紀氏にも其意あるべき理を、押及ぼして、ひそかに辨じといへるもの也。紀氏の心に次々いはれたる如き、詩歌の差め有るべきにあらず。されども詩序の、正得失動天地、感鬼神、

是近於詩、先王以是、經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗、といふを摘ていはれたる等に、天地鬼神の感應を、専らわけて、男女の中をやはらげ、武夫の心をなぐさむるなども、猶其感應の徳にいひて、餘の數條の、取られざるにて見れば、紀氏も詩歌の異なる所の知られざるにあらねば、ひそかに辨じといひ、書かれたるものなるべし。成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗、等の事の、皆詩の徳にて、大和歌にいなき事也。本文にも、云れたる如く、唐土の、聲の爽ならぬ方より、應接不自由也。今長崎に來る華人なども、只かりそめのこと、いひ合せてたる事なれど、六ヶ敷論談に至りては、思ふ事の言演るに、人はを聞取る事かた、或は手まねを加へ、或は文字に書きても知らせなごまるとぞ。此故に、賤き者までも、文字を會する人多し。是皆聲の爽ならぬより、起れる事也。さるを大清の、文國なりといへば、吾邦人も、雷同して譽むるの、跋たる者のよく坐行るを見て譽るが如し。本邦の其聲、單直清朗にして、思ふ限言演る事、いとやすく、人も聞惑ふ筋なく、最便利なれば、今大に漢學行るといへども、虚字助字等の用法、四聲反切の曲折たる事、容易に會得ならず、無點の文の、讀下す者だにいと少し。是全く言靈の幸はふ國の所謂也。さて上にいふ如く、唐の言語自由ならざる方より、物ごと形を畫きて、文字となす。文字にうつす時の、聲は調を離れて、眼を以て是を見

る。眼を以て見るに及びて、義理の外取所なし。さる方より詩と成出るものも、思意より出て、專義理に渉る。依て擇ぶといひ采るといひ、施して政治お効あり。故に詩序にいへるは、天地鬼神を感ぜしむる方、一し並の事なり。大和歌の、偏に其徳勝れて、餘の詩の徳なし。男女の中を和らげ、武夫の心を慰さむるも、經夫婦といへるとい、効驗異なり。彼の詩を以て效ふる事、此方の、歌を聞て感じて、自然に和らぐ也。天地鬼神と、同じ極なるを知るべし。されど、紀氏の心に、かくまで思ひ分けられたりといへ見えず。只吾歌の方に、效驗いちじるきを取りて、いへるなるべし。○歌の衰へたる事も、是より甚しき非ざりけらし、云々。大和歌の道、再び古に復りて、今に逃べり、云々。歌の衰へたりといふ事、論なきことにて、紀氏もまか歎かれたるに、うたがひなければ、遠き神代の暫くおく。日本紀古事記より、万葉集にうつり、又後撰拾遺より、今の世に至るまで、見渡したらん中に、古今の獨秀たる事、誰も知る所なり。その紀氏の撰によらことも、又論なければ、すべてかの衰へたる事、是より甚しきなしと、いへる間の世の歌の、最勝れたる事なり。万葉の末、奈良の朝の歌など、何の見所かあらん。さて後、古今撰進の功によりて、再び古に復りたりと、いへる世より、漸々に歌衰へて、今の世の拙きに至る。何れを盛なりとし、何れを衰へたりとせん。是歌の、本邦水土自

然の妙音にして、少しも思慮に渉るべき物ならねば、捨てて土の如くなる時の、益々妙也。少しも取擧が玩ぶ時の、忽ち作意にわたる。いどかしてけれど、安閑天皇太子の時、春日皇女と贈答の如き、悉く八千矛神詠をかまめ給へり。前巻の史文の、頼むべからずといへども、七年九月勾大兄皇子、親聘春日皇女、於是月夜清談、不覺天曉、斐然之藻、忽形於言、乃口唱曰、など有て、兼て歌名のとらさるるを知るべし。皇女の何もさる方の聞にもおはさぬが、却て句々奇妙にして、一箇の御力と見ゆるをや。萬葉にて、人丸の如き、山柿歌仙などいはれし人の、同集の中にも、古歌の詞、或は作意を移し取られし事のみ、多く見ゆるもの也。されば、歌の衰へたるばかり、盛なるはなく、盛なるばかり、衰へるはなしといふべし。衰へたりとて、絶ゆるものにもあらず。百萬歳を、經行ん中に、世の姿も大に變じ、如此き三十一言の詠など、止む時もあらず。長となり、短と成りて、盛衰を叫ぶの聲あらん限の、吾國の言靈の幸有て、歌とあらざる事なけん。一大界の内にも、歌詩お類するものなき邦も多からん。なきのもとよりなき也。天つ日の影めぐらん限、此水土の、是を生るの地なり。今の世人の歌といへば、三十一字の歌のみ思へり。連歌俳諧のいふも更也、狂歌狂句、街歌童謡の如き、悉く言靈の幸およるもの、吾大和歌也。此事猶次の條にいふべし。

古語にいばく、歌の詠む事の難きにわらず、よく詠む事のうさき也と、おのれ按ずるに、よく詠む事の難きに非ず、知る事の難きなり。是を知る時の、よく詠む事も難からじ、云々。

後思ふ事あり

こゝに古語といへる、誰人の語ともえらさず。もとよりわたらぬ事の論なけれど、師のいへる、大和歌の心を知るといふ事も、いと難きわざなり。紀氏も、かの大御世や、歌の心をえろしめしけんといへる、その事なるべし。知る事難しといふの、歌の歌たる本源をさはめ盡す時の、すべて何もえらぬ己前の人にならざれば、眞の無思慮無分別の歌の出ぬ事也。抑歌の、道にわらず。藝にわらず。所作わらず。師より受て習ひもて、達するものにあらず。一感一歎、悉く新にして、其前をふみ、其後に推すべきものならねば、よく詠みあしく詠むといふ界のなきこと也。他より聞たる上にあらず、淺深哀樂の、差めのある事なれ。畢竟千年ばかり、歌を藝のやうに、思ひあやまりて、紀記萬葉の、古歌といへども、折々其弊の見ゆるを、六七百年來、歌の師弟のささへ出來て、今の世まで益々甚しく、専ら修行に渉る事となれり。絶て有まじきわざ也。心を以てさはめ知る事の難し。かたちを以てあらたむる事のやすし。はやく師弟修行の所作を止めて、歌といふ事を忘れ果たらんに、即日より、古人の如き歌の出くる事也。いかにすれど

も、人心にまみこみたるくせなれば、離れがたし。試に其證をいはん。何の道も、師に受てて學ぶ時の、習ふに隨ひ上達して、三年五年を経れば、ゆるされて、獨立するおと常也。歌の道修行の、師もいつを限り、傳へ終るといふ事もなく、門人となる人も、年を重ね詠出して、句々引直され、生を終る迄、成就する事なし。是教ゆまじき事を教へ、學ぶまじきことを學べり也。聲の息の音也。道に非ず。藝にあらず。感の萬物彼より來て、感せしむ。師にあづかり、習ひに可たるものに非ず。歌の一首毎に、新に一首也。前歌後歌を助けず、後詠前吟をさまたげせと知るべし。只歌の師なく、弟子なく、たましく心に任せて、いひ出たりとて、文字に寫す事なく、萬事歌の所作なしと心得べし。傍の人聞て、其感忘れがたく、不得止傳はらんえらさず。いはゆる人情を察し、事變を識るが如きは、是が末也。

いはゆる云々といひ、唐聖人の教に、詩を説かれたるに付て、歌を識るといふも、其同じ事に、思はんをおそれて、夫にわらず。さる事の、いと末の事也といへる也。詩可以興可以觀、可以群、可以怨、述之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名、また、誦詩三百、授之以政、不達使於四方、不能專對、雖多亦、奚以爲、また、人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也、與是みな思無邪まで、善き物をえらびて、采て施として、人情を察し、

事變を知る徳あり、今大和歌の心を知るといふの、其事にのわらずといへる也。歌に既に詩にいへる如き徳なき事也。眞に歌を知る人會得すべし。夫やがて詩歌大に異なる所なり。

まかも濁れる中にありては、善と能見し西土の芳野の花の、美善を盡せるに似たるも、百千鳥侏離のこちたさを免かれざれば、彼いはゆる樂びて淫せず、哀ひて傷らざらん、性情此正を得ん事の、ほとく希なるべし。

孔子昭武をほめて、善美をのたまひ、又關雎をのたまへるをいふ。詩の上にいふ如く、専ら義理に涉り、思意より出たるものなれば、聖人の撰を得て、正しきもの也。その聖人といふも、人にして、彼水土の靈による時の、よく見、よく撰ぶといへども、猶真正の所にいたりたさをいふ。黄なる泉に染紙云々、いさゝ佛の書に及びて、天竺其余萬國にわされども、梵字又和蘭等の文字にて、聲を去るを所の、本邦の如く、單直清朗にこそあらずとも、西土の如き、音のあやなきものにはあらずるべし。
獨我安積香の山の井、清濁る影し見えねば、難波津の何をかかわけて、善や悪やをとばん、云々。
性情同じく心の働をいへども、分ていふ時の、物に應じて、感ずる所のもの、性也。

故に一也。天地鬼神も、貫通する所のものにて、少も私なきもの也。大和歌の直小感の聲なれば、清濁善惡のささなし。清の形体に付て起るものにて、義理に涉る、性の善なる所より、制せられて、正しきものあり。又人欲にひかれて、悪きもの有り。思慮に涉る所のもの、擇びて後、正しき也。さて性情かくの如にして、その彼より來るもの、皆情の働なり。受て感ざる所のもの、悉く性なり。故に歌と成出る姿の、情のみ。其感の性のみ。故に善惡をいはず、清濁をいはず、此情欲を直に神明に通ず、大和歌の徳なり。

○古昔を考るに、凡唐歌の、其志を言ふもの也。さるの専ら思意より出て、其義理のつから正しきもの有んに、是を政治に施として、其益少からず。其用廣きものなりけらし。伶官これ採擇び采て、更に其聲を永くし、其節を諧へ其律に協へ、つひに其調成てのち、樂と倡へ、頌とわかちて、朝廷に奏し、郊廟に薦むべし。こゝに至て、始て我大和歌の、咏ふすなわち神人を感じしむる妙用に、粗並ぶべきことあるに似たり。

思意より出で、義理に涉るもの、神人の感應なしといふの、大和歌に對へていふ時の事なり。詩ならでも、天地鬼神に訴る事あらんに、義を盡し理をさしめて、願文など作る、忽感應もある事なり。詩といへども、さる感應の有べき事、論をまたず。その詩文

のみに限らず、何の上も然り。ふゝ其事に非せ。大和歌の、咏ふ即其聲直に、天地神明に貫通するの、天地の間、只歌のみふ有る妙用をいひて、西土の詩も樂になりて後、其聲調の方より、感ずる味ひ、大和歌に似たりといへる也。末章に到りて、此謠ふや僅に理に涉れば、忽ち天地の感を塞ぐべし。かなさの歌の、其もと彼理より出て、理なきに調べなせるものなれば、なほ其調の上に、自然に本の理りを、含みてはなれざるものあらん。さるの大御國の、もと清濁なくして、擇びなきも此と、同日の論に非ずといへるにて心得べし。聲を永くし、節奏するに到りて、まばらしく其義理の忘れて、耳に聞て、音聲の妙のみに成る。此時大和歌の感に類するをいふ。されども實の別の事なり。又然らば、うたの譜節して謠ふものに非ざるにや、といふ問に答へて、街談俚談の類ひすら、猶歌ふめり。況や歌ならんを、うたのざらんや。いはゆる神樂、催馬樂、今様のごとき、歌にあらすして何ぞ、只歌の出る自然の妙用あるをかたるのみ。是歌と稱ふるの名義也。譬へば美人の粧粉を假らずして、おのづから艶なるが如し。まして粧粉をほどきさん、麗はしとらるはしからん物から、又天然の風姿、神彩中々汚らん。其嫌ひなきもあらざめる、云々といへり。大和歌も樂となして用る時の、唐の詩と同じく、歌の歌たる所り失はれて、音聲の事になれり。そぐ中に神樂催馬樂の如き、古

譜によるといへども、今用ひらるゝ所の、いたく詞此あや聞えぬ迄、延べて曲折をなせるもの也。太古必ずしもかゝらんや。今様以下今の童謠の類、粗詞も聞え、聲の妙も聞ゆる物をもて、かの西土の樂も、思ひやるべし。されど大和歌の妙用の、始めて口より出る聲、すなはち其用にて、再び吟じ傳へて、聞くべきものにあらず。

政教に補ひなく、日用に疎きを見て、大和歌の唯一時、心をやる翫びと、おとしめて云々。既にいふ如く、經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗、またいはゆる邇之事父母、遠之事君、達使於四方、不能專對、等の徳、大和歌になき事也。歌を知る人にして去るべし。

渾濁不正の音を、尊とびまたへる余りに、其方の博士茂さへに置れたり。さればたましく詠吟するも、彼にのみ倣ひて、屈したる理を乃ばへつゝ、更に歌としもあらざめるを、云々。

漢音博士吳音博士を置いて、漢吳の音を學ばせられたる事の、古へ漢學渡りての、漢文を今のやうに、和訓に合せ返り點をつけて、讀下を事なかりしかば、悉く字音に讀下し、義をも知る事也。夫故に、彼方の音をば、ならせられざる也。日本國の人の聲を、皆かへんといひあらざ。されども、單直の音をもて、彼土此合音の、今と同じく、習ひ學

びがたかりけんゝまらる。屈したる理を、のぼへつゝ云々。さる世の博士、或の學生などの歌、日本紀竟宴の集などの、歌を見ても知るべし。

○或書に、皇國の萬邦に、優れたりといへども云々、尊卑をかれて、長く定まり、男女和ぎて、竟に亂れど。大凡神に奉事り、人に交らふ舉動此、清まり慎めるの、いふも更也。或の其八十系、亂るゝ事なく、絶る時なく、正しく傳へて、萬古一日の如し。禮の大なるや、更に加ふべき物ある事なけん。

序補註にも云如く、彼土の尊卑の、賢愚にあり。皇國の尊卑の、入にあり。彼土の聰明作元后などいひて、賢者天子となる。萬民といへども、程々に賢なる人、頭となりて、勢ひを得れば尊と稱す。皇國の、天子の天孫永く定まりまひ、臣下といへども、夫々系統を正しく傳へて、胤を交へず。古へ少しもまざらぬしき疑ひあまば、探湯など云ふ事をもせしめて、神に誓ふ。此故に、天神地神、或の蕃國の人まで、其末正しく傳はりて、實に尊卑いちじるしきもの也。然るお今の世も、上さまにの、正しく傳はり給へども、養子といふ俗始まりて、他姓の人の子便りに任せ、其家を續しめ、先祖の祭をなす事となれる、其家々相續するの、よきやうなれども、いと歎かぬしき事なるべし。令の中などに、養子といふ事あるの、別の事なり。抑其子孫正しく傳はる上にこそ、其姓の

盛衰もあり。又其先其祭をも享べきなれ。いつくの誰ともなき人を、俄に子なりとし、父なりと云ひ、甚しき死たる後よりも、養子といひて、其祭をなし、喪をつとむ、何事ぞや。女子の兩夫に見るをいとふも、胤の亂れん事をおそるれば也。されば男子の嫡妻の外に、妾などもある事也。すべて男子を生む事を喜ぶも、外の故にあらず。男子だに生るれば、益々其姓の繁榮すれば也。今のやうに、他を子とする事なれば、必男子を生る事を、喜ばずともありなむ。又他お子をゆづる時の、却て其本姓の絶る事も有ぬべし。されども今に天子の、神孫にましまし、高位に連り給ふ限の、大方正しくおはすること、いとよく尊き事なりかし。是を尊卑長く別せ、八十系亂るゝ事なくといへり。男女和ぎて竟に亂れず、皇國の風俗、色々其まゐるしあるが中にも、古への専ら婿住といふ事あり。壯き男いまだ妻迎へぬほど、他の家の女子に約して通ひ、女の家に住宿して、契りかはさ事あり。夫の今の俗弊に、たましく他妻を奸淫する類にあらで、彼方此方兩親もゆるし媒して、いひ入れなごもしけん。又親にも知らさず、ひそかに通ふもありけらし。そも其ならばせの姿なれば、さのみ奸賊の類にいかもへらず、良人の馬車にても通ふさま也。或の一人の男、彼此の女に通ふもあり。又女もひそかに、他の男にあふもあきて、今より見れば、亂りがはしきやうなれど、竟に亂れず。さて後、子なども産むに

いたりて、夫婦一家をもなしけん。是何の故ぞといふに、其姓の宗家に、男子五人を生ずる時の、嫡男の其家流續ぎ、二三四五の、庶流、四家となりて、分家別宅まる也。四人に悉く嫁を迎へ置る事なれば、おのづから一家の内にてり、ものしがたく、婿住といふならはせ出来にけん。服忌令などに、同居伯叔の喪などあるを見れば、或の自の心に任せて、宗家に寓宿し居るもありけらし。此類男女和らぎて、亂れざるの國風ともいふべし。因に云、既にいふ如く、婿住の俗故に、男女共に戀慕の情厚く、男の久しく通ひこぬ時あれば、異女に通ふらん、或の心のかかり果けんなど思ひ、男も、なき間に、異心もや有らんなど、さまざまの思ひ多ければ、千歳の古へ、専ら戀情の歌のみ多し。女の家にて、婿のかしづきものする事にて、玉はやす武庫など、枕詞にもいひし也。今のやうに見せ知らぬ女子をも、俄に家に迎へ取り、其日より向ひ居たらんに、何れ戀情かあるべき。今の世、戀の歌の、題咏のみと心得べし。

又大和歌の、彼水土に隨ふ、秀靈の性情より出る、自然の音調にして、さるの開闢の始めより、千早振神もよんたび、遠く人の世に廣びりて、遂に我磯城島の道とたへて、上下おもく諷ひ、神人とおしなへに樂むの聲耳に滿てり。樂の盛んなるや、是より上なるものあらじかし、云々。

樂記に、凡音之起、由人心生也。人心之動、物使之然也。感於物而動、故形於聲、聲相應故生變、變成方謂之音、比音而樂之、及于戚羽施、謂之樂。つねに音も聲も、同じやうにいひなれて、さのみけぢめなけれど、此文にいへる聲といふは、只オトにて、何のわやもなきものをさす。音といへるは、其聲事物に應じて、夫々のかはりめ有て、聞ゆる調といはんが如し。既に義理備はりたる音を、比べて詩に作り、又詩を詠歌し、節奏して、樂となす事也。されば唐の樂といふもの、其もとの詩の、上にいへる如く、思意より出て、義理有るのなるを、樂と成てり、まばら義理を忘れて、其音律の上より、人を感じしめ、和を導く効あるなるべし。大和歌の、もとより義理なく善悪なく、采撰に涉らず、其まゝ其用をなすものなれば、樂の盛んなる、是より上なる物あらじといへり。又樂記に、知聲而不知音者、禽獸是也。知音而不知樂者、衆庶是也。といへる、義理なき聲のみあるは、禽獸也。人の其物に應じ變じて、いろくの義理ある詞を、いひ分くる也。まかれども、衆庶の詩と作り、樂となすことをえずと也。大和歌の其禽獸と同じく、聲といふ所よりして歌なり。唐より禽獸といへば、卑しく聞ゆれども、その渾濁の音より、不得止義理に涉らざる事あたはざる土風を、地にしていへる也。本邦の、單直清明の聲、義理をまたずして、言靈の妙用有る方より、禽獸の物に感ずる聲の、出る

所と少しもかゝる事なし。花に鳴く鶯水に住む蛙、云々といへる如し。唐の詩の、打任せてさひひがたき所あるをや。さて唐の禽獸といへども、哀樂の去らべのまがふ方なし。師説に、四海に亘たりて、異類をすぶるも此也と、いへるが如し。鳥之將死、其鳴也哀、と云て、唐人が耳もたしかに聞ゆれども、思意より出て、義理に渉る事なければ、詩也といはず、思ふべし。又上にも下にも、言靈之所佐國、言舉不爲國、などいふこと出たるを、近世古學者など、あしく説きたる解も見ゆれば、あゝにいふべし。萬葉十三の歌に有て、蘆原之水穂國、蜻鳥倭之國などいふ如き、國號にのわらで、國の徳をいへる古言也。さるのいと古く稱へ來ぬる事にて、世に知れる事なれば、歌にもよめる也。歌を味ひて知るべし。近來の註解に、言舉せぬを、願ひ事せぬと、解けるは非也。又言靈等をも、其言に、神の御靈おはして、幸をなし給ふといふ、共に非なり。神在

隨事舉不爲とい、日本の國風、神代より淳朴にして、唐土などのやうに、言痛く物事をいひ立る事なきをいふ。それやがて、水土自然の事にて、唐の音韻さわやかならぬ方より、萬事義理にのみわたれば、言舉せずしてのゐるべからず。御國の清潔なるより、言の單直清明にして、自然に靈なれば、義理にわたる間をまたず、言痛からぬならはせ也。物其實ある時の、其名なく、其實失なれゆく時、其名出來る理り也。即大道すたれて、仁義おこるなど、彼方にもいへる也。仁義禮樂、其實みざるによりて、是を教ふるに、玄

ばらく限量をまうけて、名つけ教へざれば、人またがひがたし。唐國の訓のみまもらひて、眼のうごかぬ人の、御國の神代の事を聞ても、あかぬ事に思ふゆり。たどへば火を出見尊、玉依姬にあひ給へる事の如き、かの唐の禮にあて、いふゆり。男女の交る事、天地の間の生類、親子兄弟いむ事なし。只人のみ倫ありて、互にものする事ゆゑに、其情も又少しくかはりて、我夫と尊み、己妻とあはれむやうの、自然の心あり。是を禽獸の如くする時の、亂れてをさまらず。御國の水土自然に清潔なるより、教へずして別あり。唐土の濁濁なるより、やゝもすれは亂りやすし。不得止禮をさて、教ゆ。堪して限る時の、必其境を少しく遠くせざれば亂る也。親子犯さず、他の妻を犯さずといふべきを、兄弟姉妹にも及ばすもの也。名教すべて如此なるべし。又神在隨の吾國に行ふ時の、所謂周公孔子の道も、皆異端の法也。其合ふ所の用ひ、其異なる所の捨ざれば、大なるあやまちあるべし。第一の貴賤といふものも、唐の賢愚のさた也。天子の民の父母などいひて、民をはこくみ天下をよく治むる才あれば、匹夫もなるべし。孔子も^世とより其教也。顔淵の如き、今匹夫の一書生といへども、其才あるをみて、もし國を治むるに至りなば、いかゞと問ふに、總て天子となるの意得を示し給ふにて知るべし。吾神孫の如きの賢愚によらず、貴賤人に有り。假にも臣たる系の人、天位をうかゞ思ひはかりの、かけ

てもする事なく、たま〜おほけなき心つく置われ、天下舉て是をうち、朝敵と稱して子孫をたつ。臣たるものも、又志かり。皇別、天別、神別ありて、其末を亂させ。是を貴賤永く定まるといへり。されば周孔の教も、吾國俗の全くは不合、異端なるもの也。佛者などの如く、甚しく人倫をそむくものならねば、邪説暴行といふべからぬものから、試に顔淵に教るが如き、言をなして見よ。忽ち天下の罪人なり。推て知るべきのみ。又因に云、歌に神代より始て、枕詞と稱する物多く見え、又序歌といふ跡は數多出くる事、言靈の幸はふ國のゆゑ也、とあるべし。西土などの如き、溷濁の聲音にて、必義理に涉るが故に、其詞を置く時の、必其義あり。本邦の聲音清潔なるより、其義理をまたず。先調を聞て、夫故に嘆聲の永きもの、異言となりて、調を助く。故に枕詞の、其調其詞の調ならずして、此調をなすもの也。序歌も凡似たる筋なり。俗にコレハ〜云々、サテ〜云々などいはん聲のわやに形をなすもの也。近くいは、物に行く道にて、ゆくりなく知れる人に、出會ひたらんに、何所に行くぞといふ。答へて只此あたりは物する也といふが如き、彼方より何所に趣くぞと問ひ、其至る所つまびらかに云べき事なり。只此邊に何となくなど答へて、親しき人にも行く所をつゝみ隠すにやあらん疑ふかこるべく、たらのぬ答へならずや。然るを彼方此方とも、何とも思へらず。是行

く方を問ふに意なく、答ふるふ意なし。只ゆくりなく出會ひたちまち云べき義もなければ、何に物するぞといふ詞を假て、心を通ずる也。答ふるも又志かり。却て行く所行く趣、悉く答ふる時の、思の外にて、又云べき言なきに至る。惣て本邦の言語の、かくのごとし。是言靈の幸あり。

○或人問、詩の其もと志を言ふもの也といへども、又性情より出づともいはざらんや。其性情より出らんもの、謠ふたいちには、神人を感動すべき事、又何ぞ大和歌に異ならむ。歌も慮りにわたるもの有て、さるの忽ち感を失ふに至ると、其理り同機ならずやといへり。己れ曰く、其理然るに似て然らず。咏ひ擧るまはちに、神人を感ぜしむる事、獨りが大和歌の自然の妙用にして、外國人の、溷濁不正の音調に、あるべきならず。其溷濁なるもの、撰びて後に是を咏歌し、是を節奏して、始めて神人感るるに至るべきもの也、云々。

唐詩、大和歌の異なる事、もとより古人未發の論にて、會得の人の、何の疑ひもなき事なれども、凡人の疑念ありて、會しがたき事なれば、或人の問をまうけて、猶其事をたしかにいはれたる成べし。既にもいふ如く、外國の音聲の爽ならぬ方より、耳ばかりにてい會得まがたく、字に寫し、眼をもて見て心得る故に、耳に聞く調うとく、眼力をか

る時の、義理に渉る外なし。故に詩と成出るものも、思意より出るの外なし。我大和言の言靈の幸あるが如き、無思慮より出て、妙用をなすたぐひならず。たとへば人の産の如き、詩の胎内にして脱膜して生る子なり。大和歌の被膜ソツボクにして生る子也。同じく子産るといへども、頭面手足胎内より形をなして出るものと、被膜のまゝ出るものとの差あり。被膜なるものも、頭面手足中に備はれどいへども、まばらに見る所なきが如し。唐詩大和歌同じく、人心の感ぜる所より出づといへども、其出る姿において差あり。此故に、詩の更に撰び、節奏して後樂と成る。大和歌の咏ふたいちに、樂の妙用をみられり。既に上の條に樂の盛んなる是より上なるも此なしといへり。詩のいかなる詩といへども、其まゝ樂の妙用ある事なし。又樂と成て後、大和歌の咏ひ舉るすなはち、神人感ずる徳に並ぶといへども、趣の似たるいさるものから、全同事にあらず。撰ぶも節奏するも、人の思慮に涉れば也。天地の間大和歌の徳の、大和歌に有て、並ぶものなきを知るべき也。○次々乃問答、上にいふが如く、打返して其義を明せるものにて、聞まごふ筋なれば、さし置侍りぬ。末章に到り、往昔野山大師在唐の日、越州の節度使に與へ給へる書に、伏願、我日本國也、曠和初御之天、夸父不步之地也、途徑乎、仲尼將浮、所不能之海也、山谷則、秦王欲往、所不至之嶽也、云々。義和の堯乃命義和、欽若具天、云々、分命義仲、

云々、羲和の口を掌るを云。夸父追日影、不及、道渴而死、博物志、淮南子等に出たり。仲尼將浮云々、秦王欲往云々、論語公冶長子罕の篇、史記始皇本紀等にて見るべく、猶性靈集につきて、全文を見るべし。入道時名朝臣の、西洞院風月と申し侍りし、師若きはど、親しくまゐられたれば、此御詞を聞置うれしなるべし。



古今正義總論補註終

古今集正義總論補註論 同辨

八田知紀論
熊谷直好辨

○直好云。上略遠き神代の姑くおく。日本紀古事記より、萬葉に移り、又後撰集より、今の世に至るまで、見わたしたらん中に、古今集の獨秀たる事、誰も知る所なり云々。又萬葉の末、奈良の朝の歌など、何の見所かわらん云々。

◎知紀論云、とはき神代の歌の、傳はれるもの、古事記日本紀の外に、なき事なるを、遠き神代の姑くおく。日本紀古事記より、萬葉にうつり云々、といいかいなる書ささま也。その古事記日本紀の中にて、神代の歌の姑くおく、といふ意ならぬとさし聞かず。右の二書の外に、神代の歌の傳はれるものあるが如くみえていかい也。又萬葉の末、ならの朝の歌などに、古歌の詞を用ひ、作意に過たりと、ねばしきもある事なれど、萬葉集中の勝れたる限を撰び出たらんに、古今集の及ぶべきものならんや。もどより同日に語るべきものに、あらざるべし。夫より上つ代の歌ハ彌 經妙なりといふべし さるを古今集のみ、ひとり純粹を得たりと思はれたるいたがへりと云べし。

○直好云、上峰萬葉にても、人丸の如き、山柿歌仙など云われし人の、同集の中にても、古歌の詞、或は作意を、移し取られし事のみ多くみゆるもの也。されば衰へたるばかり、盛なるのなく、盛なるばかり、衰へたるのなしと云べし。

◎知紀云、おの早く、賀茂翁もいはれしやうにて、山柿の歌仙のおとさの、やゝ作意もあがりげなれど、その上古の歌に對へてのさたにおそわれ。古今集の歌などにくらべての、代もやゝふるけれど、いかでさのいふべからん。さて又衰へたるばかり、盛なるのなしといはれたるの、古今集の頃の、紀氏の意にも、歌の衰へたりと見給へる時なれば、其時にあたりて出來れる歌の、かへりてかの山柿の名人の如く、作意がちのものならず、誠實に出るかたなりと、思ひとられての事ならんを、そのさるべき理になづみて、その代のさまと、歌をよよく明らかめての、事どもはええず。さるの古今集の序に、今の世中、色につき、人の心花に成にけるより、あざなる歌、はかなきおとのみ出來ればとあるが如く、其代大かた外國の風に移りて、よろづ用意がましく、うはべの文飾がちのみならんに、よみと詠出る歌、やがてあだなりけんおと論なきを、延喜の聖代といへども文學の弊風既にしり有しこも思ひやるべきもの也が中より、そのあだならぬ限をど、撰び出給へる古今集ならむに、紀氏の意の露私なくとも、どにかくに文華の代の風のがれがたく、作意にちちたるもまじりけんこと、又論なければ、上古の

純粹なるものと、同日に詠るべからぬ事も、思ひ知るべきもの也。なほ此事の、末に云べし。

△直好辨、上件の論、又次の條に論じたる事ども、畢竟歌といふものを、たしかに自得せざる所より起まる事にて、其自得なき限の人の不審の、いひ解きがたし。紀記萬葉の中み、古今より勝れたる歌ありなどの論の、今更いふにも及ばぬ也。只古來よりの歌ををしならして、古今時代花實備はりて、前後に秀でたるをいふ。その師の本文、新學異見などにいはれたるが如し。又次の條に、古今の歌二三首引出て論じたる事ども、思慮にわたる渉らざる事などの、自然の無思慮より出て、たくめるが如く、かざれるお如きものを、自得せぬよりの事なり。百日五十日苦吟熟考して、漸くいひ得たるも自然なるものあり。問ひ髪を入れずして出來たるも、思慮に渉り、作意に落るものあり。此さかひを會得する時の、おの論なき事なり。

○直好云、上略今の世の人の、歌といへば、三十一字の歌とのみ思へり。連歌俳諧のいふも更なり。狂歌、狂句、街歌、童謡の如き、悉言靈の幸による、吾大和歌也云々。歌の歌たる本源を究め盡す時の、すべて何もえらぬ以前の人に成らざれば、眞の無思無分別の歌の、出來ぬ事なり。抑歌の道にあらず。藝にあらず。所作にあらず云々。一感一歎、

悉く新にして、其前をふみ、其後に推まべきものならねば、よく詠みあしく詠むといふ界
のなき事也。他より見聞たる上にあそ、淺深哀樂のけぢめのある事なき云々。はやく師
弟修行の所作をやめて、歌といふ事を、忘れ果たらむに、即日より古人の如き歌の出
來る事なり云々。

◎知紀云、おの歌といふもの此本來を明さんには、さる事にて、その學才ある人の上にし
て、最心得になるべきもの也。但かやうに甚しくおし究めていふ時の、大に難問出來ぬ
べきもの也。さるおのれまづ、試に論ぜんに、かの色につき、人の心花に成にけるより、
あだなる歌、はかなきことのみ出來れば、云々とのさまひしによれば、歌いたゞ自然にま
かするのみかりとし給へるにあらず。もし自然にまかせんには、かの文華の世には、あだ
なる歌、はかなきことのみ出來む、おのづからのおとなれば、更にもとさといふべきにあら
ず。然るを歌とのみ思ひて、それさま知らぬなるべしなど、おとしめ給へるを見れば、紀
氏の意にも、さのみひたぶるに自然をたのみ給へるにあらざ。猶此こと末に云べし。

○直好云、上略樂記に知聲而不知音者、禽獸是也、知音而不知樂者、衆庶是也、といへる、義
理なき聲のみあるの禽獸也。人の其物に應じ變じて、いろ／＼の義理ある詞を云々くる
也。まかれども衆庶の、詩を作り、樂をなす事を得ずとなり。大和歌はその禽獸と同じく、

聲といふ所よりして歌也云々。本邦の單直清明の聲、義理をまたずして、言靈の妙用あ
る方より禽獸の物に感ずる聲の出る所と、少しもかはる事なし。花になく鶯、水にすむ
蛙云々といへるが如し云々。

◎知紀云、樂記の文に、知音而不知樂者、衆庶是也、とある意は、衆庶の樂の樂たる妙所味
ひを不知といふことなるべし。詩を作り、樂をなすことを得ずといふ意には、聞とりがた
し。さて又大和歌の、義理をまたず、譜節をからずして、たゞちに聲のひびき、感をなすと
いふ事の、早く師説にて、明らかなるを、禽獸の物に感ずる聲の出る所と、少しもかはる
事なしといはれしは、強ひことなるべし。かの花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、云
々どのたまひしは、人の歌よむは、かれが時に感じてなくが如しといふまでのことにて、ま
かちたくおしきはめて、ものし給へるにあらず。實に人の歌とうたひ出るもの、嬉しど
か悲しどか、詞のべ、さまざまに其心をいひわくるものにて、その三十一字の歌すら、
「年の内に春のまにけり云々」袖ひぢて結びし水など理り出れば、禽獸の物に感じて鳴出
るとい、更に混すべからぬもの也。されどかの「あなによし」あづまはやなどの類ひは、や
ゝさるかたに近しといふべし。さて又歌となりて感をなす所の、其心と詞のまらべと、あ
ひつらぬきて、天賦にそむかぬ上にこそあるべけれ。さるをたゞに、その聲にのみ、妙用

ありて、禽獸の鳴いづる所と、少しもかはる事なしといはれしに、いとまひたることなりけり。

○直好云、上略詩序の正得失動天地、感鬼神、莫近於詩、先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗といふ事を摘ていはれたるに、天地鬼神の感應を専ら擧げて、男女の中を和らげ、武夫の心をなぐさむるなども、なほ其感應の徳にいひて、余の數條を取られざるにて見れば、紀氏も詩歌の異なる所のまられざるにあらねば、ひそかに辨じとて、書られたるものなるべし。成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗等の事、皆詩の徳にて、大和歌にいなき事なり云々。

◎知紀云、この説の師の意にそむけるにあらじ。されど、詩歌共に天地鬼神を感ぜしむなどいふこと、大かたさるべき理りにつきていへるものにて、實のさばかりの効驗とていなき事なるべし。さるの天地人同一体などいふことわりによれば、男女和らぎ武夫なぐさむ、即天地鬼神の感ずる也といひて、害なきやうなれど、神と人とのさかひ、幽顯と隔絶したれば、さのみ打まかせていひがたきもの也。その人事の成るに、すべて天地鬼神の感通によるならんに、詩歌をまたず、何事もまかいふべきも此なれば也。又の詩の數條の徳も、さるべきことわりにつきて、大かたにいへるものなるべし。さるの詩も禮樂

も、治道に妙用ありげに見ゆるに、畢竟聖人の代にして、政治の正しきによる事なり。その政治不正時に、其妙用いかでか施こせ所あらむ。その政治正しき中に有りて、大和歌といへども、時としてその妙用、國事に及ぶ事も又なからんや。これにつけて思ふに菅家遺賦に、凡歌什詠吟之弄者、鬼神交遊之楷梯、云々とあるこそ、いとふだやかに、味ひありて聞ゆま。さるの幽事かみことの上、人智もていかにとも測り知りがたき物ながら、かのまごまごの昔より、今の世の神樂などの上にかけて思ひ渡すに、神の大方幼なきたはれ事などをめで給ふまごにみゆめれば、大和歌のはかなきもてあそびも、時としていかにあはれみ給ふ事もあるべきものにて、まか幼なき事の上、義理にわらま産の眞心に出るもの多ければ、人事の上より見て、道にそむけるすぢもあれど、それかへりて神のめで給ひあはれみ給ふ事もあるべからんを、そもひたぶるに無思無分別などいひて、自然てふものにまかせはつる時の、中々に歌てふもの、本意にそむけなんものぞかし。さるの神代の歌といへども、無曲の直言ならんに、いかで神もあはれを給ふ事あらむ。その心その詞相かなひて、まごどうるはしきにいたらざらん限、人といへども感ざる事あるべからず。その歌のみにあらず、祝詞宣命などいふも此も、詞の調をむねと勤めて物し給ひし也。さるを前の説の如く、今の世あして師弟修行の所作に涉らず、歌といふ事を忘

れ果たらむに、狂句の一首も出来べからず。又見るもの聞くものに付て、心のうごくとも、必歌よまねば、心のなぐさまぬといふものにもあらねば、さる折々に、たゞにやはれどのもうちなげきてもたりぬべきものなれば、千載のかた、歌の歌よみばかりよみて、大方の賢不肖ともに、よむ事なきもの也。是によりて猶考ふるに、開闢此昔より、歌よむいとたましくに有しとみえて、記紀萬葉等に在るしたるも、其名かぞへつべきもの也。されば古人といへども、心のうごく度ごとに、必よまねばなぐさまぬといふ事なかりしとみえたり。まゝさる中に、たましくうたひ出るありても、それとりわき誠實なる方どもおみえず。大かたのさるかたにかしこき人のすさびわざとみゆ。又萬葉の中、國々の風をうたへるなどの、今の街歌童謡の類ひならめど、それはたさるかたに、かしこきものうたひ出さるるべし。その今の世にも、田舎あたりにて、月見花見といやしきものまで、つどひものさる中に、よく拍子きうたひ舞ふ者の、さるあたにかしこきものゝわざにて其口づからうちうたふ歌も、はた利巧なるもの、つくり出したるはやり歌の外なければ、今の世の國風といへども、おのがじし、物に感動して、うたひ出る歌にあらぬをや。されば三十一字の歌よみする事、實にたゞ古を好み、風雅を嗜む人のまさびびに、廣く敷島の道などたへなすべきものにあらず。もとよりこの、かたみによしあしなど競ひ

ものする事なからんに、大かた其道たえなんとするに及ぶべき也。さるを師弟修行の所作をやめて、歌といふ事を忘れたらんには、即日より古人の如き歌の出来る事なりなど云はれしに、更に實地をふみての論にあらず。ひたぶるに誠實を宗とせん心より、さる方にかたよりせまりて、いひ過されしにこそあめれ。

弘化二年己九月

△直好辨、上件論せられし事ども束ねて此處に辨ず。樂記の文、知音而不知樂者衆庶是也とある意、衆庶の樂の樂する妙所味ひを知らず、といふことあるべし、詩を作り、樂をなすことを得ずといふ意の聞とりがたしといへるいふ。さらば上の文も、禽獸の音の音たる妙處味ひを知らずといふ事にや。さる理あらんや。此四つの知字の、知覺の意にあらず。只聲をなす事を得られども、音をなすことを得ずといふやどの事也。己の委しからねど、漢字の上の、上聲去聲の別もありて、知覺の意にあらずとぞ承る。さて末章の論の初に、此説の師の意にそむけるふにあらずと云て終りに、いひ過されしにこそあめれといへる、いかい。己發端にいひしが如く、總論の意の手取がふきによりて、心得やすからんやうに書加へてよと乞ふ人の有しによりて、記せし也。師も心ふのさるを思ひ給へまど、人の耳に恐り、世をはかりて、文

華をもてかきかすめ、かの本集の序の意おも、竊かにならひ給へりやとおぼしく、物し給ひぬれば、この程の大論を、どかういふ人もさく／＼聞えぬに似たり。それを心得やすからむやうにいひ解く時の、果してけやけき方にのみ聞ゆる也。過るるものならず。いふ處までいはねば、人心得ぬ也。其上是をもて、諸藝と同じく、専門の業のやうに思へらん輩の心あり、おちぬぬ處おそ多からめ。名利人我の相をよく離れ果て、師の説をよみ解くべきおとにこそ。總論お云、始有るもの終あり。歌の其始もなく終もなしと云へり。聖人の道、佛の道をはじめ、百家の藝術に至るまで、皆其始有る物の、人は是を護持して、傳へざれば、必絶るに至る。歌の天地開け始りける時より出來て、其始なければ、人これを廢んと欲すれども、する事なし。師の、歌仙集を解られたる中に、源順ぬしを論じて、此主の、梨壺五人の最第一おて、唐學びもいどうまくせし人おて、世おもゆるされて、さる方さまのみたづさひり、まづからも時に逢はぬを猶いさどほり、ほこりかへのまりて過られざる人也。されど歌此道の、古今の撰者たちどくらぶれば、日を並べてい、わけつらひがたくなん。聊か齡のふくれたまど、貫之ぬしと世を共おせし人の、なぞやとまで怪しみ思ひさる也。道の盛衰も、漸くいさぬもの也とぞ覺ゆる。此道の心も姿も、此天曆の頃にいたりてぞ卑しき物お

の成おける。其罪、此主さちにかゝまりといふべし。古人の歌を、後撰集に引直して物せらまざる、皆古人の意を悟りえぬより、私のまゝにひおめられざる之けり。猶思ふ事もあれど畏これればいはず云々。又能宣集の中に、今の歌合といふ事、大禮の如くなりて、只雲上のまざかりけらし。かくおもさしく成行くの、歌の徳の輕らかに成行くなり云々。是らの意をよく引合せて會得すべし。歌の少しも思慮に涉るべからぬものあれば、一等崇むる時の、二等翫ぶ時の、二等失れる。紀氏古今を撰ぶ功ありといへども、今の世、歌の事あらぬさまに成果さるの、こゝにささせりと、師竊かにいはれざる事也。和歌の群徳之祖、百福之宗、理世撫民之鴻基と云て、終お地に落さる之けり。譬へば諸の道藝の、他より移し植さる草木の如し。人よくつちかひ、くさざらざれば、種草をたつに至る。歌の若の如し。自然に土上に生じて、絶る事なし。人これをまき返し、種をふつといへども、忽雨露の氣を受けて、生るが如し。されば歌の、歌を忘れて捨置くにまかず。まづ師弟の所作を止めよといふも、今の世の姿を、俄にいかにすべき。門人此わればこそ、師の説き置らまざる歌の歌さる處も傳へつべけれ。われ師の位に居ずしては、師弟有べからざるの理を説べし。かのづから受る人も、其意を會得して、歌の諸藝の修行に異ある事を知る也。其受る人

暫く師を云ひんんを知らず、己を師の位にゐる。○天地鬼神を感ぜしむるといふ事、大方さるべき理につけていへるものにて、實のさばかりの効驗とていなき事あるべし云々。總論ふかへすく云れざる如く、歌に限りて其徳勝るることなど、ふさび弁ずるにふよはず。讀得て默識すべし。○詩禮樂も、治道に妙用有げ見ゆるの畢竟聖人此代おして、政事の正しきよる事也。其政事不正時ふり、其妙用いかでか施す所あらん云々。此事に付て、いはまほしきことあり。知紀にかざらず、近世和學者のくせとして、漢學を虚器のことく、いひおとすおとあり。師總論の中にも、僅かに唐土の政事の上を評せられざる事ある、我國隨神かんたむらひに淳朴ある風俗、禮樂をまゝずして、そをいりざるに合せて、其こちさき教の程に治まり難しといへるふこそあれ、決めて聖人の教をおとしめられざるお非ず。詩禮樂各其功驗あればこそ、孔子の大聖も、第一に詩を學ぶことをのたまへれ。聖人の世政事正しき時に、妙用有りといひか。其政事、何をもてなま事ぞ。又何お妙用有ることぞ。治まらざるを治め、乱れざるをどくのふるが故に、妙用といひつべし。やがて孟子も、今の樂、猶古への樂の如し、といへるにあらずや。我神國といへども、數千歳を繼ておがれぬまば、今の世に在て、聖人の教によらざれば、棹楫なくして、舟をやらんとするが如し。國學

を思ひん人の、ますく漢の教を尊みまもるべき事にこそ。○猶考るに、開闢の昔より云々、されば三十一字の歌よとする事、實のさ古へを好む、風雅を嗜む人のすさびとて、廣く敷島の道おとへなすべきものおならず。もとよりこの、かゝるによしおしお競ひものする事ならむお、大方其道絶おんとするに及ぶべき也云々。おのれ師に親從すること、凡四十年。一度も此語をさかず。示し給ふ處、只一筋のさ。知紀のいゆる所の如き、師の教表裏ありて、著はし給へる書ども、自らものし給へる所と、二つお成ぬべし。さる事あらんや。新學異見初章おも、古への歌の、意も調べども、のへる、別の義あるにならず。ひとへの誠實より出れば也。誠實より成まる歌、やがて天地の調おして、空吹く風の物につきて其聲をおすが如く、おる物として其調を得ることなし。これを雲と水とに喩ふ。雲のをるや立ちて浪にまがひ、下りて雪を欺き、靡きて領巾とあり、聚りて峯をなす。水が行くや、乱れて文を織り、たへて藍をそめ、氷て鏡をかけ、とばして珠をおすが如き、百に千に變態を盡すといへども、皆意ありて然するおならず。只風によりて飄ひ、地についで下まるのさ。彼言の葉も斯の如し。短さの短歌となり、長さの長歌となり、見る物さく物のまに、其姿現れざる事おらず。是やがて情の物に觸る、かち也。

さる中に、心のづから調ありて、巧めるが如く、飾まるが如く、其奇妙たぐふべきものなきに至るの、天地の奇かに、斯誠より真細しきものなく、斯誠より至美^{ウツクシ}き物かければ也云々。猶總論の全意、その餘、著はし給へる書ども、此意の外なければ、通はして知るべきあり。されど知らざらん限の人あり、いかんせん。やがて總論の始に詠むことの難さあらず、知ることの難さ也。是を知る時の、よく詠むことも難からじ云々と云へり。何によりて知る事の難さぞ。おのまが狭き心より、名利人我の相を離れて、自然にまかせ果ることの難さ也。何によりて、よく詠むことの難からぬぞ。思慮お渉らず自然にまかせれば易し、其自然よりおまる歌の、天地感通の歌なれば、ことを暫らくよくよまるとす。道藝の上に於て、名聞利要、或は聞達をといふ境の、をさむる所作の上にかゝれば、學者のかゝんずる所也。歌の道藝の類をらねば、僅かに此念を忘るゝのみ也。猶かゝからずと云べし。此念のあらん限の、古歌のまばらなく、師の歌をもまことに聞知るべきあらず。師五十ばうりの頃、已にかくられぬる消息の中に、いつまでかはむるときは嬉しくてそしるときは悲しかるらん。と書き入れ給へり。師の常の志をまつべし。

古今集正義總論補註論 同辨終

古今集正義序註追考

熊谷 直好

これれ田舎に生ひたち、友達にすゝめられ、僅に歌の志ありて、初めて師を頼みきこえまゐらせし、十六歳の時なり。師の今の家つぎ給ひて、まもなき程にて、三十一歳にやれはしけむ。其後三年をへて、十九の歳京に登り、口づからの教をも受くる事になり侍りぬ。されど師も、始の程の、異なる考も少なく、其家に傳へさぬる事ども、世とひとし並のさとしなりしが、其頃はひに、かの古學者流の書ども、次々上木もなりて、世の中聴を改むるやうになりゆき、師も半の是を信じて、己等にもいひ示し給ふ事なりき。さて年月に志深う入立ち給ふに及びて、やゝ其非なる事も、いちじるく思ひ決めて、今のやうに教へ聞え給へるの、四十より五十の程なりけむ。中にもこの古今の序注の、力を盡し給へる事にて、幾千度考へ改め書き改め給ひけむ。まかし給ひて、上木にさへなし給へる上の、いかでか是に言加へ侍らむ。己この説をうけて、人々の乞に隨ひ、ねろくいひかたらひし事も、又幾たびにかありけむ。されどもこの偏に守らひ信じて、あまされたび物するうちにどかくいぶかしまるゝことの起るの、又自然の事なるべし。二十年ばかり昔、よみ解さし

をり、思ひつきたるおとの、又十年ばかり後に、かはれるもあり。いかにすれども、固く定まりて動かぬやうに覺ゆるもあり。其定まれるやうなるも、已が定むるなり。他より見む所の如何あらむ。されどさてやむべうもあらねば、をちく師にうかひ聞えまく思ひなりて、かくと申し侍りしに、さ先かいたため試よと、のたまひしを、年若い筆とるわざのむづかしくて、打やりかさ侍りしに、又此頃若き人達の、せちに乞ひ聞え給へるふよりて、此序文より、いひ解き試るに、一つ二つかひあげて、折もあらば師のさだめをも、うけ侍らむと、硯に向ひ侍りぬ。

いにしへより、此集の序文、注し來れる人多しといへども、うまく解き得がたき、もとよりめて、殊に六義をもて、難中の難とす。いかにといふに、其六義といふ事、詩序にありといへども、おきを以て詩にわたる、朱注なり。それやがて、受けがたきよし聞ゆるを、まして此方ふていへる、名目も考げなき事ふて、とりえなきものなるを、正しく紀氏の書きのせられたるふ、最初三節の文意などと迷ひ、いたく拙きのみならず、あまりに筋どほらぬ事ゆゑ、是なくばどこ誰をも思ふめれ。されば諸注こゝに至りて、筆さしたくべくもあらねば、已も心にちちぬことを、書きつけられたるべし。師の早く此序文詩に激したる意ありと、見られたるより、此六義も、詩の説をかりて、却りて詩を退

くるの手だてなりとして、解きなされしかば、快く解き得たるに似て、傍の人も大方信するやうに、なり侍る。されど其激文と見られたる所々、次に擧ぐるが如くなれども、恐らくいぢかふ侍らじか。紀氏此序中に擧げられたることも、先、素戔男、下照姫の二歌、難波津、淺香山の二歌、人丸赤人兩歌仙、歌の六義、六人の歌仙、すべて普く世にいひならせしむるを、書きのせられて、一事も紀氏の作意にあらざると知るべし。其證一々辨ずべし。文のいかも紀氏の作ふて、比類なきこと論をまたず。又かほどめでたき文中に、撰みもなく、世にいふまゝの、拙きこといもまで、書きつらねられたるを、いかもといふに、本文も師の注も、かへすくいはれたる、歌の衰へたりといふ事、いかにすれども、今の心ならひの離れがたき方より、其世の姿思ひ得られぬなり。衰へたりとて、世に歌少なきあらねば。ますく歌のもておそび多くして、上、后宮皇子の宮の歌合を始め、或は御屏風の歌など、下の好色の家の翫、乞食者の口のはまでも、歌のみいと多かりし。さるの只、いやしき方にのみうつりて、輕々しき翫物となりしより、歌の上に事々しく、實立たる事さまひ、中々似合しからぬやうにさへ、成りもてゆくまゝに、歌のおどにかゝれる文章なれば、紀氏といへども、凡世俗のいふまゝに、書きつらねられたるものなるべし。さてまゝ事の筋を究めて、深く正すやうの學風も、今の世のやうにあらざりけらし。師説も、

人丸赤人兩歌仙、難波津淺香山二歌などの、もとより世にいひ馴れたる所とせらる。只六義と、六人の歌仙とを、紀氏の作意と見て、ことわられたるも此あり。先其六人紀氏の定めならば、喜撰のよめる歌、多く聞えぬものを入れて、之かも其評をなせる、何事ぞや。もし和歌式を書きたる名あるふよるとならば、孫姫濱成もあるをや。又歌仙必六人とも限るべからず。五人七人ふてもあるべし。只當世歌仙とて、六人をいひはやすにつけて、僅に一人二人なり、それも古への如くいならずとて、さて其評を、れもしろく書けるのそ。其外に其名さこえたる人の、まなはち、といへる即の詞の世に並べ稱せられて、誰もよく知りたるものをさす詞にて、其名聞えたる人の、かの僧正遍昭云々と、六人ふかゝる、かのといふばかりの語なり。みづから初めて作意して、いふ語勢ならむや。味ふべし。六義もまた然り。そもくと文端を改めていひ出たる、これ又自己作意を述ぶるの躰ならむや。自ら作れるならば、窃に思へば、歌のさまの六なるべしとて、何とてか書くべし。世に六義とて、ことごとくいふに任せて、只其まゝをいへるのみ。又自ら作るとならば、少しの道理のある事をいふべし。たとへそへなせらへの如き、師の注もいへる如く、いかんよみわくべき。數へ歌の何事ともまき。祝ひ歌などの、多くのそへたとへたる多し。やがてさいれ石にたとへ、筑波山おかけて君をねがひ、人をも祝ひと、紀氏みづからいはれたるにあらせや。又なせらへよそへいふも、たゞ言のさまなるもあるべし。さばかり筋もなき名目を立て置きて、さいいかおと問はれなば、紀氏いかに答へ給ふべき。初三節の如き、道理を書きつらぬる人の作意ならむや。既お世にまねくいふことなれば、それお任せて書きつらぬ、いぶかる人もなかりしなれ。師説に之をさすけて、かの詩をたさふる文法にて、火をもて火をけすのたばかり也などといはれたれど、譬を引ていいかはも解かるゝものなれど、實事いかゝらむ。古來注者の難しとする六義、此序全意詩に激したりと見られたるより、六義も其衰をかへすのはかりごととして注し、快く解き得られたるに似たりといへども、恐らくい、思ひすごしにもや侍らむ。まへて激したりといへる所々も、只やすらかに見て、難なきにや。この最大なる所なり。猶激語と見られたる所々、次にいひ試む。

やまと歌の、一つ心を種として云々、注上略、さて詩學盛に行はれ、歌の人知れぬ埋れ草となりて、世に衰へはてたるを、此さび撰集の事、おぼし興されし時にあひて、其勅をさへかうぶりしに、いで此道をおはやけに復さむの心より、我やまと歌のと、はげましていへり。さい時俗の稱に従ひて、其意を寓したる也。此序の全意こゝにあり。心を用ひて見るべし。云々、此世おひ、やまと歌といひならはして、却つて、歌のといふ時の、耳立ちて聞ゆるなり。もとより發端の調をも、なさぬなるべし。今の世にて、詩といへば事もなく聞

え、からうたといふ時の、耳ごつが如し。紀氏もたゞ、時俗の稱のまゝにかゝれたるなるべし。我やまの歌いと、はげましていへりを見られたるの、恐らくの、過ぎたるにや侍らむ。又此大和歌いと書き興せるの、廣きことにて、日本歌によりていへるの、もとよりなれど、唐の詩も何も人のうたひ出る歌の、此理の外なれば、押しこめていへるが如し。されば却つて、此やまの詞、日本のみにかけて、唐の詩の、然らぬものゝやうに響く時の、理の上を妨ぐる意も、出でくるをや。只歌の云々といへると、少しもかはらぬ趣に、聞くべき事なり。今やまの歌といへば、少しことごとくしきやうに、聞ゆるより、寓意ありといへば、さにやともまきけ。常にまかいひなれたらむ世に、寓意ありとも、わりどの誰か聞きとり侍らむ。さといへ、歌の衰へたる世にあたりて、かゝる撰集の志と、承はられたらむに、素より其道を興さむの志などうなからむ、論なき事なれど、師の説の如く、其處々、正しく詩にあたりたる意の、紀氏になきことなるべきを、辨ずるのみ。總論にいへる、唐詩大和歌の異なる事などの、こゝにかゝはることにあらず。世中にある人といへる、世中の、廣く世界を盡したる語にて、日本をのみ世中といへるにてはあらざるをもて知るべし。

三丁こゝの鳥蟲の類に至るまで、世に生といける物の、時に感じ物に應じて、發する聲の、皆

歌なるをいへり。況や人としての、もだしやむこと能はず。又おほよそ作意を用ふるの、誠の歌にあらずとをわかつて、其本をさとせり。かつの唐歌の、我ものならず、自然にもどりてこちたきを、思はしむる意あり。されば何れか歌をよまざりけると、勵ませても書けり。いさとし生るもの、歌をよまざるのなし。皆歌をなむよみけるなど、事もなく書きふるせるとい、同じからず。うらの心の、詩にあたりたる激語なるを見ざるべきなり。といはれたり。是も有情の限り、歌あることを、廣くいへるあて、唐人の詩も何も、其中に含めて、鳥蟲も及びたる語勢なるべし。激語とまでせずとも、やすらかに見てありぬべし。總論追考に、詩歌を論ぜし中に、鶯蛙の聲など、打任せて、詩なりといひ難しなど申し侍りしは、一等級に論を立てたるあて、こゝに混さるべきにあらず。凡作意を用ふるの、眞の歌にあらずといはれたる所、今少し申し解き侍らむ。抑人の言語といふもの、何によりて、出来るぞと尋ぬべし。天地の間、生といけるもの多しといへども、皆生れてなすことゝては、獨食すると、寝るとのみ。其間、雌雄出合ふ時の、相交り子生むまでなり。すべて我身ひとりのみにて、他にかゝづらふ事、更にあらず。此故に言語を用ゆるに及ばず。只人のみ倫をなして、互にものし助けなして、世中を獨せず、木工の他の家を造り、民の他の食を作る、是ふよりて事業甚まげし。そ此まげき事業を、互に約しものするに、何ぞ

よき印なくして、心得難し。其心得やすきもの、聲にまぐものなければ、此聲にいろくわやどりをなして、符印に用ゆるやうになれり。太古獨化の神達の如き、言語なしといひてもありぬべし。穴居野處する時世の、自然言語も少なかるべし。事業まげくなりゆくに随つて、詞のますく多かるべき理なり。さて此言語の、俗に用を達する具にて、更に詠吟の爲にわらず。俗談に用ひらるゝが的當なり。歌の鳥蟲と同じく、感有る時の、まらずく聲にあらはるゝもの也。然れども鳥蟲の類の、事業なければ、心に思ふこと少し。只春陽に動き、清冷に感ずるのみ。故に歌も一筋にて、さまく聞くべきのふしもなし。人のかの事業まげきによりて、心お思ふこと多し。かれ千萬の情あり。且淺深あり。只一聲をもて吐きさらず、自然永くせらるゝなり。さて上にいふ如く、人の聲をわやどりて、用ひなれたる習われば、その永くなるに付て、俗談に用ひならしたる詞のやどはれて、出でくるなり。その義理を述るに意なしといへども、花を感じて、月と出まを。雪を思ふに、風と浮ばぬなり。たとへば人の死を哭するに、其人の上のみいはるゝが如し。されども元來歎聲にして、義理に涉らねば、義理あるに似たりといへども、俗語の如きならず。終にまどけなきものなり。凡作意を用ふるの、眞の歌にわらずとて、鳥蟲の聲をうらやむべからず。鳥蟲も事業まげくわらしむる時の、又言語いできて、人の如き歌よまむこと疑な

し。人の事業の上より、義理の中にありて、俗語を用ひなれたれば、義も理もあり、工もあるが如き、又自然なり。されば注中第一にいはれたる、音調の天地に根ざして、古今をつらぬき、四海にまがりて異類をすぶるものなり。言語の世々に移り、年々に流れ、かつ貴賤とへだて、都鄙とまがひて、定則なし。ざるを後人詞につきて此ち、調をいふの、本末をどりちがへたるものもて、大よそ違はざるこそ少き、うべならずやと。此一條の別に旨と人にも示されたれども、詞と調と對するものにわらず。歌の只聲の調のみありて、詞にあづからざるものなり。天地の間、生どしいけるもの、聲ありて詞のなきが、本性なり。既にいふ如く、人のみ互に物するが故に、不得止、聲に色々の文をつけて、印に用ゆ。されば詞の、偏に俗用を達するのみ。人も鳥蟲と同じく、獨するおとならしめば、詞のなきことなり。鳥蟲も人の如く、事業わらしむる時の、必詞出で來べきことなり。其詞の感外のものにて、不得止いひ出づるものなり。ふ感ずる時の、聲あるのみ。歌の天地の間、情あるもの、感の聲、其聲にそれく色音ある、これを暫く調といふなり。詞を先にし調を先にすなど、實の對すべきものわらず。師説も、調の天地に根ざして古今を貫き、四海にまがりて異類をすぶるものなりといへば、もとよりたがへるにわらねど、後人詞に付て後、調をいふの、本末をどり違へたる物にて、といへるをもて、調と詞と並ぶもの、

やうに、思ふべからず。

六丁かくも詩序にもたれて、さながら歌のいさを、あげられざる、やがて彼をおさふる、例の一家の文法なり、云々、かれをおさふるといふに、意あるまじきこと、既にいへり。是を例の一家の文法なりといへる、如何あらむ。よし其説の如く、此序激語もせよ。それいたまへ、此序のみのことなり。紀氏ならむからに、いつも、詩をおさふる筆づかひあらむや。されば文法といふまじきことか。たとへば千早ぶる神代、云々、この心わさがたかりけり。さ、其世にも、わさがたかりけらしといふべきを、分さがたかりけらしと結び、此歌もかくの如くなり、猶行末もまかなるべしと、いふべきを、此歌もかくの如くなるべしといへる類、もし紀氏の前に、其例なくば、一家の文法と、いひもまづべくや。

二十七さて歌のさす、六つなどいひて、其品をわくらむこと、絶えてあるまじきと、云々、丁表六義紀氏の作意ならざることを、既にいへり。同二十九されば此序の前に、此稱なく、此序の後に、此稱なしといへれど、此外に此稱なしとて、必紀氏の作と、定むべからず。勅撰の史にまら、もれたるおとのみ多しと見ゆるを、六義六歌仙の外も、いくらのことかありけむ。又必書にまらされずとも、世に普く、いひならしけむと、打まかせて書さむべし。

載べく、又それ記したる書の亡びたるも、なごりなからむ。されど唐の歌にも、かくぞあるべきと、いひ添へられたるのみ、紀氏の意にて、少し滑稽ありて、深き意ありといふべし。

六丁されば今の撰者たちも、萬葉の只一わたりのこととて、云々、萬葉集のよみとき難かりけむこと、後に梨壺の人々、點じたるにて知らる。されど今傳はる紀氏六帖の、紀氏の女のあつめたりといふに、多く萬葉の歌をひがめたる多し。梨壺以前も、さる點つけたる本のありて、凡い心得たることなるべし。それを猶正し直されて、古點の本出来たるなるべし。さればこそ、萬葉にいらぬ古き歌なども、のたまひ出し事なれ。人丸赤人時代達の事、既に世の誤なり。其上今の世のやうに、深くさはめいる、學風なかりけむと知らる。況むや此序にいへる、延喜五年始めて、めし出されて、仰事ありしまゝの勅語にて、奈良の帝人丸赤人に仰せられて、萬葉集を撰ませ給ふ。其例に任せて、四人の撰者、其後の古歌、今みづからの歌までも、撰みいれて、奉れどありしなり。紀氏にあづからず。されど紀氏も時代の違ひ心づかれなば、又筆づかひもあるべし。知られざりしおとの決せり。

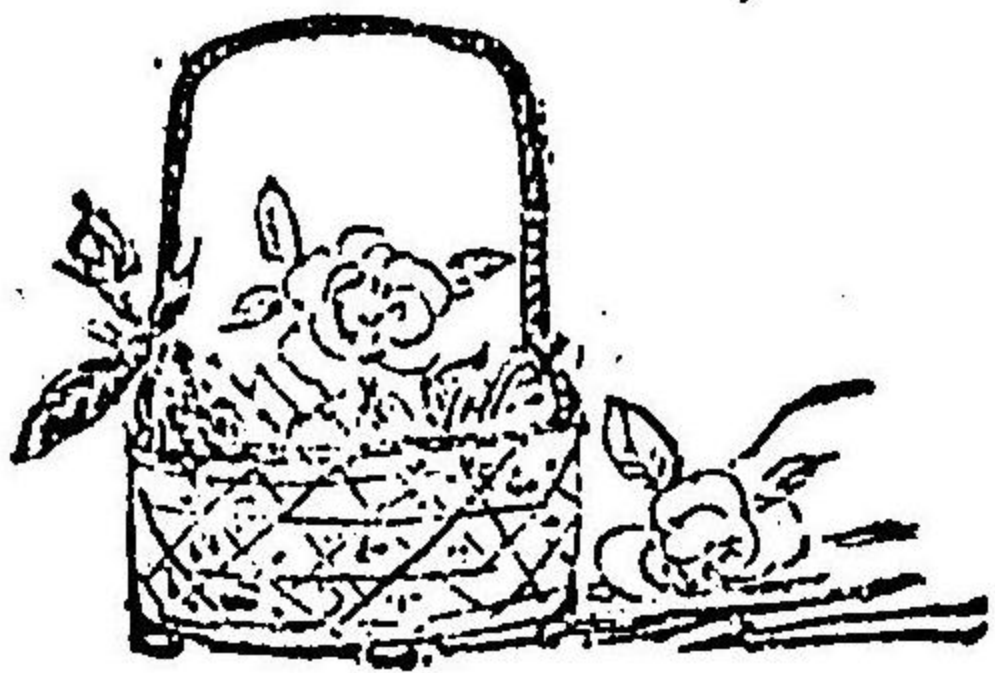
古今集正義序註追考終

浦の志は貝序

我師つねにいへらく歌の師にうけ習ひもて達る道にしもあらず折にふれ
 物もつけて心の動くまにくいひ出されたるはかな言なれば殊更にかい
 とめなどもせぬこそよけれとく忘れむもまた悪しからずとされば偶かた
 り聞え給へるをも我ら拙き耳に聞きひがめいひ違へて大かた失はれ行き
 なむあたらわざかなと歎かひをり侍りしにあらる日ゆくりなくめして數多
 の冊子とうで給ひといふのれ若かりしよりの歌を故東塙の大人あるしつ
 けおき給ひてかのみもとにありし反古なり今の我ものからなき形見とも
 見まほしきにかいぬきて得させよとのたまふをいと嬉しみ携へ歸りて寫
 しいづるついでに竊に一部かきとりおき侍りしが猶歌數をくなければあ
 かぬ心地せられて人々の聞きつたへ書きとめたるをもちち拾ひ集め
 かりに浦の志は貝と題して師の前にさし出し侍りしかば一わたり見給ひ
 てよしともあしとも聞え給はで打おき給へるをおなじ渚にあさりせむ友
 どちおも見せまほしくてかくいはかりものし侍りぬ

弘化二年九月

三井宗之謹識



浦のしほ貝

熊谷直好

春歌

年内立春 そめあへぬ柳の糸やなびくらむ年のうちなる春のはつかぜ
 はなをのみいそぐを人の心とて年のうちより春のさきにけり
 立春 天 大ぞらの梅うぐひすの外なれば音もかもなき春やたつらむ
 所々立春 春たつと峯のまつ原かすむより垣ぬの水を春がれそめけり
 今上御即位ましくける年元日立春なりけれバ

元 日 大君のまろしめす世の始とてとしもたゞしき春やたつらむ
 あけをまつ窓のともし火花さきてまづ我宿の春のさきにけり
 足曳のやままづかななるわかつきに星の光やあらたまるらむ
 わか水をくむ車井のおどすなり今こそ春もめぐりさぬらし
 ○夢だも結ばぬ程のうたゝねふこそ今年となりおける哉

年の始の長歌 若水といひてゆくめど若水と聞ての飲めど汲ごとくに若への

まさず飯む毎に老こそいませされ年のわか水

二日立春なりける年魚市を思ひて

おは伴のみつのあひさの初いちこ春さへけさの立にける哉
ひたきなく片山ざとの小柴がき年の越ゆれど春としもなし

春到氷釋 あつ氷とくるばかりのなけれども碎け易きに春をえるかな

東風吹春氷 はる風にいはずの氷とけぬらしはそ谷かはぞ春まさりゆく

春到管絃中 春風にあはいとけむと神代よりちぎりむまびし氷なるらむ

初春見鶴 あらたまる糸と竹とのまらべより霞たなびき春かせどふく

瀧音知春 よろづ代の春やたつらむ朝日影にはへる空に鶴ぞなくなる

心静酌春酒 ひどりして我くむ酒に限なき春のこゝろのこもりけるかな

都早春 おは君の都のそらにたつはるのあまる光や四方にみつらむ

卑春松 限なき千世のまじめの春なれば松の色おぞあらはれおける

子 日 わが心ねの日の松にあらねども人にひかるゝ事のみぞ多き

兼待子日 かまみたつ春日の野への小松原みつゝや人の子日まつらむ

霞中子日 春がまみたなびきのこま松もなし何處の野べに我子日せむ

餘寒 氷 はるながらなほ山風の寒ければ花がかへりて雪と見えける

餘寒 氷 うちどけし瀧のまら浪たちかへりもどの岩間に氷る春かな

霞 寒 鶯ははるとなげども松かはのいけのさゝ波こはるころかな

霞 寒 うちどけし春の心に似ぬものへだてゝたてる霞なりけり

朝霞 河口のみをのまるともま火の光も見えず霞む夜半かな

夕霞 ちはやふる神の鉢松をびえてもけさのいけるはる霞かな

山霞 けふもまた夕べになりて淡路島まつほのうらに霞たなびく

嶺霞 花になる春の心を見せしとや山のかまみにたちかくるらむ

上霞 はる霞まづかゝれとや音羽山せきのこなさに峰のなしけむ

海上霞 霜まろきあしの枯葉のそれながらけさの霞ゆる波の上かな

海邊霞 かの原のせともまらざ霞むなり跡なき波に春やたつらむ

海邊霞 大島のせとのたか波をさまりてかすむ春べとなりおける哉

湖上朝霞 志賀の浦のみぎはの氷うちとけて霞も波も今朝よりぞたつ

故郷霞 いそのかみふるき都いはる霞たなびく時もさびしかりけり

水郷霞 水けぶる伏見のさとの春がすみ人玄れずこそ立ち渡りけれ

野外朝霞 みやこ人けさはまだこぬ白川の田なかの野べに霞たなびく

關霞 をち方の野べの若草もえぬらしけさはか花みぞあさ緑なる

關路晚霞 いにしへもまだ遠からぬ關が原世のどかおもたつ霞かな

霞隔遠樹 まつ原の遠き千とせをきめたれば春の霞ぞはてなかりける

波の上に浮びてみえし松ぼらも霞のそこになりけるかな

彼岸の中日天王寺の西門にて

み佛のみねの糸ゆふ見ゆるかな西に入日のかげのうちより

うちわたす海の隈はどほけれどたなびきあまる春がすみ哉

山ざとい年のうちよりさなれてなくともいはぬ鶯のこゑ

わが宿の何を花とてうぐひすの昨日もけふも聲たえずなく

都びといまやさくらむ山ざとに初音のつけし春のうぐひす

朝霞 鶯のなくあさ聲にあくがれてけふも野べにと行くこゝろ哉

くれ竹のふし見の里をあさゆけばをちこちになく鶯のこゑ

朝日さすならびの岡の松の上になきかひしたる鶯のこゑ

すがのねのながき春日の暮るまで我宿になく鶯のこゑ

かきみたつ永きはる日もくれ竹にねぐらのえめて鶯をなく

かきむらむ程もえられて鶯のあかつきつづる聲はのかなり

梅の花みえしどころかあけわたる霞のそこのうぐひすの聲

鶯のこゑのにはひぞあまりける霞がくれおはなやさくらむ

はるがきみたなびきこめて鶯の聲もほのかに聞えけるかな

鶯のなきで出てつるあしたより谷のまたみつ岩たしくなり

いろみれいつともわかぬくれ竹に春のはしめを鶯をなく

いろかへぬ竹をばねきて鶯のあだなる花にうつるころかな

れほる夜の月ものこりて山まつの木のままもりくる鶯のこゑ

人とはぬ片山ざとの花もひでに春のまづさくらぐひすの聲

くる春のあふさかやまをこえけらし關のこなたに鶯をなく

思ふどち皆老ぬれど野べにきてこゝろの春の若菜をすつむ
早春 雪 うちむわてつまむと思ひし春日野の若菜も見えず雪はふりつゝ
正月に雪いたくふりける年

花どのみつねにも見ゆる白雪のはるの梢にかゝりけるかな
たつと見し春は跡なくなりけり山にも野にも雪のふれゝば
春 雪 花どのみふりくる雪はささらぞの梅の匂をからむとやする
あし引の山おも野おも雪ふりて春めきがたき春にもある哉
うつせみの定なきよの春なればかすめる山に雪もふりつゝ
日ごとに雪ふりける春

うめの花友まつ雪と見えぬらむ二月かけてふらぬ日すなき
人の許より蒜に歌そへて贈りたるかへし

如月もまだあさづきにふる雪の色の根白にはひぬるかな
残 雪 つれなくも消えざりけりな若草のもゆるか上に残るまら雪
山 残 雪 春たてど花とも見はずあしびきの山まゐるたへにのこる白雪
さゝ波の比良の遠山ゆきながら霞がくれになりけるかな

遠山 残 雪 日かげにいとくるともなき比良の峰の雪も霞に消にける哉
杜 残 雪 布引のたきのこはりやいかならむ生田のもりに雪が残れる
正月二十八日琵琶の大曲つたへ給ふべきことによりて花園三位の君の田中の御殿に参ら
むとすゝにあしたの程雪いたく降り出たれど辛うじて下加茂のあたりまで行きて河原に
さしかゝるにとく里人のふみわけたる跡ありて中々まよふかたなく御殿に到りつきて

ひとすゝに思ひきぬればふり積る雪の中おも道ありけり

其夜は御殿にあかして二十九日空なこりなく晴れたるに比叡のふもとまで行く事ありて

梅 まだきにぬ雪の上からよく風もみに寒からずなりにける哉
めづらしど誰か見ざらむ一年のはなのはじめの梅のはつ花
さく梅のにはひも雪に交りけりなべてや花の盛とれもはむ
春かぜいふけどふかねど山里の垣ねの梅のにはひなりけり
かをとめて来る人もなし山里のかきねのうめは盛なれども
紅 梅 うめの花八十のこたねの外なればから紅ににはひてざさく
夕 梅 木づたひし鳥はねぐらに歸れどもくるゝもまらず梅花みる
夜 梅 ぬば玉のやみのうちなる梅の花めにみぬあやの句なりけり

野梅 にはふ香のなからましかば梅花よるは心にかゝらざらまし
 野なれどもぬしありげなる梅花手折やせまじ見てや行べき
 行路梅 をる人はをりもかさせど玉鉾の道のゆくてにさける梅かな
 隣家梅 わが宿に隣のうめい雪をれてたもはぬ花のさかりを不見る
 梅始開 さればこそ梅のはつ花さきにけりなくとたもひし鶯のこゑ
 家梅始開 梅花さくかげ見よど我やどの池のこほりも今日やどくらむ
 折梅花 うめの花人のためには折しかど歸るまばかり我やかざさむ
 梅移水 いづくまでにはひゆくらむ梅花かげ見し水に今のちりつゝ
 梅慶年香 ふる年の雪の内よりさきそめて春まちえたる宿のうめかな
 梅風 ふく風のみな梅か香になりぬれば中々春のまるべどもなし
 梅薫風 駒なべて今こそゆかめふる里の梅のつかひの春かぜぞふく
 春風ハ梅のにはひになりはて、松ふく音ものぞけかりけり
 夜風告梅 昨日まですきまの風といとひしに今宵嬉しき梅が香する
 梅花誰家 なつかしと常に見いれし宿の中に梅の花さへさきにける哉

ある所にて 雨ちかみかすみしきたる夕暮にうめの匂ぞいやまさりける
伏見山なる梅を見けるに

やま道の春かぜさむし梅のはなちれば誠のゆきもまじりて
わが門のまたり柳のかた糸をむさびとさきと春かぜぞふく
柳 加茂川のはとりに住みける頃

鶯のつぐるもまたで川づらのまたりやなぎの春めきあけり
友なる延清が許より年の暮毎にいと長やかなる柳を贈り侍りしを正月たつあしたの初花
といけおきてめではやし侍りしにいとせ百濟野の片はとりに引こもりて世ふも交らずな
り果侍る物からさすがに年の暮のいとなみにつけて思ひ出せしもあらぬいひ遣しける
うちはへて長き契とおもひしにこそしやたえむ青柳のいと
それより廿年あまり柳をおくることたえず

彌生ばかり畫工一鳳と共に朝とく伏見をゆくに澤めく處ありて柳あり霧さへ横ざりてい
はむ方なくおもしろかりしを歸りて程へていひやりける

朝 柳 忘れずやまら忘れずよ二人してこゝろにどめし青柳此いと
あをやぎのめにあまりたる朝露をおのがなみごと鶯のなく

門柳春久 我かどの柳のいとをくりかへし今年も春になりけるかな
 河柳 つなでひく淀の川舟こととはむそめかけたりや青柳のいと
 遠郷柳 うちわたすむかひの里の青柳のめにつく春になりける哉
 行路柳 道のべのえだり柳のあさみどり見すてゝ過る人なりけり
 はる風お結ばれながら靡くめりたぐ別路のわをやぎのいと
 水邊柳 かりたちて水にむまべど青柳の影なる糸の手あもかゝらず
 水邊古柳 我やどの池のみぎはのふる柳おはれ春をばわままざりけり
 早蕨 やさすてし枯野の原此さわらびの二度もゆる物とこそ見れ
 人の許に土筆をおくるとて

若草 やがて今かいその森の若草のわかきほどこそ人もつむなれ
 ものへ行く道おて

春草短 若くさのもゆるを見れば山里の垣根を春のはじめなりける
 野春草 つむべくも緑になりぬ春日野の野もりもえらぬ雪の下くさ

春日望山 野を廣みちくさ百草おふれどもたゞな草を人のつみけり
 福島に居ける頃宇治なる定安が許に文遣はすに

春天象 わが宿にいざ櫻ばし梅田橋かけても来ませ野田のふぢなみ
 春人事 大ぞらお糸さへわそぶ春の日をどち籠りて誰かすおさむ
 春里 さくら花ちれるを見てや足引の山田の賤いさねおろすらむ
 春野 梅此花にははぬ里のうぐひすのかのれなきてや春をえらむ
 春風 くれ竹のふし見のさとい鶯のなくにつけてや人もとふらむ
 春風 是るかにもあがる雲雀の聲さゝて野への景色を空に知る哉
 春風 春雨のくもはれがさになりぬらし松の音高く風たちけり
 春風 よし野山人だのめなる白雲にさなびかれてもゆくこゝろ哉
 春風 いつしかと思ひし花の陰にきて明るをさへに待ちわたる哉
 春風 ひとりのお心ちらさでまつ花のさかむ盛もひさしからなむ
 春風 霞たつ春の遠山はるかにもまぢこそわたればなのさかりを
 春風 いとくもちり果けりと思ひしはまだ咲あへぬ山べ也けり

初 花 霞たちかへる雁がねなくなべに初花さけりみよしの、やま
彌生なかばの頃嵐山にまかり侍るにいつより長閑にて花の盛もはへまさりて覺ゆるに加
へて大内立坊の御沙汰あらせらるゝ事さへ畏うも思ひはうり奉りやられ侍りて

見 花 九重のくもの上にてさく花も今日よりどこそ聞わたりけれ
見 花 よの人に見れこされじと山櫻かくれさきさき花のさくらむ
静 見 花 みな人のかへるをまぢて櫻花月のかげふといでてきふけり
遙見 山花 老ぬれば目さへかすみて山櫻いと色こそわかれざりけれ
船中見 花 音にさく若木の櫻見てゆかむいと近く漕げ須磨のうらふね
庭なる櫻ちりける頃

老ぬれば心の花にならねども身をうぐひすとなかぬ日のなし
いたづらに盛すぎたる身をもちて今年も花にちりや残らむ
花 盛 開 そとなくふさくる風も匂ふまで花の盛になりけるかな
み吉野の花のさかりを見渡せば青根が峯も名のみなりけり
消えて又つもれる雪のよしの山かくれさきだつ櫻なりけり
花有 遅 速 わが宿の二木のさくら遅くとく咲きちるからに春ぞ久しき

花の盛茂夢に見て後に

うつゝにて見るもあだなる櫻花夢のうちにもさきにける哉
庭花 久 芳 風だにも音せぬやどと思ひしに花のさかり久しかりけり
花の頃井上某と長柄なる鶴満寺に遊ぶ

春の日のながらの里お遊べどもあかぬの今日の心なりけり
花 下 送 日 あぐかれて遊ぶ所のかはれどもけふも暮しつ花かげおして
花 慰 老 つとめても花になさむと思ふまで春の心のおいにけるかな
日枝の山なる音羽の瀧の花を見て

さく花に鶯なけどおくやまの春のこの世のもれどしもなき
さく花も瀧もましるにあらはれてくれゆく山の奥ぞ寂しき
東山なる東漸寺にて

春だにも猶ひと訪はぬ山さとの花の雪もあどなかりけり
花の頃嵐山にまかりて

花になる心の色はうすけれどさぎ野の春のよそにこそ見ね
花 邊 行 自 遅 おもほえず日の傾きぬさくら花いと道おの咲ずともよし

月入花灘暗のゆふぐれのはかの梢の波に似てこぞかくれゆく三日月の舟
 折花 たまぼこの道ゆき人のたをりくる花や見にゆく梢なるらむ
 をらばやと思ひよりつる櫻花下枝のなほも高くぞありける
 夕花 夕日かげ入りはてゝこそ足引のどほき櫻の見えわたるなれ
 岡花 垣ねより見こしの岡の櫻ばなへだてぬ宿にまづにはひけり
 みやこ人大内山の花にゑひてならびの岡にうたふこゑする
 岸花 おともせで岩こす浪のやま川のきしねにさける櫻なりけり
 人もなき所に花のおくれたるを見て
 ちりのこる花のあれども見る人の春の心ぞうつろひふける

糸櫻のふりたる

老木どもなりににけるかな糸櫻くる人いかにあらたまりけむ
 又ある所にて 人忘れぬ岩ぬのいけに影見えて山したざくら今さかりなり
 おもふことなくて花みる春もがないける此世の思出にせむ
 森 櫻 我かどの森の木葉のまげければ木末の花のちりてこそ見れ
 森の宮といふ所に櫻多くうゑられける年

櫻 ことしより櫻をもちの宮あれば神のこゝろよ花にゆるすな
 水邊花 櫻花さてもや人にあかれぬと心みがてら散らずもあらなむ
 ながれてのゆくへ定めぬ山水のこゝろもまらでちる櫻かな
 瀧邊花 岩まよりおちくる瀧の早けれどどこかおもちる山ざくら哉
 松間花 松のまら驚のむれる松と思ひし花をうけたる木末なりけり
 雨中花 花の雲おほふとばかり思ひしにやがてぞ雨も降出でおける
 山中花 やま里の花の心もやすからひちかふもちかぬいふ人ぞなき
 山中夕花 しみし人にくれぬ先にどいに果て小どりさへづる山ざくら哉
 野宿花 くさまくら花の陰あて結べとや宿かすが野のうぐひすの聲
 花交松 住吉の松の木の上にさく花のむかしにへる浪かどを見る
 かりやまきらす花櫻いかなれば松のこきはか枝かはすらひ
 霞中花 どののはぬ程をば見えぬ習とやかすみ隠れて花のさくらむ
 風前花 たわむまで風のふけども山櫻ちらぬぞ花のさかりなりける
 遅櫻 ささそめし程に似たれどやま櫻おくれし花の色なかりけり
 長崎なる諏訪社奉納 社頭櫻花

落花 花 さら人も神のみまへの花を見てわが日本のはるやえるらむ
櫻ばな雨にまじりてちる時のみぞれふりしく心地こそすれ

夕 落 花 櫻ばなちりのまがひに暮おけり今宵のいかに夢もまどはむ
花のみな垣ねばかりにふかためてふそにちらすな春の山風

落花 隨 風 やま櫻かぜのまにくちる時又ひとさかりめづらしき哉
落花 如 雪 さくら花日がさの上にもちりかゝる音さへ雪にまがひける哉

京の花見にのぼらむとする頃人のえさせたる櫻の枝のたけに餘れるを瓶にさし置さるるが
づらにちりはてむをしまれて又人にゆづりなごすとて

我宿に花はなきこそ嬉しけれ折りたる枝もほだしならずや
腰篋といふ椿の筑前の太守の難波の館にありて類なき花なりある人のおくりたるを瓶に
さし入れて置たりしを又ある人見て大根にさしこみ土に埋みおけりよく生つくもの也と
教ふるにさふせめといふ我齡いかにぞたとひ根をはり生立つとも二年三年の程に咲く

へさかひ今日えたらましかば一日見はやしてたりぬべしふくめる一枝の明日こそと思ふ
ぶにいとほかなからずやのさいさて植るべ植まねとて
かけりても我たま椿かへり見むぬしなき宿にさくと思ふな
ある人牡丹をうゑよとてはさせたるに

春 雨 今さらに身に願ひなけれどももうゑてや待たむ花の上の富
つれなくとふる春雨のうたゝねにくるを明ると思ひける哉
臍なるかげも見まいを打はへて月のさかかに春さめぞふる
はる雨のあまもふりなむけふのこと思ふともどち物語せむ
春さめのあとの嵐になりけりぬれて匂ひし花やちるらむ

曉 春 雨 〇はるさめの雲間はれゆく有明にまたり柳のつゆぞこぼるゝ
夕 春 雨 何をして今日にくらさむ菅の根の長さがうへに春雨をふる
閑居 春 雨 わしびきの山のいほりの春雨にふりはへてくる人を嬉しき
閑中 春 雨 池水に見はてのみふる春雨の音さくよりもさびしかりけり
はる雨のふるさ友ども語らへど暮むともせぬ今日の日長さ
山家 春 雨 春さめのふる山里のゆふぐれの思ふ友こそこひしかりけれ

浦のしほ貝 春歌

田家春 かねてわが思ひしよりも寂しき入りぬる山の春雨のころ
はる霞たちかへらせばいその上布留の山田のあれや果まし

故郷春 種ひたす田中の井戸に影見はて水のそこにもなく雲雀かな
うづらのみよまと思ひし故郷も春のひばりの床とこそなれ

野徑雉 長き日をくらしして歸る住吉の遠さと小野にきいすなくなり
玄なてるや片岡山になくきいすかた戀ならしなれも妻なし

岡雉子 春 駒 わしたかの山邊にたてる春駒の千里のはかも思ふなるべし
人ならばあげやまくらひいな髪の日をさす迄になりし若駒

夕雲雀 野のくれて芝生も見え成にけりいつ迄揚る雲雀なるらむ
空になるうかれ心にはてもなき野邊の雲雀の落つる時あり

野徑雲雀 雲雀あがる夕日の空を見るほどに野邊ゆく道の暮果にけり
雲雀あがる夕日の空を見るほどに野邊ゆく道の暮果にけり

田蛙 鶯の木づたひちらま花をうけて小田の蛙のふのがどなく
かきみしく堀江の浪にくられど碇とるなりわけのそぼ舟

江上春曙 名所春曙 ものの花見はこそ渡れ夢人のふしみの里のはるのわけぼの
あけぬとて霞の袖やははふらむねくたれ髪のかつらぎの山

隴 光なきねる月夜をあはれとてねもせぬ袖に梅が香ぞする
さく花の色さやかに見るべきに春しもつきの隴なるらむ

春月 幽いづる峰入る山の端はたがはねど覺束ないやかぼる夜の月
むら雲のたにまゝになる時もなほはぼるなる春の夜の月

夜舟伏見にはて、京にゆく西の方を望みて
大原やをしほのやまの雪ながら霞みてのおるありわけの月

春月 曉静 よもすがら霞みくして山のはの明くるもえらぬ月のかげ哉
さもおその隴づく夜のそらならめ心あてなる雲間だになし

遠山春月 是る霞たなびきくれし山のはにある三日月の影のかなしさ
江春月 芦の葉の霜がれながら春の夜の月ぞかきめる難波江のうら
河上春月 こぼりだにいまだひらけぬ櫻川つきの影こそまづ匂ひけれ

故郷春月

旅宿春月

歸雁

歸雁

歸雁

夜歸雁

呼子鳥

燕

燕

燕

燕

燕

かげもなき臙月夜にわたれどもそこさへ見ゆる白河のみづ
 ふる里の玄のぶ昔もはるけきに月のかげさへ朧ぼろなる哉
 ふるさとの臙月夜をきて見れば昔のかげのかまむなりけり
 月のかげくさの枕にかまむ夜のみゆるゆめさへ朧なりけり
 わしびきの山田もいまだかへさぬに思ひ立ぬる春の雁かな
 かりがねの歸るを送り芦さづの朧なむ雲井に今ぞなくなる
 ことづてむ雁の使にかへれども常世の國にまるといなし
 春ながら霞まぬ月の秋に似てくるかどまがふ歸るかりがね
 わさな／＼近き芦べに見し雁の雲井はるかに聲ぞきこゆる
 かりがねの同じ芦べにあさりして空ゆく程も離れざりけり
 かもいろき臙月夜のかげを見て空にと雁のねもひたつらひ
 春くれぱ、とても霞め、る雲ちとや夜と、いはず雁のゆくらひ
 いつよりか霞みぐくれて呼子鳥人にまられぬ春をへぬらむ
 人だにも忘れはてたる我宿にかへるつばめのあはれなる哉
 つばくらめ今朝より軒に聲す也こぞの古巢やかけ直すらむ

籬外燕

苗代

雨後苗代

桃

夕桃

桃谷のあたりの桃を見て

桃花流水依然在

曲水宴

江亭春望

董菜

つばくらめ去年の巢立も歸り来て軒の籬のひまもとむなり
 賤の男がきのふせき入れし小山田の苗代水にちるさくら哉
 はるさめのふりて晴れぬる苗代に蛙の聲もうるはひにけり
 思ふこと色にいでも咲おけりものこそいはね娘も、の花
 永き日のほどもまられて桃の花けさ見しよりの咲増りけり
 も、の花にはへる色のなかりせバタふの夕日を何に留めむ
 み渡せばめも及ばぬの三千年にあまれる桃のさかり也けり
 桃の花みなかみ遠きもろこしの昔のかげもにはふけふかな
 から人の浮べそめたる盃のながれを汲みてあそぶ今日かな
 かぎりなき流にまかす盃の千代ともさゝじきみがよはひの
 住の江のうらの磯家に歸りきぬかまみて見えし海人の釣舟
 はるがすみ棚びきつれて摘むもの春日の野への董也けり
 ふる里のあさちか原となりはてい生ふる董をつひ人もない

野 菜 のべみればうを紫にさく花を誰かすみれと名づけそめけむ
 摘 菜 賤の男がかへし残せる白鳥の鳥羽田のすみれ今さかりなり
 思ふどち莖つみふれまたも来むまばしかへすな春のを山田
 少女子がつみそろへたる莖草さらにもさける花かどぞ見る
 晴天糸遊 たが心まづうちとけて大空にあそぶ糸といわくがれおけむ
 杜 若 さきにけり池の岩ねの杜若こきむらさきのなみと見るまで
 三月つおもりの日杜若見にゆきて

池見ればいま盛のかきつばた越てや春のいなむとすらむ
 かか見れば底もさきて杜若はなの敷こそかざりまられぬ
 躑 躅 秋ならぬきり島山の岩つゝじもみち葉よりも照まさりけり
 春 山 嵐 花の上におほふばかりの袖もがな春のやまべに嵐もどふく
 藤 ふち波の春ささいでて時鳥まつにもかゝる花おどありける
 藤 いきはなる松にかいれるかひもなく移りにけりな藤浪の花
 扉 藤 かのつから藤の編戸となりしより開くを花に任せて見る
 水 邊 藤 藤の花ささぬるときに水底にうつる松さへめづらしきかな

浦 邊 藤 かすみたの長き春日にうちなびきふちの花さくたる姫の浦
 松 間 藤 くれてゆく日數も末の松のはにこえてぞかゝる藤なみの花
 嵐山を思ひて 嵐やまわか葉がくれみさく藤のかげ水底にいまか見ゆらむ
 野田なる春日の社の藤見に行く石碑ありて野田の玉川のあととす
 たま川の野田の糸藤ちりにけり貫きとむるはるしなければ
 ある僧賜紫の願によりて彌生の頃京に上りけるに遣はしける

ふち浪の花いろ衣かけたればまつもかひある君がたびかな
 藤花隨風 ふくたびに靡かゝりてふちの花終ふ風のものとなりぬる
 橋下藤花 山がはの橋の上より見くごせば岩根のふちの今さかりなり
 浦江にゆく道あて

欸 冬 冬 ひとれてゆく野川のそよのかへる子を雲の影かと思ひける哉
 ものいはぬ色のかひこそなかりけれ垣間見えける山吹の花
 むねをだに春のかたみと足曳の山吹のはな折ればちかつかい
 君またで八重も一重もちりにけり見せましものを山吹の花
 欸 冬 盛 なく蛙こゑのまげくも聞ゆなり八重山吹のかげや見ゆらむ

河 欸 冬 かはづなく細谷川も見えぬまでさきなびきたる山ぶきの花
 岸 欸 冬 吉野川きしねの水のふかけれど底まで見ゆる山ぶきのはな
 里 欸 冬 ふるさとの垣の山吹さくころの花をりくくに人もとひけり
 雨中欸冬 かのかみふ妹が姿に似たるかな雨にふいたるやまぶきの花
 夢の中につけたる歌

暮 春 世のなかの塵にけがれぬ山寺のわか井のもとの山吹のはさ
 いてゆく方も去られぬ春なれば亂れてのみぞ花の散ゆる
 暮 春 鳥 ちる花も春もどまらぬ世中をかねてまりてや雁のいおけむ
 春盡鳥聲中 今さらば春をどきばと願ふらむ松に歸りてうぐひすの鳴く

夏 歌

更 衣 物事になるればをしき心かなつりの袖もかへうかりけり
 ぬきかへばうづるひ易き心ぞと花のたもとや我をうらみむ
 朝 更 衣 今いたい花のころもをぬきかへて別れし春のなごり忘れむ
 一今いたい花のころもをぬきかへて別れし春のなごり忘れむ
 朝 更 衣 一あさ風のさむしといひて花染のはるの衣のまたふあそ着め

霧中更衣 月も日も旅のそらに忘れられて衣がへさへときなかりけり
 首 夏 朝 卯花のさくつきたちのあしたふの賤が垣ねもなつかしき哉
 首 夏 雲 いぶき山つねもかゝれる白雲の重なる夏にかりにけるかな
 首 夏 藤 藤の花かなたこなたにかけじとや春におくれて咲始めけむ
 岡 新 樹 初音とくなくと思ひし時鳥をかの木末もまげりあひにけり
 新 樹 風 なつ山の若葉が上に風ふきてうらなつかしき頃あもあむ哉
 音もせで若葉を靡くはづかしのもりの下風たれまのぶらむ
 緑樹連村暗 なつのみなをぐらの里となりけり梅津桂も若葉のみして
 卯月の頃雨すこしふる日
 風ふけば楓のわか葉ひるがへりころに物の思はるゝころ
 尋 餘 花 たづねてむ人をだまて遅櫻とても春おのかくれたりけり
 残 花 在 何 なつ山のまげみが下に葉がくれてありとも見えぬ遅櫻かな
 谷 餘 花 鶯のかへるふる巢のまをりどや谷のさくらかさき残るらむ
 松陰餘花 松かげに花ものこりてをぎそ山夏さへさむきうぐひすの聲
 鶯 なつやまの松のこずゑの鶯いたかきにすぎてきく人もなし

卯花

かく山のまげみかもどの卯花の垣ねおさける色にまされう
色わけてさやけかりけり山里のなはしろ垣にさけるうの花
沖つ鳥うといふ花のいかなれば驚の色おもあやまたるらむ
降る雪の色にまがへる卯花のちるをも消ゆといふべかりけり
路卯花 うの花のかきねもまらぬ都人さつきをやみの物といふらむ
卯花隠路 戀しどてあとおふ人もなう山おなにうの花の道うつむらむ
薄暮卯花 まろたへの色の限を見よとてや卯花がさにくれわたるらむ
合歡木を見てのなつの日の長き盛のねぶの花ゆめかどばかりにはふ色かな

葵

夏

夏

夏

森

徑

夏

葵草かざしそめけむそのかみのそのうみ山の神をまらむ
吾妹子にまのびあふひの花なれば葉隠れてこそ咲初おけき
夏草 あふぐまでなれる夏野のなつ草の雪まに見えし緑ならむや
ふむをだに厭ひし物を野邊の草いりたちぐさく成おける哉
夏露 野邊みればさばかり茂き夏草にあしたの露のおき餘りけり
森草 山城のときはの森のまたくさも更にまげりて夏の來おけり
徑草 なつ草の繁らば茂れよの中おもとより跡のとめじどぞ思ふ

水邊夏草

行路夏草

行路夏衣

せりつみし淺澤水のなつくさのまげみか下になりける哉
此ころのかのれと結ぶなつ草にあどこそなけれ岩代のをか
なつ草のふかき所にきて見れば早むしのねも茂り合おけり
たかしまのかち野の原の朝露にぬれてすいしきなつ衣かな
めゆひうるなるみの里に成おけりたちきてゆかむ夏の衣ふ
屋上に涼臺を構へて人々あつまりけるに臺頭有酒といふことを

郭公

よもすがら露にうてなの初まといのむ盃にはしのかげ見ゆ
時鳥までぞ來なかず松が枝にかゝれる藤の葉になりけり
ほどゝぎす初音のいまださかねどもぬなは賣る也藤浪の里
ふちの花さけるを見れば郭公まつにこゝろもかゝる頃かな
ほどゝぎすなきし處やたち花の小島がさきの名残なるらむ
我宿の花たちばなやにはふらむすぎがてにのみなく霍公鳥
ころもでの森の若葉にあめふればやま時鳥をりかへしなく
あしひきの山時鳥ながこゑのふる聲ながらめづらしきかな
人の許に遣はま文をあづかり傳ふる人の許にたび重なりぬればいひやりける

春あさひかりのたよりも頼みてむわがふみつてよやま時鳥
讃岐の國にゆく人に

いははさへ打てば聲ある白峯の山ほどゝぎほ思ひこそやれ
待 時 鳥 時鳥さの木ずゑおとあもふよりかげ立ち去らで待ち渡る哉

かくばかりまつになかずば杉みだになけや五月のやま時鳥
伊丹のあたりものせしのち壽性知晴といふ尼たちよりあはざりつる事と悔いて歌あまた
かい入れて文おあせたるかへり言に

時鳥まちなかね山のまちなかねてかへりしの中に聲ぞきこゆる
未聞時鳥 郭公おほかる山と聞しかどわが越る日の鳴かせぞありける
初 郭 公 わがためいけふを初音を時鳥なきふるしけむ程のまらぬど

卯月の頃宇治人の文のかへり言此奥に

茶つみうた歌ひさしてや宇治山のやま時鳥はつね聞くらむ
尋 時 鳥 郭公なくと人のつげせとも八重山こえば聞かざらぬやの
首夏郭公 いつまでか花のなごりにわくがれむやま時鳥初音さかずば
森 郭 公 まらなみの浮寐のゆめの時鳥けさの生田のもりになくらむ

里 郭 公 故郷にはの木末の高ければ山ほどゝぎすやどりてぞ鳴く
山家郭公 ほとゝぎすなく山里に来て見れば若葉の外の色なかりけり
人傳郭公 はるかなる生駒のやまの時鳥人づてならできくよしもなし
遠 時 鳥 はるかおもやま時鳥きこゆなりたが爲もらま初音なるらむ
夢中郭公 こよひいと思ひし夜半の時鳥ゆめの中おもきゝぞもらさぬ
郭公驚夢 時鳥このあかつきのひと聲にのこれる夢のあらじぞ思ふ
郭 公 稀 時鳥あまたのなかぬ里なれど今年のこと稀おぞありける
やまどほき里にしあれば郭公さく年さへぞすくなかりける
水無月の末郭公をさして

まぢくてきつるよとも郭公おくれしこゑの珍しきかな
雨中郭公 よもせがら楨のいたやに雨ふればなく郭公こゑもきこえず
雨後郭公 このほどの雨にかはりて時鳥はるゝ空よりふりいでにけり
郭 公 頻 なきにけり又なきにけり時鳥こよひいく聲なきあかすらむ
なつ山のあを葉が中に時鳥なくねもまげくなりあけるかな
住吉みて子規のなきけるが年へて後又詣でけるにその木の枝猶ありければ

蟬此姿を見て ほととぎす昔の聲の聞えぬどわりし木末のかはらざりけり
 雨 後 蟬 秋たゝばいかにせむどか蟬の羽の衣のうまき造りそめけむ
 衣はす蟬をなきたつ五月雨もはれむどすらし天のかぐやま
 瀧 邊 蟬 たきの糸くり返してもなく蟬のわのが衣をおるとなるべし
 晩 夏 蟬 なつもはや末のまつ山なく蟬のこゑも乱れて聞えけるかな
 朝とく蟬をさきて

菖 蒲 杉の葉に朝ざりたちて日ぐらし此聲いさぎよき朝ぼらけ哉
 から衣ぬぎていでたるうつ蟬のよの心からすいしかりけり
 菖 蒲 年ごとに人のひけどもあやめ草さゆる事なし長き根なれば
 五月雨のくもの経間の月かげに軒のあやめの露も見えけり
 曳 菖 蒲 なには江のまこも交りの菖蒲草かを尋ねてや人のひくらむ
 あやめ草ひけば限もなきものをたれか浅香の沼といふらむ
 刈 菖 蒲 家ごとに菖蒲をかりの世なりとてやま時鳥あともといめむ
 夏 月 さらでぶに明る程なき夏の夜をふけてもいづる月の影かな

短 夜 月 なつの夜のわくるもまたで入る月のいかふ短き心なるらむ
 浦 夏 月 月の櫻麻のをふのうらなし葉を茂みもるかげうとき夏の夜の月
 江 夏 月 さみだれの雲間をもりてつぶら江の菖蒲が淵に宿る月かけ
 たが爲になれる今宵の涼しさぞ月のいり江の松のまさかぜ
 湖 夏 月 露ふかき朝妻舟にかかどめてわけこそわたれ夏の夜のつき
 夏 月 透竹、かはそひの笹のまの竹まのびおもいでくる月の影の涼しさ
 あ る 夜、我宿の椎の葉まのさもるつきひひかりあらしとぶ螢かな
 早 苗 けさ植ゑし山田の水やすみぬらむ蛙の聲をきこえそめたる
 さ苗とる山田のそこと見えぬどもをこしに歌ふ聲を聞ゆる
 五月の末鳩野菜が野田の庵に人々と共に田植見おゆく夕さり雨ふりいでて遠近のけしき
 いよばかりなし盃あまたさびめぐりて酔のすさみにいひ出たる歌
 打わたす小田のさ苗をみさかなに今日よりとりてかさくら
 しふる五月雨を大みきにすゝめたまへば天地の外おも遊ぶ
 心地して山時鳥かへらぬにまかじとのみを鳴き渡りける
 朝 早 苗 けさあまるさ苗の露に裾ぬれて朝かげすいし小田の細みち

早苗多 五月雨の晴間にいでて見渡せば野田の山田もうゑ果おけり
 丹波幸教が許に一本植たりける竹に水そゝぎていと涼しげなるに新竹といふ事を人々い
 へるついでお 千代の露まづ一夜こそ結びけれきのふうゑたる宿のくれ竹
 若竹のすなはならぬのなかりけりいつより節の狂ひ初けむ
 夏のあしたに わか竹の葉末の露を見ざりせばあしたの床の起うからまし
 新竹隨風 わか竹のふのが姿もなかりけり風になびかぬ時しなけれバ
 竹風夜涼 今年生の竹のよまがら風ふけバさらく夏の心地こそせぬ
 竹亭陰合偏宜夏

鵜川 よもまがら葉分涼しき月かげにふしよく見ゆる竹の下いは
 さよふけて波のかに見ゆる篝火の遠きあしまの鵜舟也けり
 瀬鵜河 鵜飼舟はや瀬を下るほどならし篝のかげもどまらざりたり
 夜鵜河 かり火の影あて見ればぬば玉の夜河の鮎もたけおける哉
 名所鵜河 鵜飼舟かりさすらし夕づく夜小ぐらの山に影のうつれる
 鵜舟廻島 浪の上の月の光になりぬらしまがくれてもさす鵜舟かな
 照射 ままをがとす火影に夏山の若葉の露のかずも見えけり

嶺照射 狩人のつみもむくいもなつ山の木の下開にともしのみして
 さつ人のわざのをぐらの峯と只鹿のたちごを思ひこそやれ
 餘りおも後の世えらぬ業ぞかしらみだが峯に照射すべしや
 連峯照射 ますらをが八峯の照射繁けれどもれてや鹿の妻にあふらむ
 兼葭水暗 繁りぬふ葦間の水此暗き江にひるも水雞此あまどきこゆる
 夜水雞 我やどの垣ねの水のあさけれごよるの水雞の聲どきあゆる
 曉水雞 なつの夜の明くるもまたで叩く哉こゝろ短き水雞なりけり
 りわが門のたゝく水雞に叩かせて夜の明ぬとも明じとぞ思ふ
 月前水雞 月をしは山月かたおけバ大くらの入江のみづに水雞なくなり
 わしひきの山下水お人まぬ月のやどりてくひおなくお里
 水雞驚夢 旅人のゆめのうき橋なかたえてかつらき山にくひおなく也
 五月雨 おづまやのかやが軒端の五月雨の玉水ならで音づれもなし
 さまごまおちはら葦はら水あえてわたし塙遠し神崎のさと
 五月の雨いたくふりて
 浪かゝる汀のあしと見ゆるかき底になりぬる岸のむらたけ

螢

去るべなき闇の空もあがる哉ふのが光をたのむはたるい
さよ中にすだく螢のかげ見れば玉こきちらす心地おそすれ
露ふかき若葉がくれお飛びくれバ螢のかげもみどり也けり
聲たむいなかぬ螢もかひむなきもゆる思のかげし見ゆれば

江 螢

三島江を玉江と人のいふ事の螢のすだく名おこそありけれ
はたるとぶ夏にしなれば奥山のたきの白玉よるも見えたり

瀧 下 螢

なつ草のまげみが下の螢火のゆるものから涼しかりけり
うれしくも螢のかげの見えし哉さし忘れたる窓のひまより

窓 邊 螢

狐川ともす火かげと見えつるのみくさがくれの螢なりけり
螢照 水草

螢火乱飛秋已近

ほにいでも秋も近しとすき原みだれてのみもとぶ螢かな
雨の夜螢を見て

雨の夜螢を見て

ふりしきる雨夜の星と見えつるのぬれて飛かふ螢なりけり
何となくおもしうかりける夜

月かげのいたらぬくまに螢とび思ひ捨て、ぬらぬる夜や

朝とく物へゆくに螢の道に出てはひあるくを

道のうへをあるく螢の光なき吾身おしあれば世をも照さず
同じ日山に入りて

奥山のまさきのかづら花さきてあさおもしるき水のかと哉

ものへゆくに めぐりてもとはまほしき小田越にさける棟の花陰のやど

岡 棟

うつくしき妹と並びの岡おこそ思ひあふちの花咲きけれ
なでして ませゆひて育てあげたる撫子の人に見ゆべく花さきおけり

翟 麥 露

人まねぬ思ひの露やかゝるらむいもが垣ねのなでしこの花
里蚊遣 火

あし火たくあしやの里の蚊遣火の煙さへこそすくなかりけれ
すがはらや荒たる里の蚊遣火の煙さへこそすくなかりけれ

蓮

風わたる蓮のうき葉の露を見て定なき世ぞおどろかれぬる
かそろしき劍の池のなかにだに心のはちす生ふとこそきけ

はちま葉の清き心のあまりよりこそなる露も玉とおそなき
極樂のはちま葉の上にかくつゆの濁るもすむも玉とこそきけ

池 上 蓮

はちま葉の生ふるを見れば池水の底の心々にこらざりけり

見池 遠くのみ人み見よとや池水のおきにはちすの花のさくらむ

夕 顔 〇はるくくと蓮の立葉をさわぐなる風わたるらし大くらの池
世中をなるとまかせてすむ宿の軒端にかゝる夕がほははな

垣 夕 顔 〇ゆふ顔の花のさかりに又もあむこつまの里の垣根あらずな
たゞ一人すゝみがてらの垣間見に見てこそかへれ夕顔の花

氷 室 なるいでむ其みの程のまらねども垣根いぶせき夕がほの花
まろたへの卯花垣のゆふ顔のふりつぐ雪のおちこそすれ

扇 中 扇 〇つき日をいかにへだて、松が崎雪も常磐の物となしけむ
雪だふもきえぬ氷室の山なれど春のかたみの花ぞとまらぬ

遠 立 涼 〇はた、神たつのおぎとの白玉をくだくと見ゆる夕立のあめ
日本の富士の高ねをうつしてやもろこしびとも扇をりけむ

夕 立 晴 風はやみかたへ晴れたる夕立の雨のうちよりさす日影かな
夕だちの雲はれわたる空見ればふる程よりも涼しかりけり

納 涼 わればかり結ぶと思ひし山水のそこに宿れる夕づきのかみ
岫雲亭といへる亭池に臨めるいとよし

夏 眺 望 うちませしものこの竹の隙を荒みはしむ涼しき池の上うな
ゆふべく、涼みがてらにふく笛の聲高殿にきこえけるかな

夏 夕 風 くる、迄植えていにけるを山田に笠のかげのうつりける哉
久しく日てりて後一夜雨いたくふる

夏 夜 待 風 人よりも嬉しきいろにあらはれて雨まちえたる野邊の草哉
風をのみ入れて寐あける聞の戸を待つ人ありと人や見るらむ